

第1章 近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

小泉 翔太

はじめに

京都大学植物園遺跡の重要な調査成果として、配石遺構群と土器埋設遺構群がある。調査当時においては、縄文時代の遺跡さえ希薄な西日本にあって、これらの遺構がまとまって検出された事例として稀有のものであった。

現在では西日本でも事例の蓄積が進み、多くの遺跡において同種の遺構が確認されるに至っている。事例が蓄積されるにつれて、本遺跡で確認されたような、配石遺構と土器埋設遺構のみが群をなして構築される状況が特異なものであることも明らかになってきた。したがって、近畿地方においてこれらの遺構がどのような展開をたどり、そうした変遷過程の中で本遺跡の状況の普遍性と特殊性がどのように位置づけられうるのかが、今日的な課題として挙げられよう。

本稿では、近畿地方およびその周辺における配石遺構・土器埋設遺構の調査および研究の進展を踏まえて、これらの遺構に対する論点を整理し、研究現状と課題の抽出を試みる。次いで、近畿地方における同種の遺構の集成をおこない、多様な性状を示す各遺構の類型化を図るとともに、その通時的な変遷過程を把握する。そのうえで、京都大学植物園遺跡において検出された配石遺構と土器埋設遺構の位置づけと性格について若干の考察をおこないたい。

1 西日本の配石遺構と土器埋設遺構をめぐる研究史

配石遺構と土器埋設遺構は、いずれも呪術・祭祀・儀礼などと表現される精神文化にまつわる行為、なかでも葬墓制に関連する遺構として認識され、縄文時代の文化・社会構造の特徴を示す要素として多くの研究が蓄積されてきた。これら全体にわたる研究史については、これまでに先学によって幾度か整理されていることから、ここではその成果を参照するに留める⁽¹⁾。あえて雑駁にまとめるとすれば、配石遺構は墓または祭祀空間、あるいはその両者として、土器埋設遺構は土器棺墓あるいは儀礼的埋納行為として、主として機能論的な視点から追及がなされてきたものと言える。西日本においても、岡田憲一がこ

これらの遺構を墓制のなかで総括している〔岡田憲2019〕。こうした研究動向を背景としつつ、本節では近畿地方を中心に西日本における配石遺構と土器埋設遺構に関する研究の進展をまとめ、論点の整理をおこなうこととしたい。

(1) 近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構研究史

戦前期の研究 西日本において縄文時代の土器埋設遺構が最初に学会に報告された事例は、岡山県津雲貝塚の幼児骨が納められた「土器棺墓」である。1919年に清野謙次と大串菊太郎がそれぞれ古人骨蒐集を主目的として実施した津雲貝塚の発掘調査で、幼児骨埋納の「土器棺墓」が確認された〔清野1920, 大串1920〕。大串調査の資料は不詳だが、清野調査資料は晩期中葉に比定できるものである。津雲貝塚では土坑墓に埋葬された成人骨も多数検出されたため、大串は「土器棺」が小児・幼児を対象とした葬制であったとの理解を示している⁽²⁾。また、1922・23年の愛知県吉胡貝塚における清野の発掘調査においても、縄文時代晩期に属する土器棺墓群が発見され、幼児骨が内部に遺存する例もみられた。

近畿地方では「土器棺墓」の発見はなかったが、津雲貝塚の調査に先立って実施された大阪府国府遺跡の発掘調査において、埋葬成人骨の頭部に深鉢（前期中葉・北白川下層Ⅱb式）が被さった状況で検出された事例が確認されている〔濱田1918〕。小金井良精はこれを「甕被葬」と呼称し、頭部の保護を意図したものとする理解を示している〔小金井1923〕。その後、1930年代に近畿地方でもわずかながら事例の蓄積が進んだ。京都府北白川遺跡群では、1934年に羽館易・小林行雄らによる北白川上終町遺跡の調査において〔梅原1935〕、石囲炉跡から1個体の有文深鉢の半分が横倒しの状態で出土した（図70）。この深鉢は中期末葉・北白川C式にあたる。近畿地方において、広義の土器埋設遺構が最初に報告された事例と位置づけられよう。1930年の奈良県宮瀧遺跡の調査で土器埋設遺構の可

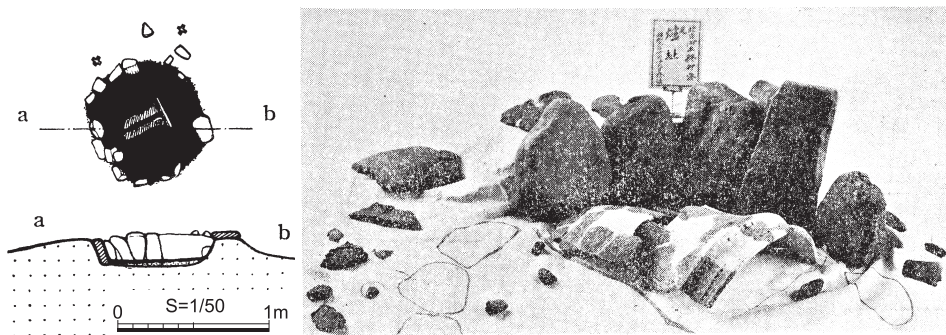


図70 北白川上終町遺跡の石囲炉実測図（左）および出土状況復元（右）（梅原1935より引用）

能性がある中期末葉の深鉢胴部下半や、配石の可能性のある人骨・獣骨集中地点が確認されたほか、1938年の奈良県橿原遺跡の調査では晩期の土器埋設遺構と集石遺構が検出されている〔末永1944・1961〕。1938年には、滋賀県杉沢遺跡の発掘調査において、「合わせ口甕棺」2基が検出された。縄文晩期後葉の凸帯文土器（五貫森式）の深鉢2個体を用いたもので、弥生時代の甕棺墓との関連が注意された〔小林行ほか1938〕。

以上のように、西日本においては日本考古学の黎明期から配石遺構・土器埋設遺構が知られていた。特に土器埋設遺構に関しては、津雲貝塚や吉胡貝塚における幼児骨の出土や、杉沢遺跡の合口甕棺など、縄文時代の墓制を検討するうえで重要な事例となり、その後の研究を方向づけたものと言える。

戦後Ⅰ期の研究 戦後には調査事例の蓄積が進むとともに、個別研究にも進展がみられた。便宜的に、京都大学植物園遺跡の調査・報告のあった1974年を区切りとして、それ以前を戦後Ⅰ期、以後を戦後Ⅱ期としてみてゆきたい。

戦後Ⅰ期では、特に滋賀県の醍醐遺跡と滋賀里遺跡の2遺跡の調査が重要な事例として挙げられる。小江慶雄は、醍醐遺跡の調査成果を報告する中で、「石造特殊遺構」について検討をおこなった〔小江1953〕。醍醐遺跡の調査では、径25～60cmの円礫と大小の角礫からなる「礫塊群」が検出され、石材が円磨度の高い河原石であることや検出した状況から、人為的に持ち込まれた礫と認識された。この調査区に隣接する地区において尾坂憲蔵

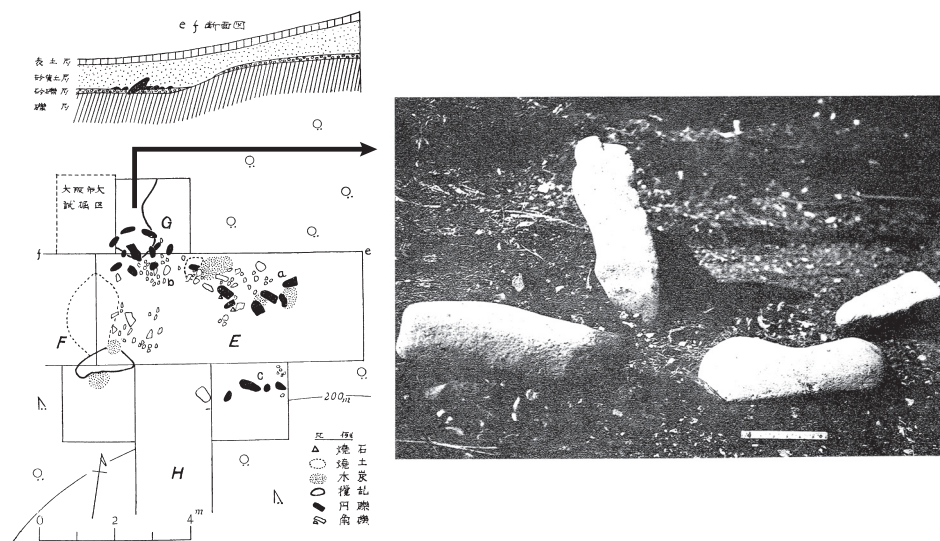


図71 醍醐遺跡の「石造特殊遺構」（小江1953に加筆）

が実施した試掘調査においても同様の礫塊群が確認されていたため、小江は調査状況の聞き取りを踏まえて、立石を取り囲む円形状の列石遺構を復元している（図71）。この列石を含めて、報告では3基の単位にまとめられた。これらの遺構の時期については、遺構の上面に堆積した遺物包含層に攪乱等が認められない点から、包含層の形成以前に構築されたものと推察された。また、当時知られていた「北海道、奥羽、中部諸地方の縄文式遺跡の一部において知られる環状石籬・環状列石墓・石造遺構等」との類似にも言及されている。遺構の構築時期や形状は慎重な姿勢が取られるものの、小江の報告は近畿地方における配石遺構研究の端緒と評価できる。ただし、醍醐遺跡の配石遺構が構造的に明確ではなかったこともあり、一事例としての言及にとどまり、具体的な比較検討までには至っていない。

坪井清足は、滋賀県滋賀里遺跡の調査において、中期末葉の土器埋設遺構を検出したことを報告した〔坪井1951〕。この遺構に用いられた土器は、当時醍醐式と呼ばれた関東地方の影響を強く受けた大型深鉢と、在地の里木Ⅱ式の系譜をひく星田式の二個体が組み合わせられたものとされ、異型式土器の共存の点でも重要な資料と位置づけられた〔岡田茂1965、泉1985〕。その後、滋賀里遺跡ではJR湖西線の建設にともなう発掘調査により、縄文時代晩期の土器棺墓・土坑墓群がまとまって検出され、当該期の集落構造や葬墓制を検討するうえで重要な資料となった〔田辺・加藤編1973〕。

またこの時期には、特に九州地方の縄文時代晩期に属する土器埋設遺構について、弥生時代に盛行する甕棺墓の源流として関心がもたれ、弥生文化成立における系譜等を主たる問題とした研究が進展した。鏡山猛は、北九州地域の弥生中期・須玖式期の甕棺墓の起源を明らかにするために古式（前期・遠賀川式）の甕棺墓を検討するなかで、縄文時代晩期の甕棺墓にも言及した〔鏡山1953〕。愛知県馬見塚遺跡や滋賀県杉沢遺跡において合口甕棺が発見されている点について、弥生時代の甕棺葬法が近畿・東海の縄文時代末期に影響を与えたとみる考えと、縄文時代晩期の甕棺墓の伝統が弥生時代に引き継がれ発展したとみる考えの両論を併記した。この研究はその後、賀川光夫により継続して取り組まれた〔賀川1969・1974〕。賀川は、土器棺墓が群在する様相を墓域の固着化とみなし、集落の固着化とともに狩猟採集社会から農耕社会への変化を示す指標と位置づけ、縄文農耕の存在を傍証するものと位置づけた。その結論については渡辺誠らの反論もあり、検討すべき課題は多いものの、甕棺墓を単に縄文時代墓制の一形態として扱うのではなく、生産様式や社会関係の観点を取り入れた点で、研究の深化がうかがえる。

いっぽう渡辺誠は、西日本における後晩期の「埋甕風習」を、東北日本で出現・盛行し

た「文化複合体」の一要素と捉え、九州地方の「埋甕」も後期初頭以降にその西漸が九州北部まで達したものと位置づけた〔渡辺1974〕。そして、「甕棺」の人骨出土例から検討を加え、埋葬される対象が縄文時代と弥生時代では異なっている点から、賀川の述べるような弥生時代の甕棺墓への系譜的連続性は成り立たないものと結論付けた。

すなわち、これらの研究によって西日本の土器埋設遺構を、弥生時代・九州地方の「甕棺葬」と関連付ける立場と、縄文時代・関東地方の「埋甕」と関連付ける立場の両極が明確となったものと言える。

京都大学植物園遺跡の調査 中村徹也は、京都大学植物園遺跡の概要を報告する中で、配石遺構と埋甕についても所見を整理している〔中村徹1974〕。この時点では、配石遺構8基、埋甕6基が認定され、先史第3層を遺構面としていることが示された。遺構の年代については、出土土器の大部分が縄文時代後期前葉に編年されることから、この年代範囲におさまるものと位置づけられている。そして、配石遺構の機能としては、甕を埋納するもの1基（IV号）、土壇を有するもの3基（I・IV・VIII号）、骨片が検出されているもの4基（I・III・VI・VIII号）、耳飾が発見されているもの1基（VIII号）という調査成果に基づき、「配石墓」と認識された。埋甕についても、一部の甕内部から骨片が出土していることから、「甕棺」の可能性が指摘されている。すなわち、当該調査区を墓域として認識しており、異なる二つの墓制があったことを示すものとする考えが示された。

泉拓良は、上述の中村による概要報告を受けつつ、京都盆地における縄文遺跡の動態をまとめるなかで、京都大学植物園遺跡の調査成果を紹介し、配石遺構と土器埋設遺構についても検討を加えた〔泉1977〕。泉は、配石遺構9基を認定し、さらに甕6を取り囲む石列もこれに準じるものと評価した。配石遺構と埋甕の系譜についても言及され、いずれも東日本に起源を求めうるものとされた。そして、埋甕から甕棺へと変化する過渡的な段階として評価し、遺構の形態や骨片の散布状況から、慎重な姿勢をとりつつもいずれの遺構も墓としての機能を有していた可能性について言及している。さらに、本遺跡の埋甕・配石遺構群が北白川遺跡群の縄文集落における儀礼・祭祀空間であった可能性を示唆し、集落構造における配石・土器埋設遺構の「心理的空間」における意義を指摘している。

以上のとおり、本遺跡の事例は、「埋甕」として報告されていることに示されるように、第一には東日本における同種の遺構の影響によるものと理解された。いっぽうにおいて、骨片の検出があった点から墓制とのかかわりで、甕棺墓としての機能が想定され、さらに後期前葉という时期的な評価も相まって、前述の「甕棺」と「埋甕」の折衷的・移行的な

位置づけが与えられたものと評価できるだろう。

戦後Ⅱ期の研究（1975～） 京都大学植物園遺跡の発見以降、近畿地方においても数多くの縄文遺跡が調査され、重要事例が蓄積されることとなった。また、蓄積した資料をもとに、集成研究や個別研究が活発に進められた。

土器埋設遺構については、千葉豊による集成研究が一つの画期となった〔千葉1989〕。千葉は、近畿地方の縄文時代中・後期の埋設土器について中期後葉・後期初頭・後期前葉の時期ごとに特徴をまとめている。近畿地方においては、中期後葉に東部地域（三重・福井・奈良）で屋内例がみられるようになり、時期が下るごとに分布が広がって屋外例が優勢となること、後期前葉でいったん途絶して晩期前葉以降にふたたび甕棺として盛行することが指摘され、基本的な様相が明らかにされた。そして、近畿地方における埋設土器の特徴の時期的変遷が、おおむね東日本でのあり方と相似的な展開をたどることから、東日本からの風習の伝播によって成立・展開したものと位置づけた。さらに、埋設土器の用途については、特に屋外埋設土器については埋葬用容器＝甕棺を主たるものとしながらも、岡山県津島岡大遺跡において堅果類が貯蔵された事例があることから、多様な用途・役割をもっていた可能性にも触れられている。なお、事例の集成とともに土器埋設遺構研究にかかわる論点の整理もなされ、特に、この種の遺構にかかわる用語の整理や、分析属性の分類と検討の方向性についても、以後の研究に与えた影響は大きい。

植田文雄は千葉の研究をさらに進め、九州地方を含む西日本を対象に、縄文時代中～後期に属する「埋甕」50遺跡125基を集成し、中部地方から近畿地方以西への伝播過程を論じた〔植田1991〕。出現・盛行期の点では、近畿北部では中期後葉から、三重県では中期末葉～後期初頭にみられるのに対し、近畿中央部では後期前葉の縁帯文土器期に盛行し、九州地方では後期中葉以降に激増することから、西方へ向かうほど後出する傾向を指摘した。埋甕遺構の伝播経路に関しても、中部山岳地方を起源として、中期末葉～後期初頭に近畿北部の日本海沿岸ルート、中部の関ヶ原～淀川水系ルート、南部の伊勢本街道ルートの三方から西進したものと想定している（図72）。

このように、千葉および植田により、近畿地方で縄文中期末葉から後期前葉に盛行する土器埋設遺構が、東日本からの影響を受けて成立・展開することが、具体的な資料の分布状況と属性相関から導かれた点は重要な成果と言える。

他方、九州地方では縄文時代後晩期から弥生時代にかけての「甕棺墓」の展開について、90年代を通じて研究の進展がみられた。橋口達也は弥生時代の甕棺墓について検討するな



図72 植田文雄による埋甕の分布および伝播ルート（植田1991より引用）

かで、その系譜として縄文時代後晩期から継続するものと位置づけた〔橋口1992〕。さらに坂本嘉弘は、九州各地の事例を集成し、土器埋設遺構の成立と展開を具体的に提示した〔坂本1994〕。まず、成立に関しては前述の植田の論考を踏まえ、「東日本の文化複合体の西進」の一要素として、後期初頭から前葉の時期に本州から「埋甕」が伝播したものと位置づけた。そして、後期中葉・西平式期に有明海沿岸地域で「合わせ口の埋甕」が成立し、後期末葉には「九州型埋甕」として晩期初頭にかけて九州全域に分布を拡大することを明らかにした。さらに、縄文時代の「埋甕」と弥生時代の「甕棺墓」との関係性については、前者の

特質を「集落内の生活空間に埋設される」点とみなし、後者が生活空間から分離した墓地に形成される点で葬墓制の転換がある一方、墓地の形成や土器の埋設方法は縄文時代からの伝統を引き継ぐものとする重層的な理解を示した。翌1995年には、山田康弘が九州地方の土器埋設遺構を集成している〔山田1995〕。山田は、埋設された土器の内容物にも注目し、

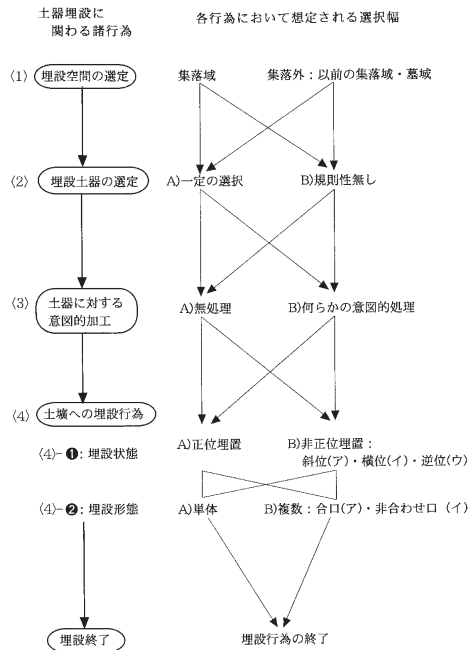


図73 土器埋設にかかわる諸行為の選択（石川2001より引用）

この種の遺構の機能について検討を加えた。

こうした基礎的な検討を受けて、石川健は埋設される土器の器種選択や埋設方法に着目し、「土器埋設行為」として行為論的に類型化した(図73)〔石川2001〕。さらに、土器埋設行為の変化と、土器の器種および精粗の差異の変化(石川は「土器様式の構造変化」とする)との関係性を分析し、社会的背景の追及を試みている。結論として、九州地方では後期中葉・西平式期に「埋設土器」が文化システムの構成要素となったが、後期後葉から晩期にかけては「土器埋設行為」に地域性が生じており、それが「土器様式の構造変化」と連動しているものと指摘した。これを踏まえ、晩期末葉から弥生時代にかけて北九州地域で盛行する凸帯文土器と大型壺の「甕棺墓」は、それ以前の埋設土器とはかなり異なる様相を示す点を予察的に述べている。

立岡和人は、後期中葉から晩期初頭にかけて、近畿地方において土器埋設遺構が途絶する点について具体的に追及した〔立岡2000〕。立岡は、晩期中葉に土器棺墓群が成立する背景について、後期の土器埋設遺構との比較、および列島における埋設土器・土器棺墓の展開から検討した。結論として、後期前葉以前と晩期中葉以降では土器の埋設方法が異なっている点から、これらに系譜的連続性は乏しいものと結論づけた。また、後者は西日本において広く認められ、土器型式における類似性とも共通することを指摘し、これを「汎西日本的斜・横位埋設圏」とする考えを提唱した。すなわち、縄文晩期中葉における近畿地方での土器棺墓の盛行については、土器型式にみられる影響関係と並列的なものであり、いずれも九州北部からの影響によるものとする理解を示したものである。これに対しては、中村健司が近畿地方の事例には浅鉢を蓋とする「九州型埋甕」〔坂本1994〕が乏しく、彼我の地での埋設方法に地域差が大きい点から、系譜的に異なるものとみなす考えを示している〔中村健1994・2007〕。

上述のとおり、資料集成から系譜論・機能論に至るまで多くの研究が蓄積された土器埋設遺構に対して、配石遺構に関する体系的な研究はあまり多くない。そうした中で、1990年に開催されたシンポジウム『縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』において示された家根祥多の研究は、一つの定点となろう。家根は、近畿地方から九州地方までの西日本全体を対象として配石遺構を集成・分類し、特徴的なあり方を示す早期と中期末葉の二時期について検討を加えた〔家根1990〕。ここでは配石遺構の機能・用途として「祭祀」と「墓」の二者を想定し、分類にもこれを反映して前者を「①狭義の配石遺構」、後者を「②配石墓あるいは土器棺を伴う配石墓と考えられるもの」に大きく二分した点の特

徴と言えよう。そして、これらの時期的変遷を早期と中期末以降の二時期に分けて検討し、それぞれの特徴と集落構造における位置づけなどを概述した。「祭祀」と「墓」との分離については、主として後期の列島東北部に盛行する環状列石を中心とした配石遺構研究において問題となってきたところである。西日本においても配石遺構の事例が確実に増加し、こうした研究のなかに位置づけることを試みたものとみなすことができるだろう。ただし、家根自身も言及しているように、ここで提示された分類は認定に困難があり、機能論的観点による概念的な資料操作が先行したものとと言える。すなわち、分類群の独立性や、分類相互の関係性が不透明であった点が課題として残されている。

こののち1990年代前半に、滋賀県小川原遺跡、三重県天白遺跡において、それぞれまとまった規模の配石遺構群が検出された〔中村健1992, 中村編1993・1996, 森川編1995〕。こうした事例から、群集的に構築される配石遺構群の記念物的性格を捉え、集落構造における位置づけについての検討が進められた〔岡田憲2005〕。しかしながら、遺跡間での配石遺構の構造的差異や共通性など、遺構そのものに対する研究にはあまり進展がみられなかった。

こうした中で、山陰地方を対象に「土坑を伴う配石遺構」を取り扱った青木和寛の研究は重要である〔青木2017〕。青木は、山陰地方の「土坑を伴う配石遺構」について規模、配石形態、出土遺物等から機能について検討した。特に、機能の判明している土坑について形態や規模、深度から類型化を図り、「貯蔵穴モデル」と「土坑墓モデル」を提示して、「土坑を伴う配石遺構」の機能を追求している。その結果、これまで報告されてきた土坑をともしなう配石遺構のなかには、一定程度「貯蔵穴モデル」に合致するものがあり、必ずしも埋葬や墓制にかかわらない遺構が混在することが明らかにされた。これは、配石遺構と呼称される遺構には、実態として多種のものが混在していることを明確化したもので、配石遺構の体系的分類の必要性を喚起するものと言えよう⁽³⁾。ただ、配石遺構の機能の推定に際しては、あくまで土坑の規模・形状からの類推に留まり、遺構の性格が確定されたわけではない点には留意すべきであろう。

(2) 論点の整理

以上にみてきた研究の展開をふまえ、現状における配石遺構・土器埋設遺構の位置づけおよび課題となる論点を系譜・編年論と、機能・用途論の二点から整理しておこう。

配石遺構の系譜については、家根や中村がまとめているように、西日本では早期前半・押型文期にさかのぼる事例が確実に存在する〔家根1990, 中村健2007〕。しかし、その前

後の時期には類例が乏しいために、出現の過程やその変遷・衰退について不明な部分が多い。現状においても資料の蓄積が進んでいるわけではなく、この点は今後も課題として残る。

配石遺構のもう一つの画期は、中期後葉に求められ、東日本の影響を受けて成立するものとする理解が通有となっている。ただし、出現期における配石遺構の形態的特徴や、近畿地方における定着の経緯などについて十分に検討されているわけではない。その後、近畿地方では、後期前葉と後期末葉の二時期に配石遺構の盛行期があることが知られる。各時期では配石遺構の集落構造上の位置に変化があることが指摘されており、集団の社会関係も含めて重要なものと考えられている〔岡田憲2005〕。一方で、配石遺構そのものの分析は立ち遅れていると言え、系統性や構築方法の時期差などは積極的に論じられることは少ない。配石遺構の構築方法や用いられる石材に多様性があり、実態としては極めて多様な遺構を便宜的に総称しているに過ぎないことは大きな問題であろう。他地域における同種の遺構との関係性や、各遺構の変遷過程、そして遺構の性格を検討するうえでは、こうした諸属性の基礎的な分類と類型の整理が喫緊の課題と言えよう。

配石遺構の機能・用途に関しては、祭祀か墓、あるいはその両方を合わせた葬送儀礼の場を示すものであるとの理解が通有となっている。他方において、青木和寛が示したように土坑をもつ配石遺構には貯蔵穴と同様の形態・規模を有するものが含まれており、その弁別が問題となる〔青木2017〕。前述の基礎的な分類の整理とともに、配石遺構にともなう遺物の種別にも着目した検討が必要である。

土器埋設遺構については、中期後葉に初現的な事例がみられ、中期末葉には定着するものと考えられてきた。その系譜としては、中部高地を中心に縄文中期に盛行する「埋甕」が想定され、その影響下で成立するものと理解されている。しかしながら、狭義の「埋甕」は竪穴建物の出入口部に逆位埋設することを基本としており、近畿地方でみられる事例とは差異が大きい。また、初現期には屋内埋設（埋甕）が主体的であったものが、屋外埋設へと変化することが指摘されてきたものの、その根拠となった屋内埋設土器の事例は北陸・東海西部に偏りがあり、近畿地方中央部とは土器型式分布圏も異なったものである。過去の集成研究より30年が経過し、事例の蓄積も相当に進んでいることから、あらためて集成と一般的傾向の把握を進める必要があろう。このとき、単に属性のみを取り上げるのではなく、石川が「土器埋設行為」として示したように、土器埋設遺構の各属性を土器の埋設に至る一連の行為として復元・比較することが有効であると考ええる。

土器埋設遺構の機能・用途としては、主として埋葬に関するものとして認識されてきた。

ただし、西日本においては、人骨をともなう土器埋設遺構の事例は1%程度にとどまるうえ、その事例はほとんどが晩期後半に位置づけられる〔中村健2007〕。したがって、棺としての機能は確定的とはいえない状況である。さらに、岡山県津島岡大遺跡において埋設土器内にドングリ類が残されていた事例から、貯蔵にも用いられたものも存在したと考えられる〔千葉1989・山田2007〕。この点では、配石遺構における課題を共有していると言える。

さて、京都大学植物園遺跡の配石遺構と土器埋設遺構は、群をなして併存すること、かつ居住に関連する遺構が未発見であることが大きな特徴である。これらは調査当初より墓制に関連する遺構とみなされ、居住域から墓域が分離する傾向を示す初期的なものとも評価されている〔富井2000、岡田憲2005〕。しかし、近畿地方における当該期の集落構造について、その後に蓄積された事例からみると、土器埋設遺構・配石遺構はかなり多様な在り方を示しているように思われる。この点は、上述の年代的な位置づけと変遷もかわるが、これらの事例を整理・比較することで本遺跡の特色と位置づけを明確にする必要がある。

以上の問題意識から、本稿では、本遺跡の事例をどのように位置づけるかを起点として検討を進める。そのために、まずは近畿地方における同種の遺跡の集成をおこなうとともに、各遺構の属性の分類と類型設定により、時期的変化の様相を明らかにする。そのうえで、本遺跡における特徴を抽出し、その位置づけについて考察を加えることとする。

2 近畿地方の配石遺構・土器埋設遺構の集成と分類

(1) 集成の対象時期と対象範囲

本稿で集成の対象とした時期は、縄文時代中期から晩期前葉までで、土器型式では鷹島式～滋賀里Ⅲa式にあたる。地理的範囲としては、近畿2府4県（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県）および三重県、福井県嶺南地域とした。各遺構の名称は「土器埋設遺構」と「配石遺構」を用い、それぞれ「土器を人為的に埋めた遺構」と「石を人為的に配した遺構」として、広義に取り扱うこととする。

(2) 属性の分類と類型の設定

土器埋設遺構の属性 土器埋設遺構についての分析視点は、渡辺誠により墓制の一形態という位置づけから提示され、千葉豊は遺構論・遺物論として深化させている〔渡辺1974・千葉1989〕。これらの論考を参照し、本稿では「時期、土器型式、細別段階、器種、文様系統、残存部位、二次加工、土器の口径・器高・容量、埋設方法、埋設姿勢、掘方形

態・規模、埋設位置、関連遺構、内容物」を分析属性として抽出した。

まず、既往の編年研究をもとに、中期から晩期の時期区分を設定した（図74-①）。埋設された土器については、文様モチーフを有するものを「有文（土器）」、縄文・条線といった地文のみでモチーフをもたないものを「素文（土器）」、調整痕のみを残し施文をもたないものを「無文（土器）」とする。異型式土器の場合は別途付記する。これに、器形をもとに「深鉢（形土器）／鉢（形土器）／浅鉢（形土器）／壺（形土器）／注口土器」の器種分類を加える。器種の認定にあたっては各土器型式において通有の器種名を用いる。

土器の大きさは、口径、器高、容量を記載した。なお、口径は反転復元による推定値を含み、容量は実測図をもとにした回転体体積の総和による近似値である⁽⁴⁾。

土器の二次加工としては、敲打・穿孔等により部分的に貫通孔を作出するものを「穿孔」、部位の全周が取り除かれたものを「除去」とし、それぞれ口縁部／頸部／胴部（上部・下部）／底部の部位名称を付記する（図74-②）。また、本来の形状を保たず破片となったものは「破片化」とする。

埋設方法は、一個体が埋設されたものを「単体埋設」、複数の個体または礫を意図的に組み合わせたものを「複合埋設」（以下、埋設は省略）とする（図74-③）。複合埋設は、別個体の土器を蓋として用いるものを「複合：土器蓋」、礫を埋設土器の上部に置くものを「複合：石蓋」、本来の形状を保つ別個体を内包するものを「複合：入れ子」、破片化した別個体をとまなうものを「複合：別破片」とする。また、単体・複合それぞれ、本来の形状を保たない破片が集積したものを「単体破片集積」・「複合：破片集積」とする。

埋設姿勢は、土器の中軸ラインと遺構面のラインとの傾きにより判別し、これが直交して口縁部が上位となる「正位」、口縁部が下位となる「逆位」、土器の中軸と遺構面が平行するものを「横位」とし、それぞれの中間位に位置するものを「正斜位」・「逆斜位」とする（図74-④）。また、破片化した土器を埋置したものを「破片集積」とする。

埋設土器の掘方については、平面形態と長短軸長を記載する。埋設土器内に内容物がある場合は付記する。埋設位置は、まず建物の内外で「屋内（埋設）」と「屋外（埋設）」に分ける。さらに、屋内埋設は「建物出入口部／建物中央部／建物縁辺部」、屋外埋設は、周辺20m程度の近接する範囲で同時期の建物や炉、貯蔵穴等の生活遺構が確認されている場合を「居住域内」、周辺に上記の遺構が確認されない場合（性格不明の土坑・ピットのみを含む）を「居住域外」とする。

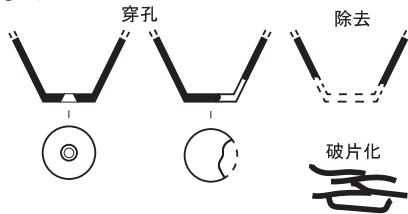
土器埋設遺構の類型 資料集成にあたって、「土器を意図的に埋めた遺構」として広

近畿地方の配石遺構・土器埋設遺構の集成と分類

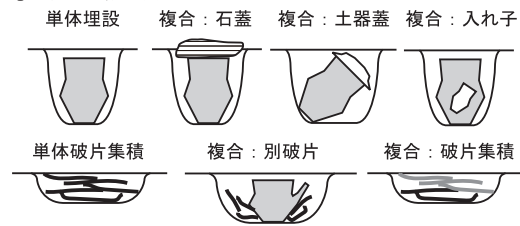
①時期区分の設定

時期	中期					後期					晩期				
	中期初頭	中期中葉	中期中葉	中期中葉	中期末葉	後期初頭	後期中葉	後期中葉	後期中葉	後期中葉	晩期初頭	晩期中葉	晩期中葉	晩期中葉	晩期末葉
土器型式 (細別段階)	土器型式 (細別段階)	船元Ⅰ式 (古段階)	船元Ⅱ式 (古段階)	船元Ⅲ式 (古段階)	船元Ⅳ式 (古段階)	里木Ⅱ・Ⅲ式 (古段階)	北白川Ⅰ式 (古段階)	北白川Ⅱ式 (古段階)	北白川Ⅲ式 (古段階)	北白川Ⅳ式 (古段階)	北白川Ⅴ式 (古段階)	北白川Ⅵ式 (古段階)	北白川Ⅶ式 (古段階)	北白川Ⅷ式 (古段階)	北白川Ⅸ式 (古段階)

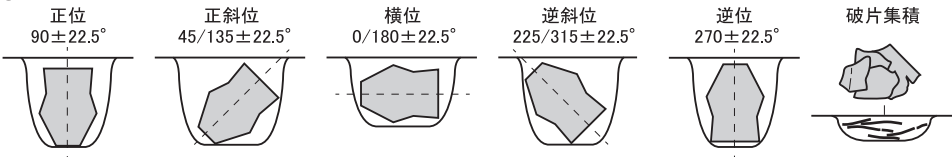
②埋設土器への二次加工



③土器の埋設方法



④土器の埋設姿勢



⑤配石遺構の形態

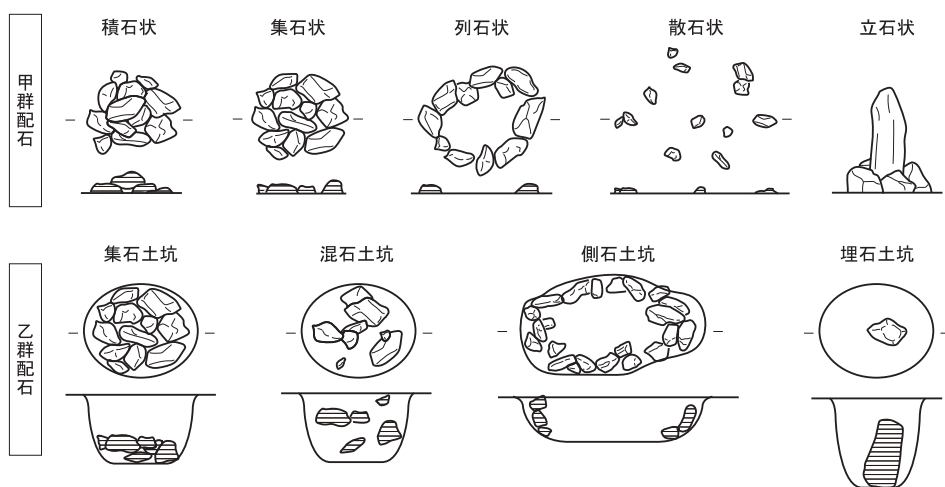


図74 配石遺構・土器埋設遺構の分析属性模式図

義の土器埋設遺構を扱った（表3）。そのため土器埋設炉や副葬品、土器片敷遺構も含んでいる。これらを弁別するために、埋設された土器の位置や性状等の属性をもとに、広義の土器埋設遺構にⅠ～Ⅳ類の類型を設定した（図75）。

土器埋設Ⅰ類 1～2個体の土器を同大程度の掘り込みのなかに設置するもの。狭義の土器埋設遺構である。

土器埋設Ⅱ類 土坑内に土器が埋納されたもので、土器に比して土坑の規模が大きいもの。使用される土器は深鉢もみられるが、浅鉢や注口土器など小型のものも一定量ある。完形のもの、または意図的な折損を有するものも多い。副葬、供献、被覆などの目的が想定される。土坑の形状によって細分する⁽⁵⁾。

a 種 長短軸比が2：1程度となる土坑墓形状の土坑内に埋納されたもの。

b 種 上記以外の土坑内に埋納されたもの。

土器埋設Ⅲ類 建物の中央部に埋設されたもので、被熱痕や焼土がみられ、炉にかかわる施設となるもの。炉における土器の機能形態によって細分する。

a 種 炉内に土器の体部を正位または逆位に据えたもの。いわゆる炉体土器。

b 種 炉の底面に面的に敷設するもの、いわゆる土器敷炉。

土器埋設Ⅳ類 破片化して埋置されたもので、土器が個体としての形状を保たないもの。土器の埋納状態によって細分する。

a 種 石囲炉内に敷設するもので、炉床より高い位置に敷設するものや、複数層にわたって敷設するものなど、炉の機能時の施設とならないもの。

b 種 屋外の土坑または浅い掘り込み内に破片化した土器を敷設するもの。

c 種 破片化した土器がまとまって投棄されたような状況を呈するもの。

配石遺構の属性 配石遺構の分析にあたっては、「配石の形態、下部遺構の内容、平面規模、使用される礫の大きさ」を属性として抽出した。

配石遺構の形態は、遺構の構築にあたって礫の配置が空間を規定するものを甲群配石（地上部配石）、土坑が空間を規定し、その内部に礫をとまなうものを乙群配石（配石土坑）とする。礫の配置状況および密度により、以下のように細別する（図74－⑤）。

甲 群 礫の配置が空間を規定するもので、地表にあらわれた構造物として認識できるもの。下部に土坑や埋設土器をとまなうものも含む。

積石状 礫を二段以上に積み上げて立体的な外観をもつもの。

集石状 礫を一地点に平面的に集め、盤状を呈するもの。

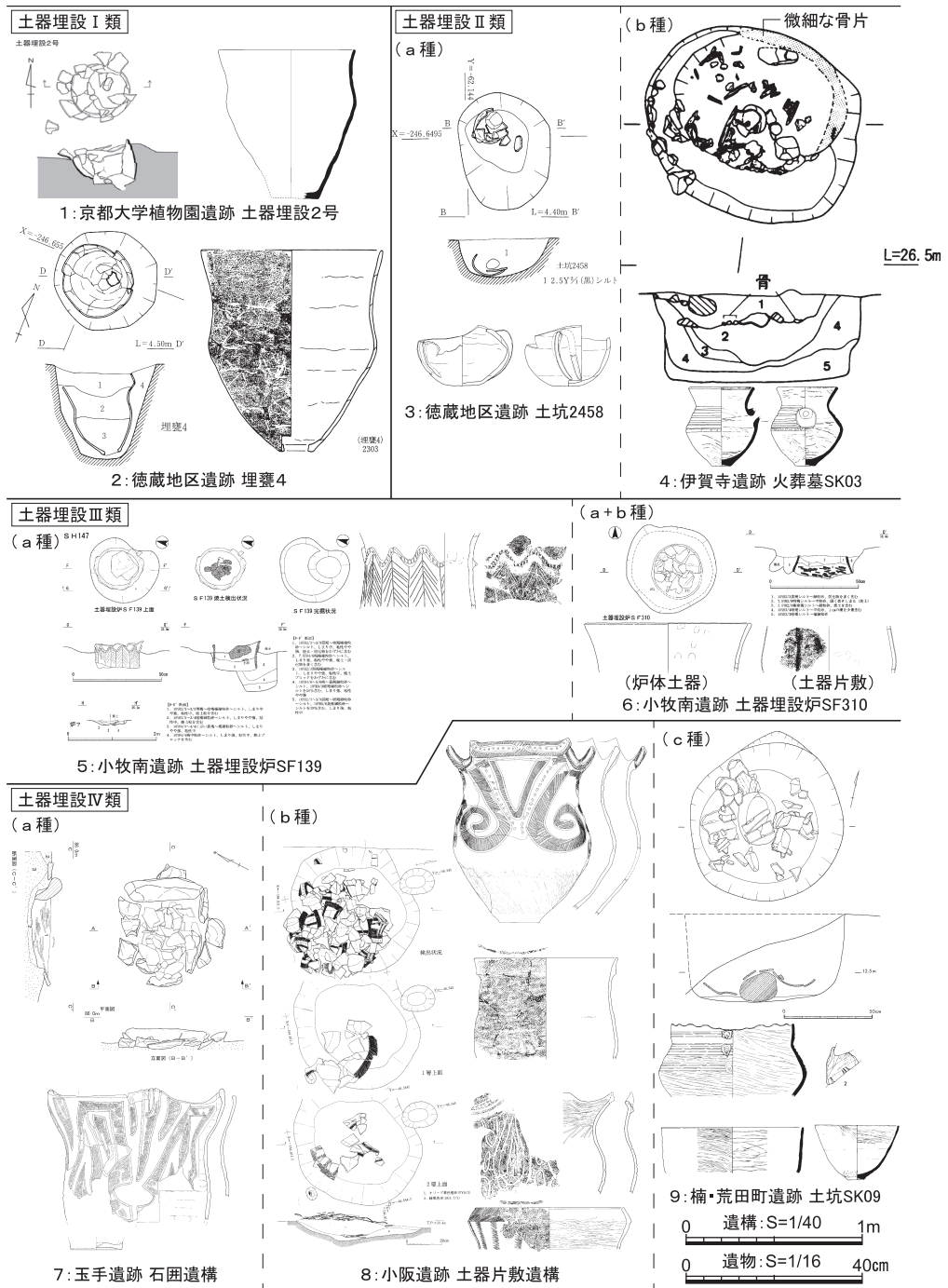


図75 土器埋設遺構の諸類型

列石状 礫を円形や直線など列状に配置するもの。

散石状 礫を一定の範囲に疎らに配置するもの。

立石状 礫の長辺を立てて設置するもの。

乙 群 土坑が空間を規定し、その内部に礫をとまなうもの。

集石土坑 礫が土坑内に密に配置されたもの。

混石土坑 礫が疎らかつ不規則に落ち込んだもの。

側石土坑 土坑の壁面に沿って礫が配置されたもの。

埋石土坑 土坑内に礫が立位で配置されたもの。

類型の設定 配石遺構についても、集成にあたっては土器埋設遺構と同様に多様な遺構を含めて取り扱った（表5）。そのため、主として配石遺構の礫の配置状況と性状等の属性をもとに、以下のⅠ～Ⅳ類の類型を設定した（図76～78）。

配石Ⅰ類 地上部配石を主たる構造とする甲群の配石形態をとる遺構で、狭義の配石遺構にあたる。配石の規模および形態によって次のa～g種に分け、さらに用いられる礫の大きさや配石の性状により細分する（図76・77）。

a 種 積石状を呈する長軸2m未満のもの。植物園Aタイプに相当する。

b 種 集石状を呈する長軸2m未満のもの。植物園Bタイプに相当する。

b 1 種 主として最大径30cm以上の礫を用いるもの。

b 2 種 主として最大径30cm未満の礫を用いるもの。

b 3 種 外周に最大径30cm以上の礫を列状に配し、内部に最大径30cm以下の礫を配するもの。

c 種 集石状を呈する長軸2m以上のもの。

c 1 種 主として最大径30cm以上の礫を用いるもの。

c 2 種 主として最大径30cm未満の礫を用いるもの。

c 3 種 外周に最大径30cm以上の礫を列状に配し、内部に最大径30cm以下の礫を配するもの。

d 種 散石状を呈するもの。

d 1 種 主として最大径30cm以上の礫を用いるもの。

d 2 種 主として最大径30cm未満の礫を用いるもの。

e 種 立石状を呈するもの。

e 1 種 基部に根固め石などの付帯施設をとまなうもの。

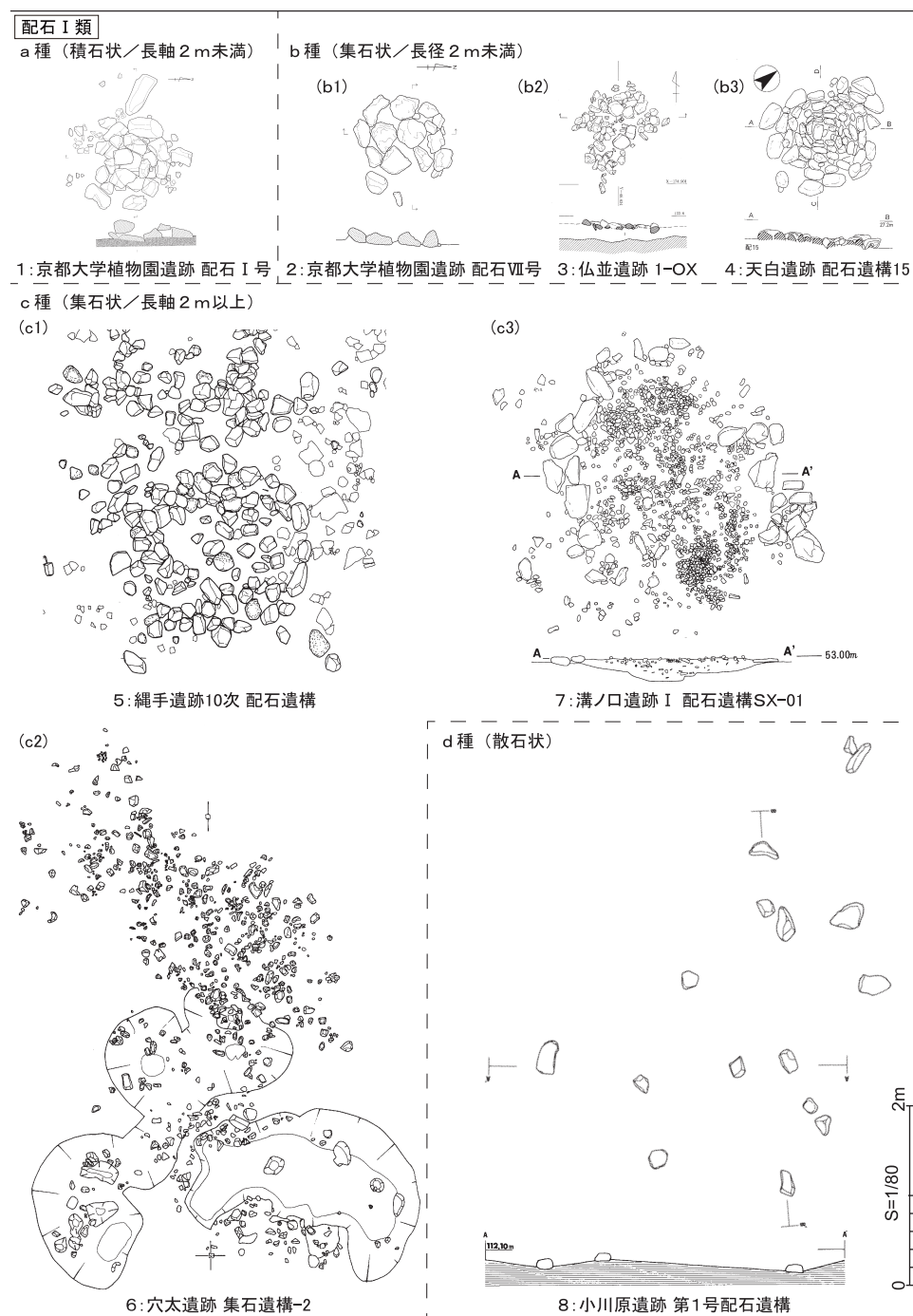


図 76 配石遺構の諸類型 (1)

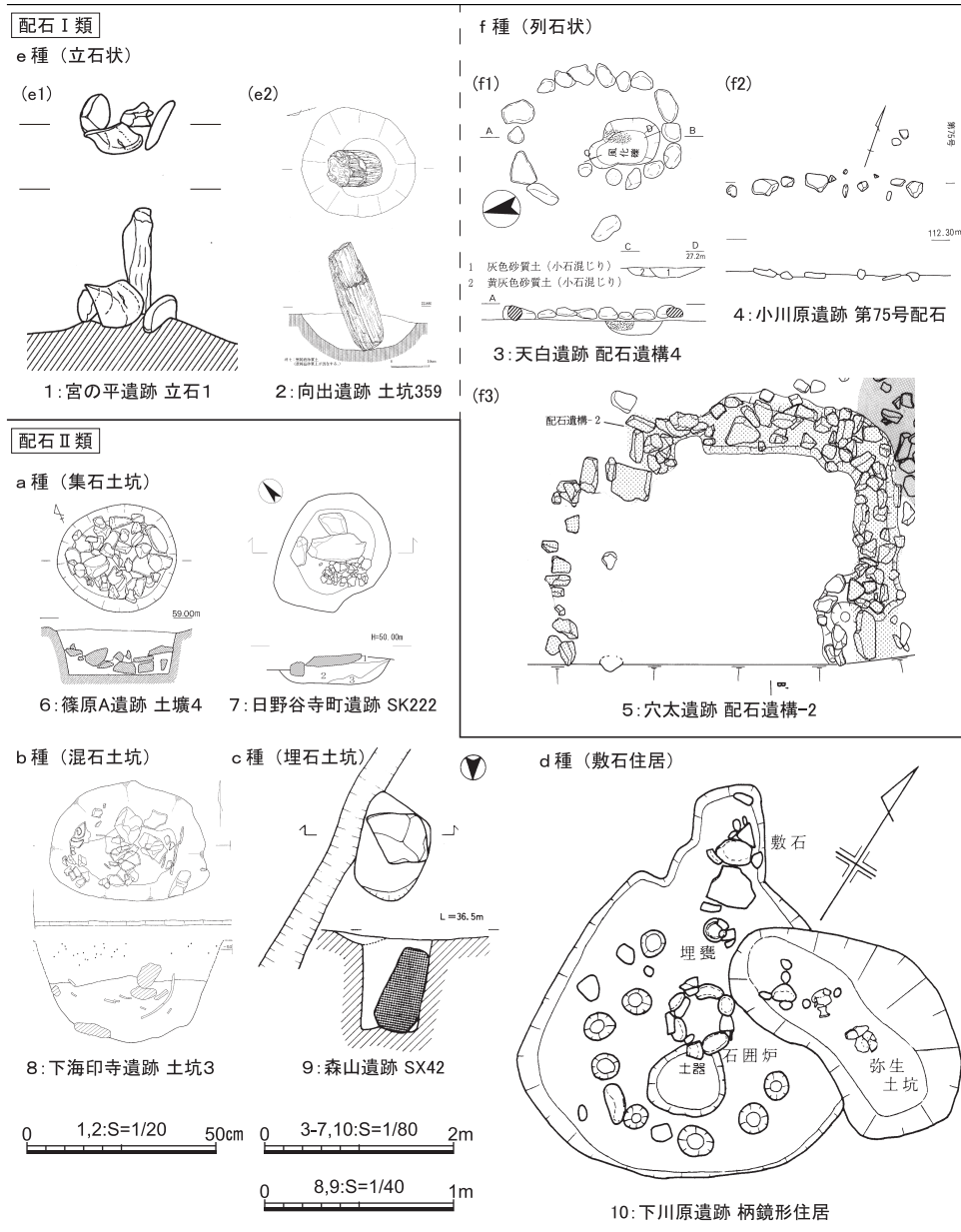


図77 配石遺構の諸類型(2)

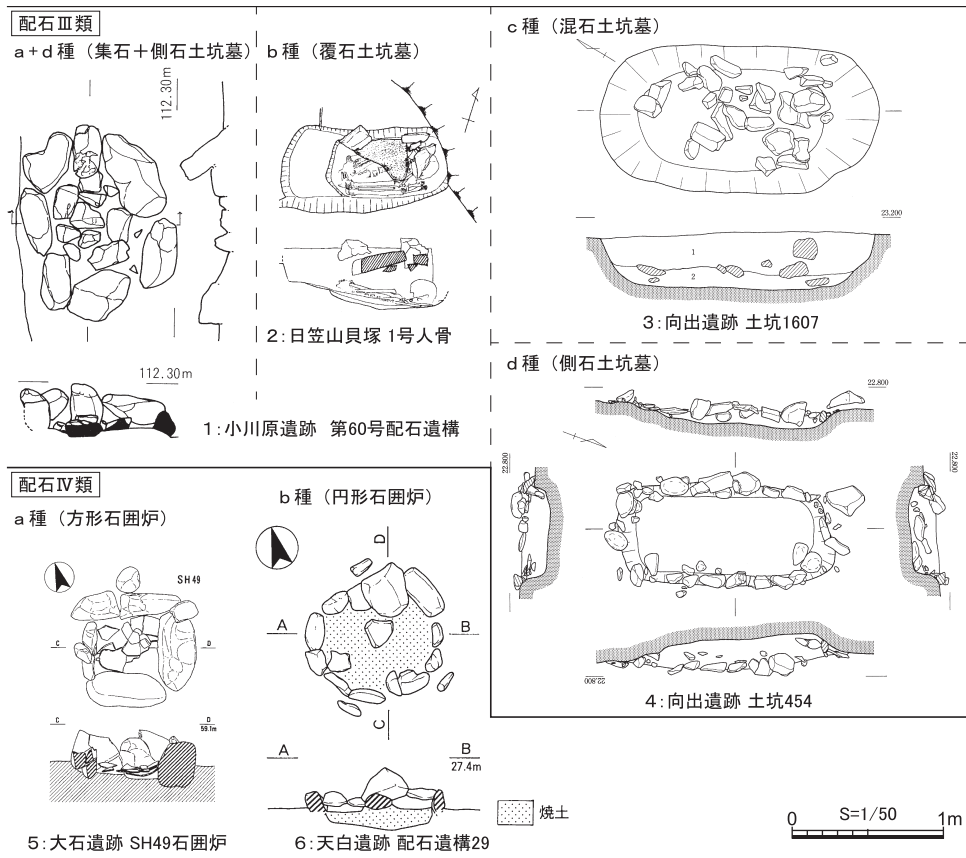


図78 配石遺構の諸類型(3)

e 2 種 基部に根固め石等をとみなわず、立位に埋設するのみのもの。

f 種 礫を幾何学的な形態に並べるもの。

f 1 種 円形・楕円形の列石となるもの。

f 2 種 直線状の列石となるもの。

f 3 種 方形の列石となるもの。

配石Ⅱ類 土坑内に礫を配した乙群配石の形態をとる遺構で、いわゆる配石土坑である。配石の形態によって次の a～d 種に細別する (図77)。

a 種 土坑内に礫を密に配する集石土坑となるもの。

b 種 土坑内に疎らかつ不規則に礫が含まれる混石土坑となるもの。

c 種 土坑内に礫が立位で配置される埋石土坑となるもの。

d 種 竪穴建物の床面に平坦面をもつ板状の礫を敷き並べたもの。いわゆる敷石住居。

配石Ⅲ類 上述の配石Ⅱ類と同じく乙群配石の形態をとるが、土坑の長短軸比が2:1程度の土坑墓形状をとるもので、いわゆる配石土坑墓となる可能性があるもの。配石の形態によって次のa～d種に細別する(図78)。

- a種 土坑の底面に礫が密に配置された集石土坑となるもの。
- b種 土坑の上位に礫が密に配置された集石土坑となるもの。
- c種 土坑埋土に礫が疎らに含まれる混石土坑となるもの。
- d種 土坑の壁面に沿って礫が配置された側石土坑となるもの。

配石Ⅳ類 長短軸50～80cm程度で方形または円形の列石状を呈するもの、もしくは側石土坑となるもので、焼土や炭化物、灰層などから石囲炉と認識できるもの。平面形態によって細分する(図78)。

- a種 平面形が方形となる方形石囲炉。
- b種 平面形が円形となる円形石囲炉。

3 土器埋設遺構の様相

(1) 土器埋設遺構数の時期的変化(図79)

中期前葉から晩期前葉までの時期で、土器埋設遺構として集成した事例は335例であった。このうち、279例(83.3%)が土器埋設Ⅰ類とした狭義の土器埋設遺構であり、圧倒的に多い。土器埋設Ⅱ類は20例(6.0%)、土器埋設Ⅲ類は6例(1.8%)、土器埋設Ⅳ類は26例(7.7%)、不明は4例(1.2%)で、いずれも全体としては少数にとどまる。

時期別の動向をみると、中期前葉・船元Ⅰ式に土器埋設Ⅳ類が1例(表3-埋1,以下「表3-」は省略)があるが、中期中葉の事例はみられず、極めて散発的である。中期後葉になると土器埋設Ⅰ類が一定程度みられるようになり、中期末葉にはすべての類型が出そろった。その後、後期初頭から後期前葉にかけて土器埋設Ⅰ類は急激に増加する一方、その他の類型は少数のまま推移する。これにともない、分類ごとの比率でみると、中期末葉では土器埋設Ⅰ類は33例中19例(57.6%)であったのに対し、後期前葉では158例中146例(92.4%)と、9割以上を占めるようになる。しかし後期中葉に至ると、土器埋設Ⅰ類の急減を筆頭に土器埋設遺構がほとんどみられなくなり、後期前葉と中葉の間に大きな断絶を見出すことができる。後期後葉には土器埋設Ⅰ類が23例あるが、後述するようにこのうち22例が三重県天白遺跡のものであり、これを差し引くと後期後葉には各類型の数量差が小さくなることが特徴として見出せる。後期末葉から晩期初頭までは低調なまま推移するが、晩期前

土器埋設遺構の様相

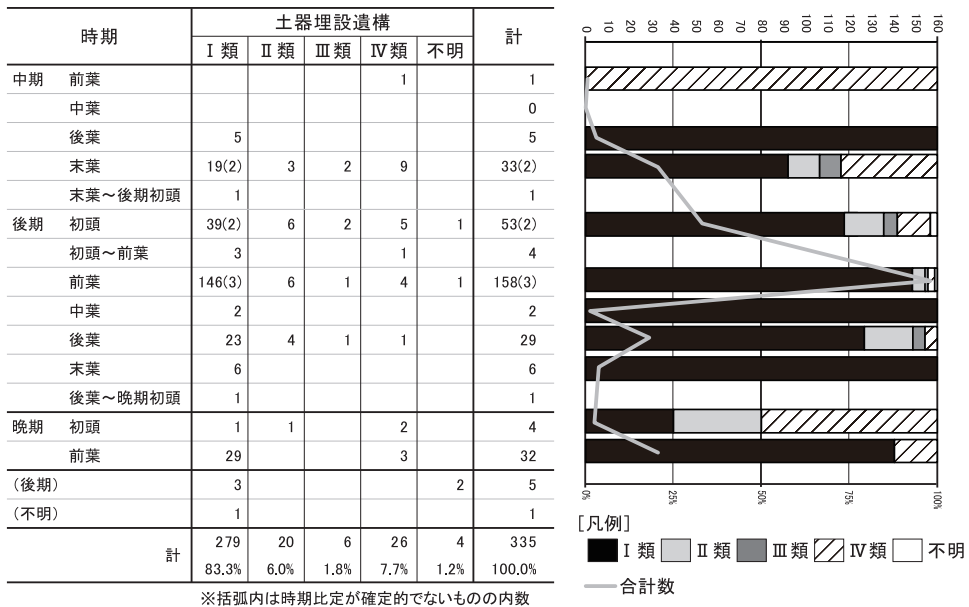


図79 土器埋設遺構数の時期的変化

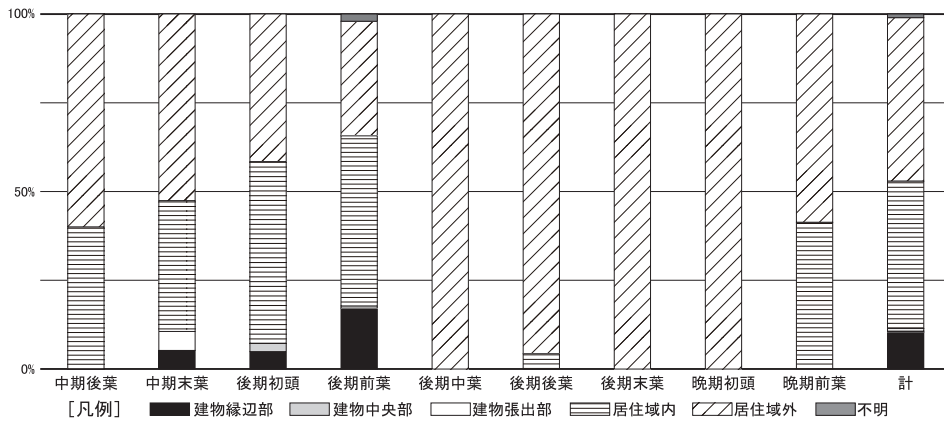
葉に至って土器埋設遺構が急増する。32例中29例（90.6%）が土器埋設 I 類であり，9 割以上を占めることから，後期後葉における天白遺跡を除いた類型構成とは異なる展開を示すことが見出せよう。晩期前葉における土器埋設 I 類主体の傾向は，晩期中葉における土器棺墓群へと発展的に継続するものと考えられる。

(2) 土器埋設 I 類の属性の時期的変遷

次に，土器埋設 I 類の各属性について時期ごとに集計し，全体的な傾向を把握する。このとき，石川健〔石川2001〕による土器埋設にかかる行為の分析（図73）を参考にして，①埋設位置の選択，②土器の器種選択，③埋設方法等の選択，という三つの単位に分節化して検討する。

① 埋設位置の選択（図80）

土器埋設 I 類が構築される位置は，279例のうち屋外が247例（88.5%），屋内が32例（11.5%）と，屋外が圧倒的多数を占める。屋内への埋設は，中期末葉から後期前葉かけて認められる。全体量のなかでは少ないものの，中期末葉～後期初頭では1 割前後であったものが，後期前葉には146例中26例（17.8%）と，2 割近くに達しており，屋内への埋設も一定程度指向される様相が見出せる。いっぽう，後期中葉以降では屋内への埋設はみられず，屋外埋設のみで構成されるようになる。また，屋外への埋設に際しても，中期後葉～後期



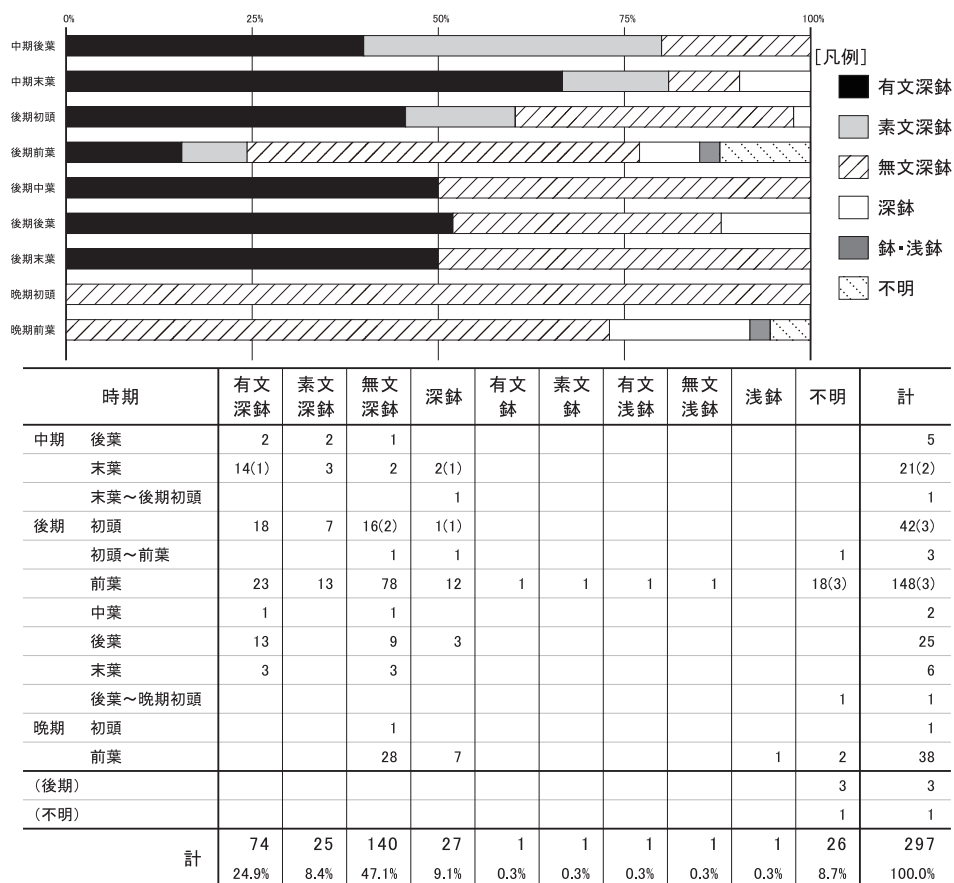
時期	屋内	建物 緑辺部	建物 中央部	建物 張出部	屋外	居住域外	居住域内	不明	計
中期 後葉					5	3	2		5
末葉	2	1		1	17(2)	10	7(2)		19(2)
末葉～後期初頭					1		1		1
後期 初頭	3	2	1		36(2)	16(2)	20		39(2)
初頭～前葉					3	1	2		3
前葉	26	25		1	120(3)	47	70	(3)	146(3)
中葉					2	2			2
後葉					23	22	1		23
末葉					6	6			6
後葉～晩期初頭					1	1			1
晩期 初頭					1	1			1
前葉					29	17	12		29
(後期)	1	1			2	1	1		3
(不明)					1		1		1
計	32	29	1	2	247	127	117	3	279
	11.5%	10.4%	0.4%	0.7%	88.5%	45.5%	41.9%	1.1%	100.0%

※括弧内は時期比定が確定的でないものの内数

図80 土器埋設Ⅰ類の構築位置の時期的変化

初頭には住居などの近傍に構築される居住域内への埋設事例が、これらがみられない居住域外への埋設と等量程度であるが、後期前葉には居住域内への埋設が優勢となる。屋内埋設の事例数も考慮すると、土器埋設Ⅰ類は後期前葉まで居住空間内に構築されることが通例であったと言える。他方、後期中葉から晩期初頭には、事例の偏りや集落の痕跡自体が明確ではないことも考慮すべきではあるものの、土器埋設遺構の近傍に住居などの居住関連遺構がみられない場合が主体的である。ふたたび土器埋設Ⅰ類が増加する晩期前葉には、居住域内・外の数が等量に近くなるが、特に居住域外の土器埋設遺構がみられる滋賀県北仰西海道遺跡や滋賀里遺跡などでは、土坑墓群がともなう点が特徴として挙げられる。

土器埋設遺構の様相



※括弧内は時期比定が確定的でないものの内数

図81 土器埋設 I 類の器種選択の推移

② 土器の器種選択 (図81・82)

土器埋設 I 類で埋設される土器は、鉢・浅鉢類は297点中 5 点 (1.7%) で、ほとんどが深鉢である (図81)。また、全点のうち140点 (47.1%) が無文土器であり、無文深鉢がほぼ半数を占めている。この比率を時期別にみると、中期後葉では有文・素文・無文がほぼ同程度であるが、中期末葉では21点のうち14点 (66.7%) が有文深鉢であり、無文・素文深鉢とはかなり開きが大きい。これが後期初頭では42点のうち有文深鉢18点 (42.9%)、無文深鉢16点 (38.1%) と同数程度となり、さらに後期前葉では148点のうち有文深鉢23点 (15.5%) に対し無文深鉢78点 (52.7%) と、有文深鉢の割合が減少して無文深鉢が主体的となってゆく。しかし、後期中葉～末葉では、事例数が少ないものの、有文深鉢が 5

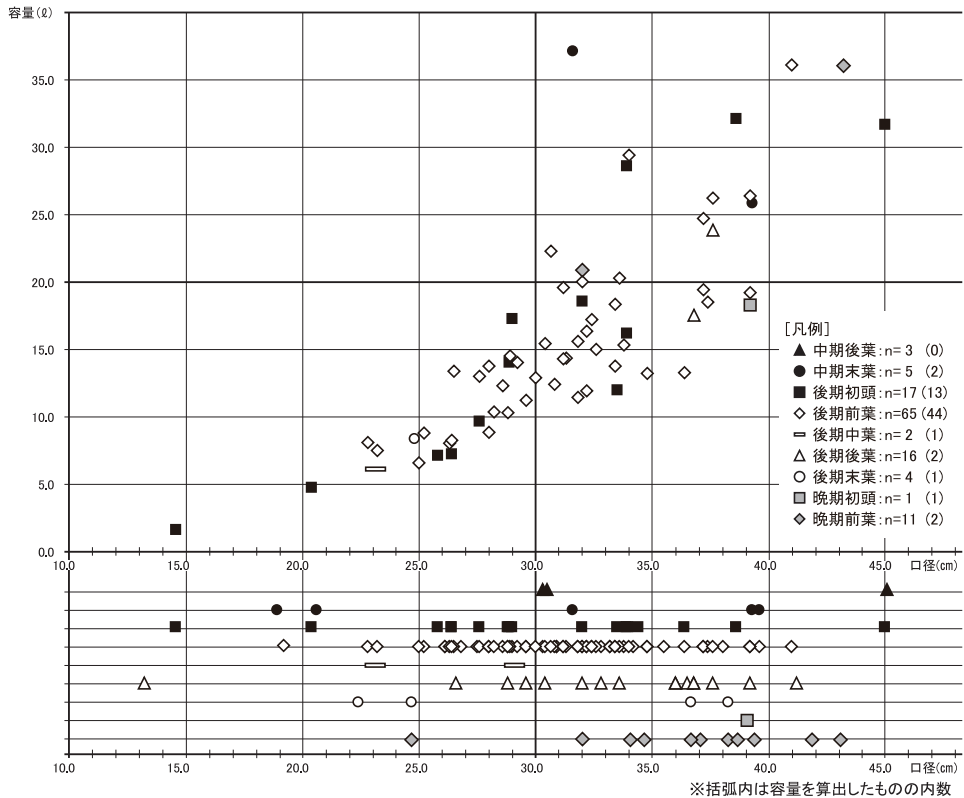


図82 埋設される土器の口径・容量分布

割前後を占め、有文深鉢が優勢となる。晩期初頭は1例のみのため除くとして、晩期前葉では無文深鉢で占められ、後期中葉以降は有文・無文の比率に振れ幅が大きい。

次に、埋設される土器の大きさについて、容量と口径の分布から検討する(図82)。土器埋設Ⅰ類のうち、口径の判明する深鉢形土器は124点、このうち容量の算出が可能であったのは66点である。中期後葉は、容量の判明する事例がないものの、いずれも口径30cm以上で、大型のものが主体となる可能性がある。中期末葉ではばらつきが大きくなり、後期初頭でもこの傾向が続くとみられ、容量30L以上から5L未満まで多様なものが使用される。後期前葉は最も事例数が多いが、容量・口径の分布はまとまりが強く、容量10～20L、口径25～35cmの間に収まる傾向が強い。一定の事例数がある後期後葉についても、前葉ほど顕著ではないものの、容量・口径には一定のまとまりを見出すことができる。晩期前葉では口径30cm以上、容量20L以上のものが主体的で、後期前葉よりも使用される土器が大型化していることが指摘できる。

以上の、埋設される土器の選択性について、各時期の器種組成を参照してさらに検討しよう。まず、中期後葉は器種組成に無文深鉢は一般的に含まれず、有文深鉢が組成の大半を占める。しかし、埋設土器の器種選択では、素文・無文土器が優勢であることから、文様の付されない深鉢が埋設土器として意図的に選択されていた可能性を指摘できよう。容量・口径分布での傾向は、不確実ながら大型のものに偏る可能性があり、器種選択とともに容量についても一定の指向性を想定できる。

中期末葉から後期前葉にかけては、器種組成においても徐々に無文土器が定着してゆく段階であり、埋設土器における素文・無文深鉢の増加もこれと軌を一にするものと言える。ただし、中期末葉・北白川C式の基準資料である北白川追分町遺跡の器種組成比率では、深鉢267点のうち有文深鉢246点（92.1%）、帯縄文のみの素文深鉢21点（7.9%）で、無文深鉢は含まれない（泉1985の表23より算出）。後期初頭・中津式の資料がまとまって出土した奈良県玉手遺跡第4次第9遺構面〔木許ほか編2017〕では、報告書掲載の当該期の深鉢71点中、有文深鉢56点（78.9%）、素文深鉢13点（18.3%）、無文深鉢2点（2.8%）と、有文深鉢が主体を占める。すなわち、近畿地方中央部では当該期の器種組成における素文・無文土器の比率に比べて、埋設土器ではこれら素文・無文深鉢が選択される傾向が見出せる。容量分布においても、当該期の埋設土器はばらつきが大きく、大型から小型まで幅広く用いられる。これらのことから、中期末葉から後期初頭にかけて構築された土器埋設Ⅰ類には、日常的に用いる土器とは異なる選択的意図が存在したと考えられる。これに対して、後期前葉では器種組成における比率と、土器埋設Ⅰ類に用いられる器種の比率との差異が小さくなる。口径・容量分布においては一定の大きさのものにまとまる傾向が強いが、当該期の土器群全体においても通有のサイズとみなせることから、前段階までのような選択的意図を積極的には見出すことは難しい。

後期中葉～末葉では、無文土器の器種組成に占める比率が高くなるにもかかわらず、埋設される土器には有文土器が半数あり、有文土器の器種を選択する割合が相対的に高い。口径・容量分布では、資料数が限られるものの、一定の容量にまとまるような傾向がうかがえるが、後期前葉と同様に通有のサイズの範疇であることから、大きさに関しては選択性が顕著ではない。

晩期前葉には、判別できないものを除くとすべて無文深鉢で占められるが、この時期には有文深鉢が器種組成から欠落することから、器種組成と同調的な変化である。また、口径・容量に関しても、前段階より大きいものにまとまる傾向があるが、これは当該期の深

鉢が大型化し、浅鉢との対比的な関係が強まることを考慮すると、埋設土器に選択的な意図が働いたものではないと考えられる。

③ 埋設方法等の選択（図83～85）

土器埋設Ⅰ類の埋設方法は、279例中250例（89.6%）が単体での埋設で、全時期を通じて1個体の土器を埋設することが主流である（図83）。したがって、別個体等を用いた複合埋設は、散発的におこなわれるのみであったものと評価できる。ただし、晩期前葉に関しては、他個体の土器で蓋をするものが29例中9例（31.0%）あり、特徴的なあり方を示す。

次に埋設姿勢についてみると、279例中162例（58.1%）が正位の埋設であるが、埋設姿勢の割合は時期によって変動が大きいことが読み取れる（図84）。まず、中期後葉は正位と横位がおおむね等しくみられるが、中期末葉には正位が主体的となり、正斜位も含めれば口縁部を上向きに開口するものが通例となる。この傾向は後期前葉まで継続し、全体に占める横位・逆位・逆斜位の割合は低調なまま推移する。後期中葉は事例数が少ないため不明確であるが、後期後葉から末葉は正位・正斜位埋設が減少し、逆位が優勢となる特徴的な変化を示す。しかしこの傾向は継続性を示さず、晩期前葉には正位・正斜位埋設とともに、横位の埋設が一定量みられるようになる。

埋設される土器への二次加工の方法と部位をみると、297点のうち二次加工のないものは75点（25.3%）に留まり、埋設にあたって何らかの二次加工をおこなうものが多い（図85）。ただし、時期ごとの割合をみると、二次加工をおこなう比率には変化が認められ、中期末葉～後期初頭には二次加工をもたないものが4割前後みられるが、後期前葉と晩期前葉には二次加工をおこなう比率が高く、二次加工がみられないものは1割程度である。

晩期前葉には破片化するものが一定量認められるが、これは土器蓋をもつ複合埋設と相関し、破片化した土器が蓋のように被覆するために用いられるものである。これについては、後述する個別事例の中で触れることとする。

(3) 土器埋設Ⅰ類の変遷

以上に述べてきた各種の属性の時期的変化によって、全体的な傾向を把握した。しかし、個別事例に当たると、時期細別ごとの微細な様相の変化や、遺跡・遺構ごとに顕著な偏りがみられることも多く、以上の分析のみでは欠落する情報が多い。そこで、上述した全体的な傾向を考慮しつつ、各時期の具体的事例をもとに、土器埋設Ⅰ類の変遷過程を整理してゆくこととする。

中期後葉の土器埋設Ⅰ類は5例と僅少である。和歌山県徳蔵地区遺跡の2例（図86－

土器埋設遺構の様相

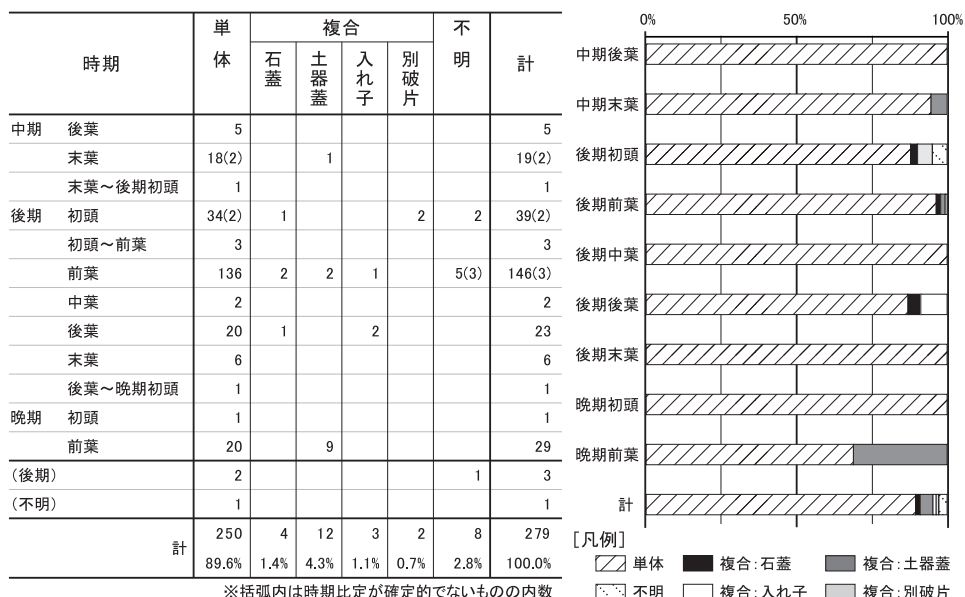


図83 土器埋設Ⅰ類の埋設方法の時期的変化

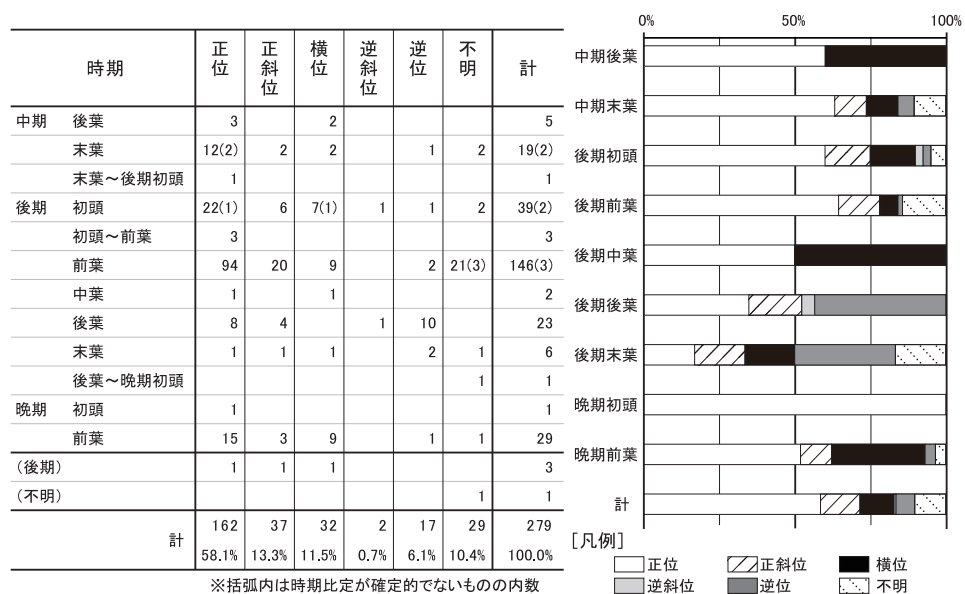
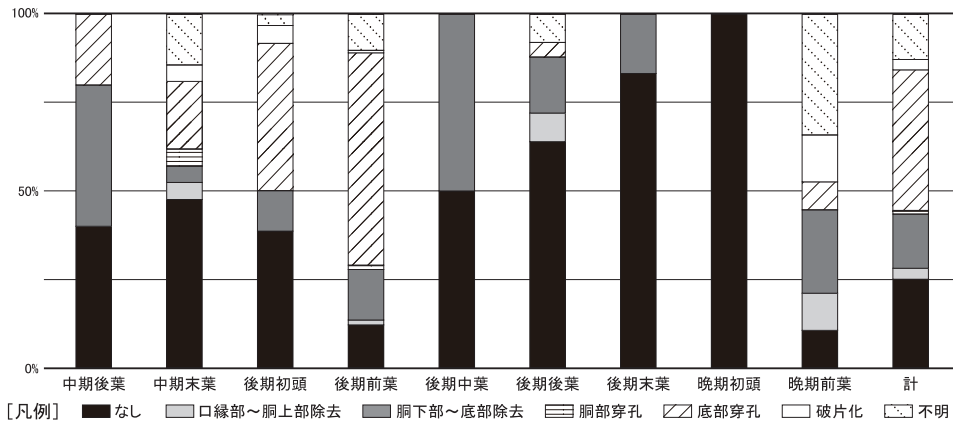


図84 土器埋設Ⅰ類の埋設姿勢の時期的変化



時期	なし	除去		穿孔		破片化	不明	計
		口縁部 ～胴上部	胴下部 ～底部	胴部	底部			
中期 後葉	2		2		1			5
末葉	10	1	1	1	4(2)	1	3	21(2)
末葉～後期初頭			1					1
後期 初頭	17(2)		4		18	2	1	42(3)
初頭～前葉					2		1	3
前葉	18	2	21	2	89	1	15(3)	148(3)
中葉	1		1					2
後葉	16	2	4		1		2	25
末葉	5		1					6
後葉～晩期初頭							1	1
晩期 初頭	1							1
前葉	4	4	9		3	5	13	38
(後期)	1				1		1	3
(不明)							1	1
計	75 25.3%	9 3.0%	44 14.8%	3 1.0%	119 40.1%	9 3.0%	38 12.8%	297 100.0%

※括弧内は時期比定が確定的でないものの内数

図85 土器埋設Ⅰ類の埋設土器への二次加工の時期的変化

1・2) は、従前から近畿地方における最古段階のものとして挙げられてきたが、現在においてもこれを遡る、あるいは同時期の事例はない。これらはいずれも屋外埋設で、堅穴建物周辺が1基、堅穴建物の埋土を掘り込んで構築したものが1基ある。埋設方法はいずれも単体・正位の埋設で、底部を穿孔または除去しており、共通性が高い。堅穴建物の出土土器と同一型式のものであり、ほぼ同時期の所産とみなすことができる。これに後続する事例として、滋賀県高野遺跡の里木Ⅱ式古段階の埋設土器(図86-4)がある。底部を除去している可能性があるが、遺存状態が悪く判然としない。遺跡全体の様相も不明確だが、現状では明確な居住痕跡は確認されず、居住域外の単独構築とみなされる。三重県堀

土器埋設遺構の様相

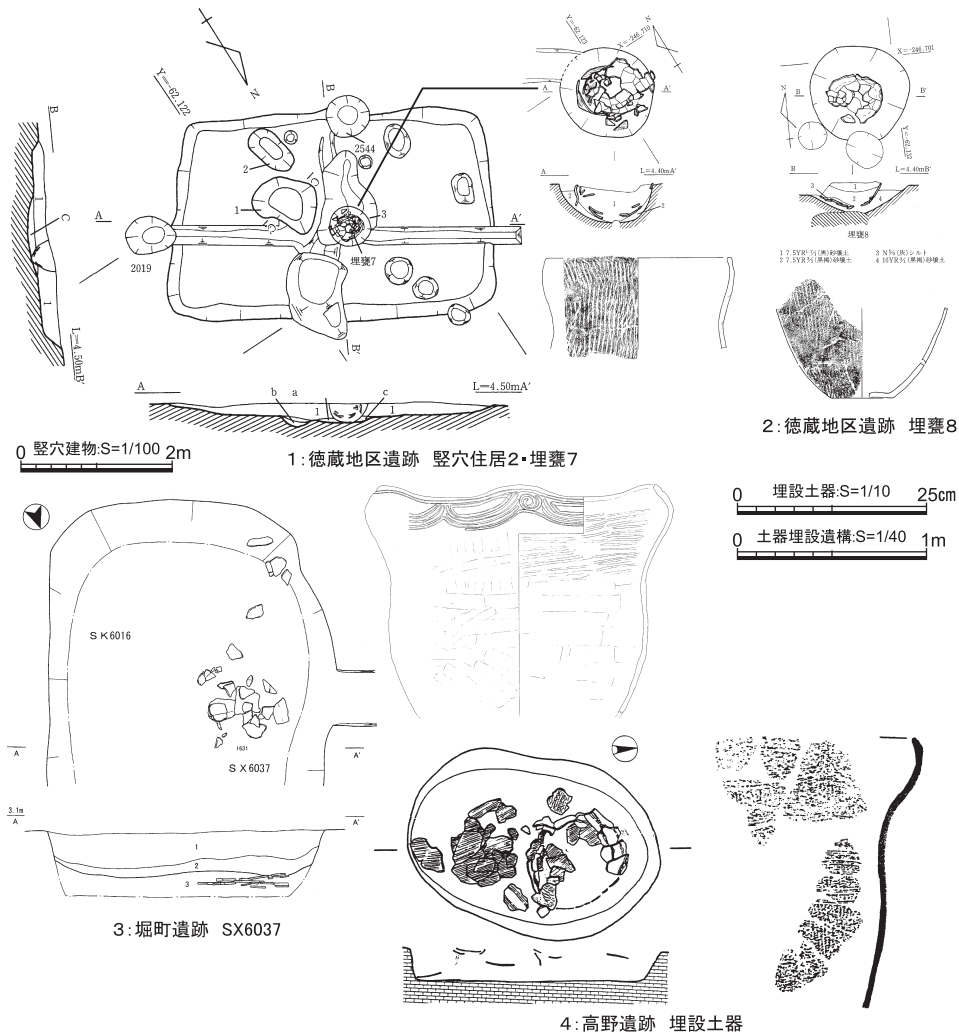


図86 中期後葉の土器埋設遺構Ⅰ類

町遺跡（第6次）では、横位埋設で底部を除去した中富Ⅳ・Ⅴ式（篠原A段階併行）の例がある（図86-3）。三重県小牧南遺跡では、堀町遺跡例と同時期に比定できる無文土器が正位に埋設された例（SX251）がある（図87-4）。この土器には二次加工はみられない。堀町例・小牧南例ともに、後続する中期末葉段階には住居址等が確認されているが、中期後葉の遺構はみられず、遺物の出土もわずかである。したがって、これらは居住域外の土地利用が低調なエリアに単独で構築されたものとみなしておきたい。

以上のように、当該期の土器埋設遺構は事例に限られる上、各属性のまとまりや属性間

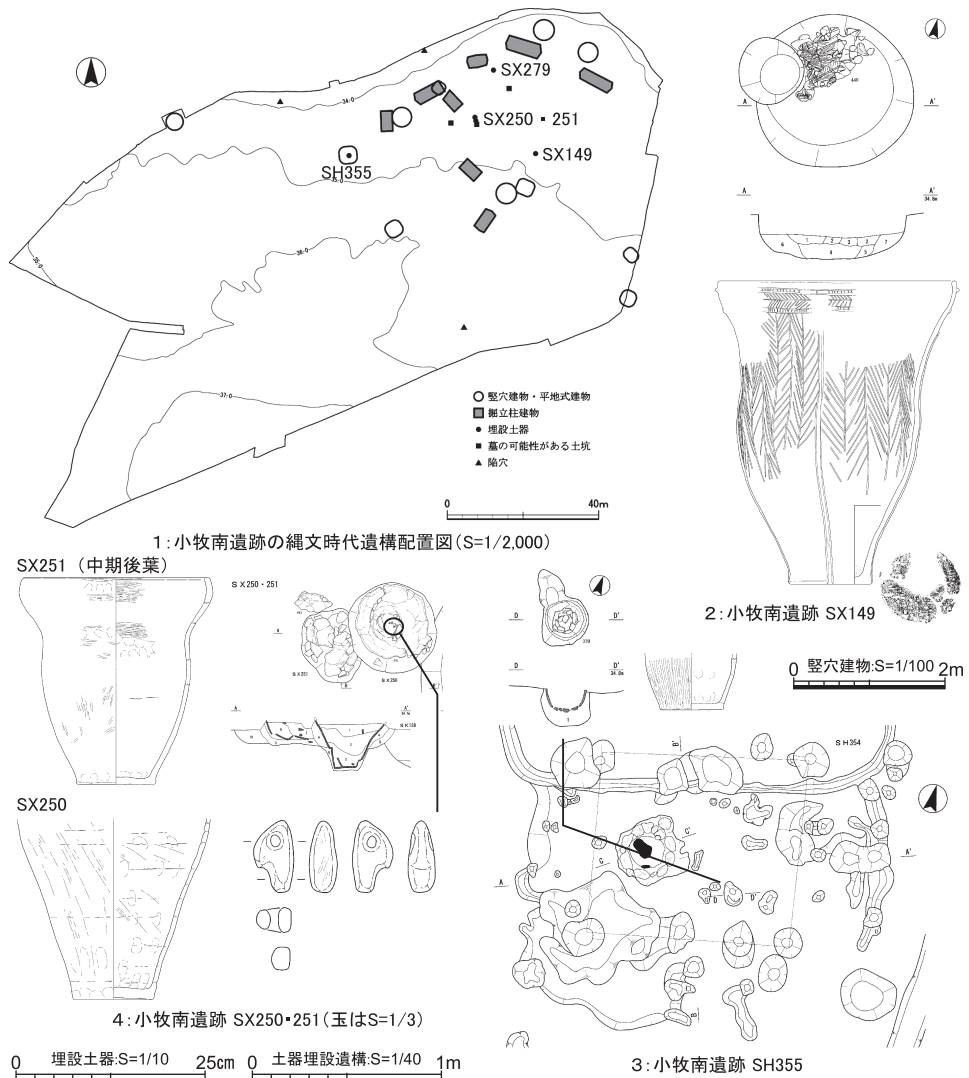


図87 三重県小牧南遺跡の集落形態と土器埋設遺構

の相関関係は見出し難い。しかしながら、現状でみられる事例はいずれも屋外埋設である点に注目したい。近畿地方における土器埋設Ⅰ類の出現にあたっては、これまで中部地方において中期後葉・曽利式期に盛行する「埋甕」との関係が指摘されてきた。しかしながら、「埋甕」の特徴である屋内（出入口部）への埋設はみられず、底部の穿孔・除去、石蓋といった諸特徴も明確でないことから、これらの地域との直接的な影響関係を評価できる状況にないと判断できる。各遺跡での埋設にかかる諸属性にも変異が大きい点からも、近畿

地方における土器埋設遺構の出現は、単純な伝播としてではなく、多様な背景による成立を想定する必要があるだろう。

中期末葉には土器埋設Ⅰ類は19例あり、前段階に比べて事例が増加する。しかし、京都府伊賀寺遺跡や兵庫県片吹遺跡など、当該期の住居址が複数棟検出されているにもかかわらず土器埋設遺構がみられない遺跡もあり、当該期の集落に必須の要素として定着していたわけではないことは注意すべきである。また、一遺跡での検出数は1～2基がほとんどで、群在化する様相は認められない。唯一、三重県小牧南遺跡においては屋内1基、屋外3基とまとまった数が検出されている（図87）。後述するように、小牧南遺跡は集落構造自体にも中部・関東地方の特徴が色濃く、特異な事例として位置づけられよう。

埋設位置では、屋内への埋設は2例のみであるのに対し、屋外埋設が17例と圧倒的に多く、屋外施設としての構築が主流であったと言える。屋外に埋設されるもののうち、同時期の住居址が近接する居住域内への埋設は7例で、その地理的分布は三重県および福井県嶺南地域に限られる。土器型式分布圏では、これらの地域は近畿中央部の北白川C式とともに、東海西部・島崎Ⅲ式～山の神式や北陸西部・大杉谷式が組成に含まれ、境界地域としての様相が色濃い。したがって、土器埋設遺構を含む集落構造においても、小地域性が強く現出しているものと考えられよう。特に小牧南遺跡では掘立柱建物が堅穴建物とともに検出されており、土器埋設遺構はこれら建物に囲まれた空閑地に分布している（図87-1）。報告者はこれらが環状集落を構成するものと想定しており、そうであれば中部・関東地方における集落構造とも共通するところが多く、強い影響関係がうかがえる。ただし、埋設土器に用いられた土器をはじめ、出土土器は在地的なもので占められる。

これに対し、奈良県宮の平遺跡例（図88-1）は、柄鏡形住居の張り出し部に逆位に埋設されたとみられるもので、狭義の「埋甕」と共通する属性を有する。敷石こそ明確でないものの、柄鏡形という特徴的な住居形態のみならず、付帯施設である「埋甕」もあわせて備える点から、中部・関東地方の影響を強く受けているものと理解できる。しかし、集落構造は環状をなさず非定型的で、集落規模も小規模である点では、近畿中央部の一般的な特徴と合致する。加えて、埋設土器をはじめ、出土する土器は近畿中央部に通有の北白川C式に比定できるものである。すなわち、宮の平遺跡例は埋甕を含む住居形態の個別的な要素のみが取り入れられ、全体としては在地的な様相をもつ集落であると評価できる。

このほか、注意される事例として、小牧南遺跡S X 250と滋賀県丁田遺跡S X 01では、石製装飾品が内部から検出された（図87-4、図88-2）。いずれも胴部上半以上は削平

によって失われており、土器埋設遺構の上部構造は不明である。人骨の検出もないため、埋葬施設か否かは確定できないものの、玉製品という属人性の高い器物である点からその可能性を考慮すべき事例と言える。丁田遺跡では、これとは別に、深鉢を入れ子状にして土坑内に埋納した遺構（土器埋設Ⅱ類、図88－3）も検出されており、複数の土器埋設にかかわる行為が併存していたことがわかる。

以上のことから、中期末葉の段階では、近畿地方東縁部にあたる福井県嶺南地域・三重県域において、土器埋設遺構の定着が進むものと言える。しかし、土器埋設Ⅰ類に定型的・画一的な様相を見出すことはできず、近畿地方中央部においては宮の平遺跡例のような間欠的な事例がみられるに留まっており、集落の要素としても定着度は低いものであったと位置づけることができよう。むしろこの時期には、石囲炉内への土器片埋納（土器埋設Ⅳ類a種）をはじめ、多様な土器埋設にかかる行為がみられる点こそ評価すべきであろう。

後期初頭にはさらに事例数が増加し、土器埋設Ⅰ類だけで41例となる。これは一遺跡での検出数が増えたことによるところが大きく、3基以上が検出された遺跡は6遺跡あり、中でも滋賀県今安楽寺遺跡では8基もの土器埋設遺構が検出されている。

埋設位置は、屋外埋設が顕著に多い。そうした中で、京都府浜詰遺跡例（図89－1）は、堅穴建物北壁中央付近に逆位で埋設された希少な例である。石囲炉との位置関係から、堅穴建物の奥壁にあたる部分と考えられる。このような住居奥壁に逆位で埋設されるものは、中部・関東地方において前述の「埋甕」と対比するかたちで、「伏甕」あるいは「倒置深鉢」とも呼称され、儀礼・祭祀的な性格が想定されている〔神村1973・1974，山本2008〕。本例は埋設された土器も在地の福田K2式ではなく、中部・関東地方に主体的に分布する称名寺Ⅱ式の特徴を有している。ただし、「倒置深鉢」は底部穿孔を特徴とするが、本例には二次加工がみられないようである。また、隣接地区でおこなわれた発掘調査も含めて、在地的な土器群が主体的であることから、この事例も前段階の宮の平遺跡例と同様に、「倒置深鉢」の個別的要素のみが取り入れられたものと考えられる。

居住域に近接して屋外土器埋設遺構が構築される事例としては、和歌山県丁ノ町・妙寺遺跡や滋賀県今安楽寺遺跡が挙げられる。今安楽寺遺跡では中津式期の平地式住居と福田K2式古段階の堅穴住居が各1棟検出され、その周辺に中津式～福田K2式にかけての土器埋設遺構が8基確認された（図89－2）。いずれも単体の土器を正位または正斜位に埋設し、SX01を除く7基は底部への穿孔または底部を除去するなど、埋設方法に一定の共通性を認めうる。ただし、SX07では小型の素文深鉢に、底部穿孔の上で破片化された有

土器埋設遺構の様相

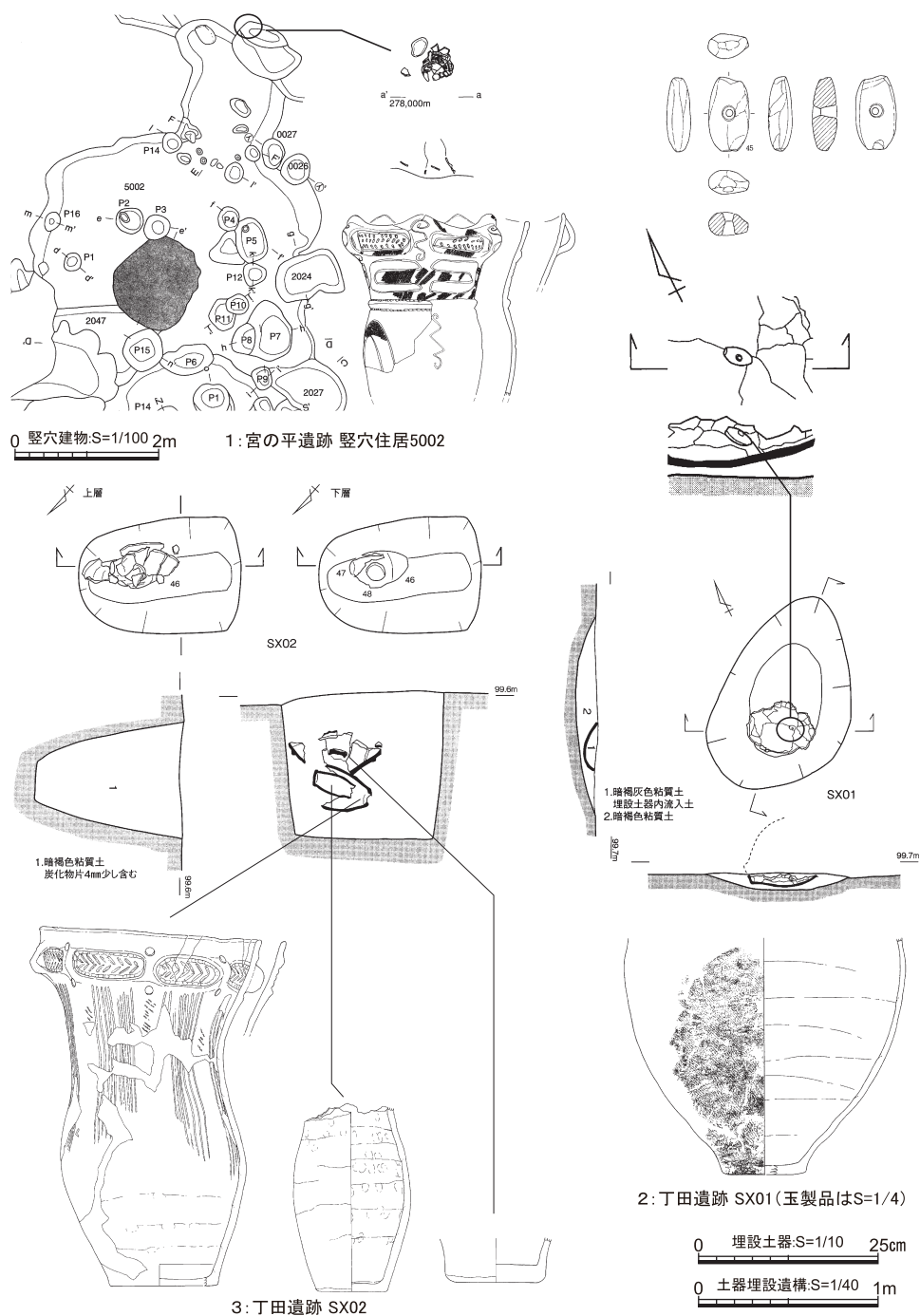


図88 中期末葉の土器埋設遺構

文深鉢の半身を収めたもので、本遺跡だけでなく他の遺跡でも類例のない特異な埋設方法である（図89-4）。丁ノ町・妙寺遺跡では、配石遺構を中心として半径約10mの範囲に堅穴建物3棟、堅穴状遺構2基が環状に取り囲むように検出された。遺構・遺物の遺存状態が良好ではないため時期比定に不確定な部分があるものの、これらの遺構は中津Ⅱ式から福田K2式古段階の比較的限られた期間に営まれたものと考えられる。土器埋設遺構と堅穴建物との関連性は必ずしも明らかではないが、建物3棟（堅穴状遺構を含めれば5棟）に対して土器埋設遺構が3基とほぼ対応する数が構築されており、建物に付帯するような性質を想定しうる。埋設方法は単体の土器を横位または逆斜位に埋設し、土器への二次加工はみられないなど、共通性が高い。

これに対して、居住域外に構築された事例としては、滋賀県起し又遺跡がある。起し又遺跡では中津Ⅰ式期を中心とする土器埋設遺構が5基あるが、堅穴建物は中期末葉・北白川C式成立期に比定されるもので、当該期の居住遺構は確認されず、遺物も相対的に乏しい（図89-5～7）。居住域としての利用から、一定の空白期間を経て土器埋設遺構を構築する場として転換した事例として捉えられる。

以上のように、後期初頭に至ってようやく、近畿地方において土器埋設遺構が集落を構成する要素として定着したとみなすことが出来よう。一遺跡における土器埋設遺構の複数構築が普遍的にみられるようになることが特質として挙げられるが、土器埋設遺構の諸属性においても同一遺跡での共通性が高まることがうかがえる。しかしながら、定型化するまでには至らず、変異型も多くみられる。このことは、先にみた器種選択における偏向性ともかわり、多様な背景にあった土器にかかわる諸行為が、集落内における土器の埋設という行為に収斂してゆく過渡的段階と評価しうると考える。

後期前葉は土器埋設遺構の事例数が最も多くなる時期で、全類型では158例、埋設土器Ⅰ類は146例とそのほとんどを占める。この中で、北白川上層式2期に下ることが確実なものは滋賀県小川原遺跡埋甕（埋99）と和歌山県溝ノ口遺跡SK-04（埋317）の2例のみに限られ、北白川上層式3a期のものはない。すなわち、土器埋設Ⅰ類の構築は、後期前葉でも北白川上層式1期までの限られた期間に極めて盛行し、その後は急速に数を減じて途絶するのである。一遺跡における検出数が3基以上となるのは15遺跡あり、京都大学植物園遺跡も含め6遺跡が7基以上と、同一地点での構築数も顕著に増加することも、当該期の特徴に挙げられよう。しかしながら、以下に示すように、群集して構築される土器埋設遺構Ⅰ類の集落構造における位置は、多様なあり方を示す。

土器埋設遺構の様相

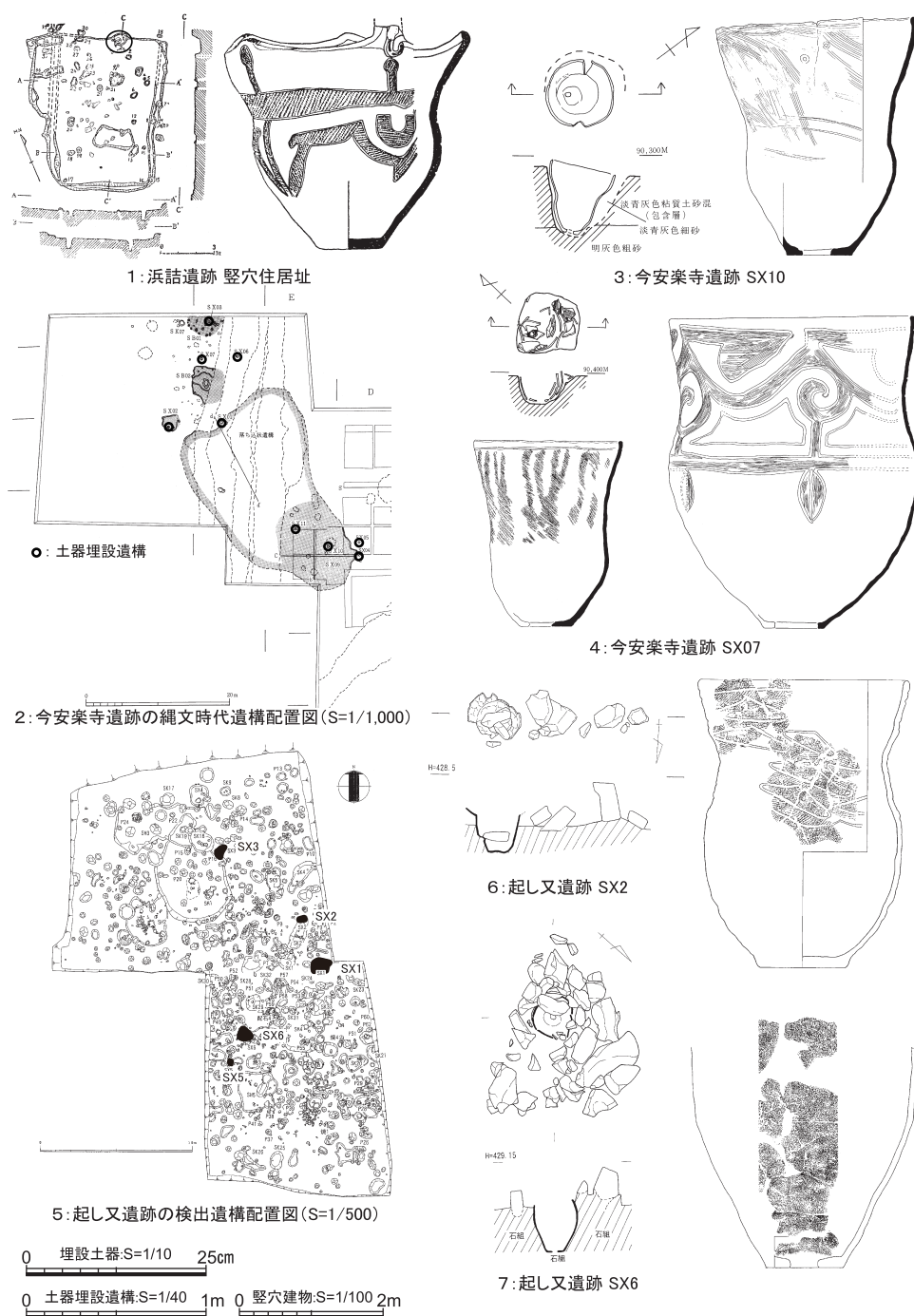


図89 後期初頭の土器埋設遺構 I 類

三重県新徳寺遺跡は、四ツ池式／広瀬土壙40段階から北白川上層式1期までの竪穴住居4棟と、同時期の埋設土器5基が検出された集落遺跡で、居住域に隣接して土器埋設遺構群が構築された典型的な事例と言える（図90-1～3）。竪穴住居は、覆土の出土遺物からおおよその時期を推定すると、四ツ池式（SH236）、四ツ池式～芥川式（SH59）、北白川上層式1期（SH29、SH207）となり、各期に1～2棟が営まれたものと考えられる。土器埋設遺構は無文土器のため時期細別が難しいが、SZ46は竪穴住居SH59の埋没後にその埋土を掘り込んで構築されたもので、住居と埋設土器がすべて同時でないことは明らかである。ここから、前段階の丁ノ町・妙寺遺跡のように、土器埋設遺構が建物に付帯するようなあり方が見出されよう。住居址数と土器埋設遺構数がおおむね対応するような集落遺跡は、兵庫県東南遺跡や奈良県別所ツルベ遺跡、三重県下川原遺跡、滋賀県林・石田遺跡など広く認められるため、こうした集落構造が一般的なありかたであったと考えられる。なお、林・石田遺跡では竪穴住居E区SB-1内に構築された埋甕1（図90-4）の埋土から、焼骨片が出土している。この骨片はヒトの少年期以上の手根骨である可能性があり、そうであれば集成した事例の中で唯一、（再葬）土器棺墓に比定できるものとなるが、鑑定には推定も含まれるため確実ではない。

これとは対照的に、滋賀県宮司遺跡は、南北約100m、東西約20mの範囲内で、15基の土器埋設遺構が検出された（図91-4～6）。未調査区も多いが、調査区内では明確な居住遺構が確認されず、土器埋設遺構のみが群在化した事例として位置づけられる可能性がある。京都大学植物園遺跡の土器埋設遺構群も、南北約20m、東西約14mの狭小な範囲に、7基の土器埋設Ⅰ類が集中して構築されており、この点では宮司遺跡との類似性を指摘できよう。しかし、宮司遺跡では配石遺構はみられず、単純に同一視することはできない。

和歌山県中飯降遺跡では、居住施設とは隔絶した規模を有する大型竪穴建物に土器埋設遺構が集中的に構築されており、特異な事例として挙げられる。大型竪穴建物1では8基、大型竪穴建物2では5基の土器埋設Ⅰ類が検出された。大型竪穴建物1では、床面上と考えられるものが4基、埋土上に構築されたものが4基あり、建物の構築時だけでなく、埋没過程においても土器埋設遺構の累積的構築が続けられたことがわかる（図91-1）。床面上のものには建物の支柱穴に隣接して構築されたものがあり、中でも10032・10086は上部のマウンドが報告され（図91-2の2層）、上部構造の判明する貴重な事例である。この10032・10086は、住居構造からみると奥壁側の支柱にあたると考えられ、配置に意図的な選択をうかがうことができよう。支柱穴に沿った土器埋設Ⅰ類の構築は大型竪穴建物2

土器埋設遺構の様相

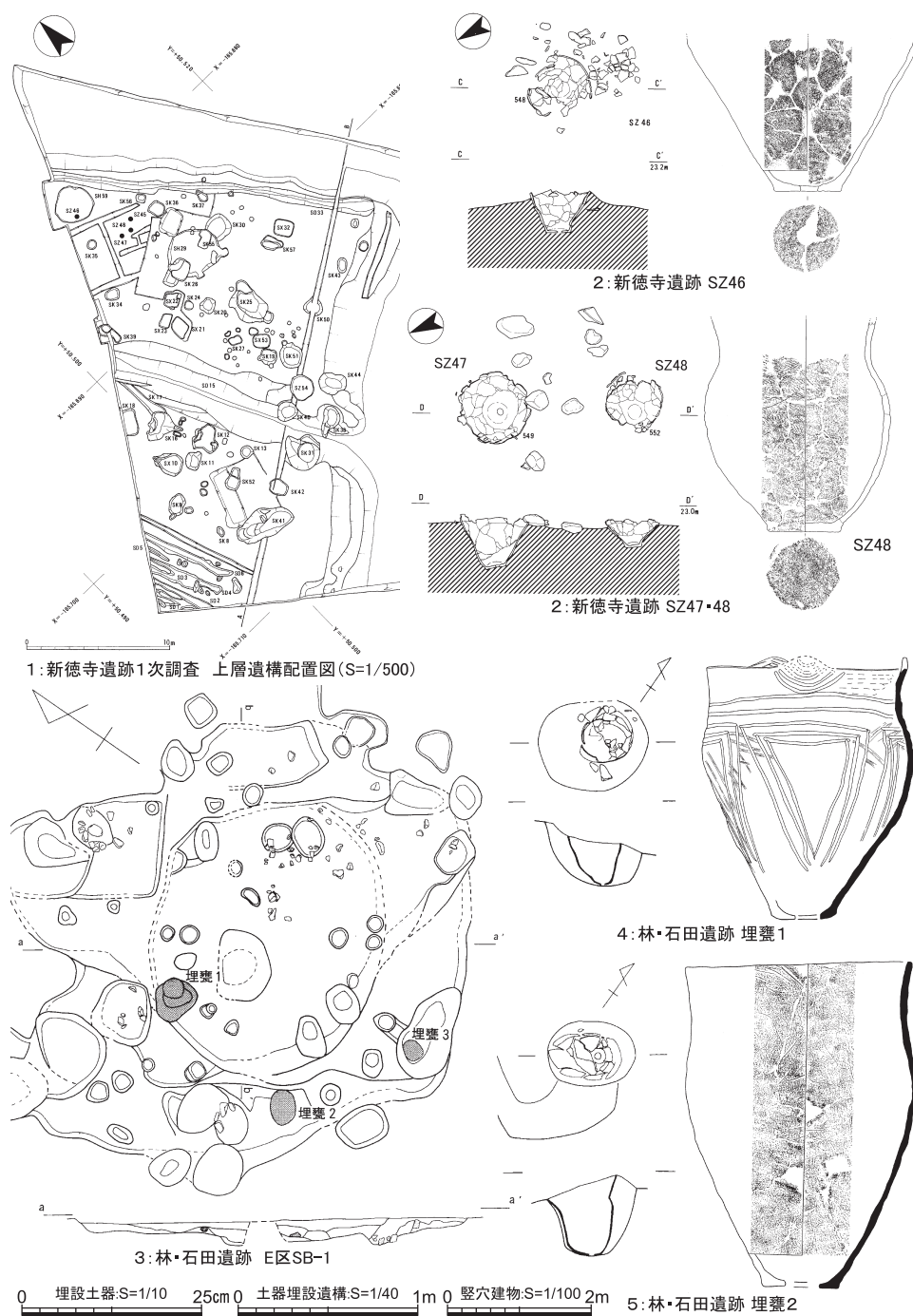


図90 後期前葉の土器埋設遺構 I 類 (1)

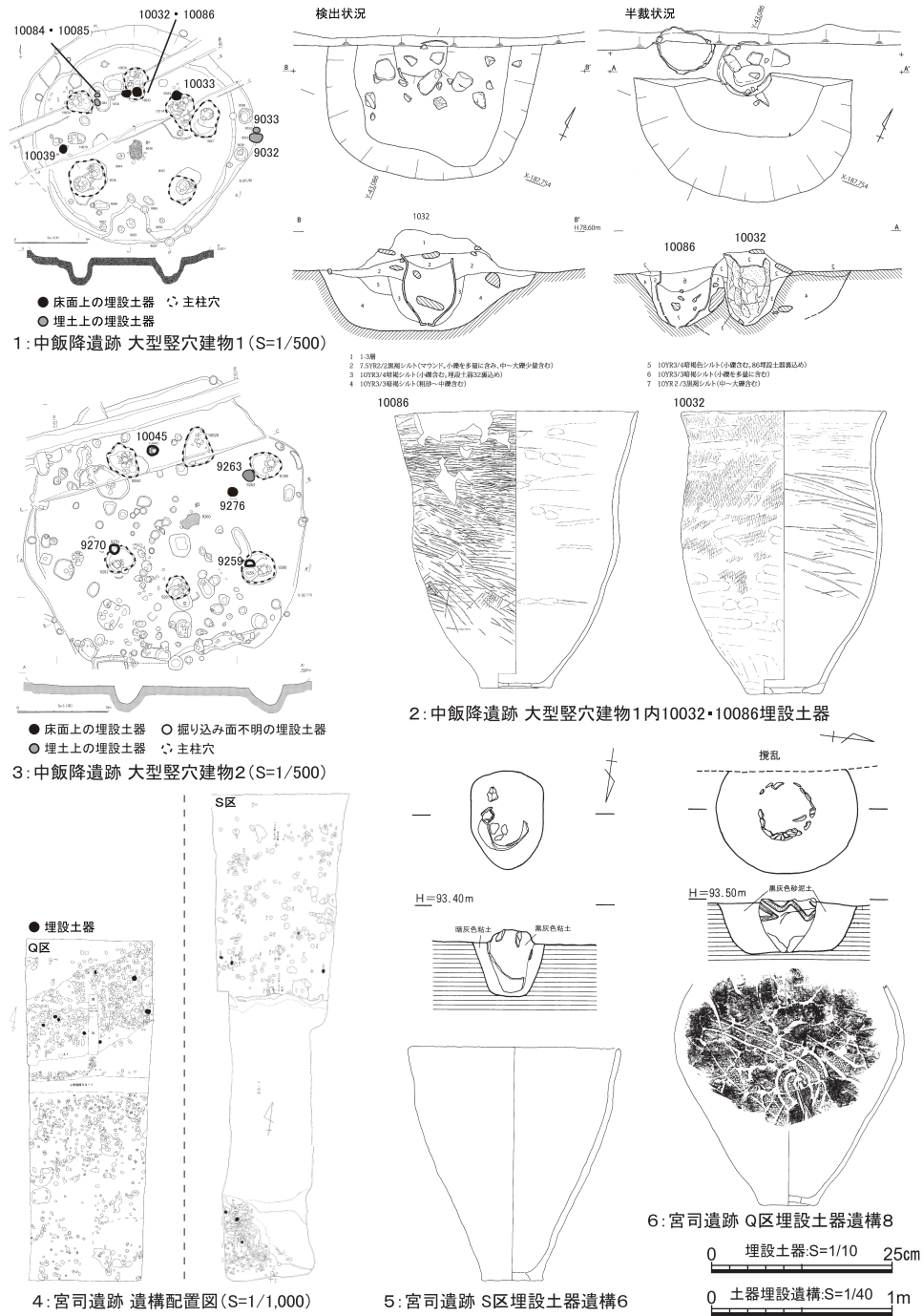


図91 後期前葉の土器埋設遺構 I 類 (2)

土器埋設遺構の様相

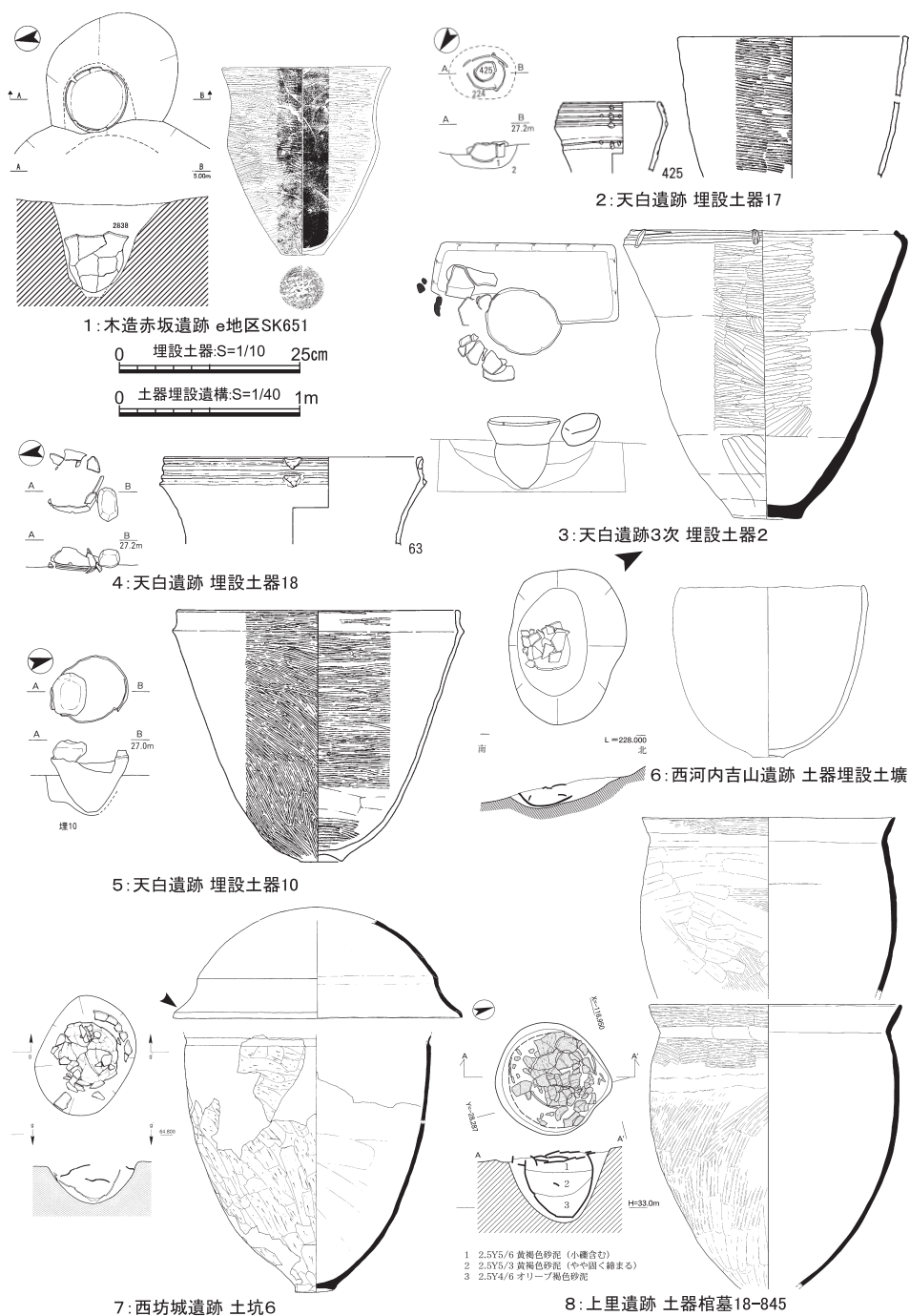


図92 後期中葉～晩期前葉の土器埋設遺構 I 類

でも同様であり（図91－3），建物の構築にかかる儀礼・祭祀的な意図をもった埋設行為と考えられる⁽⁶⁾。いっぽう，ここで使用される土器には，他遺跡を含めた全体的な傾向から逸脱する様相はみて取れず，意図的な選択性は見出し難い。

以上にみたように，土器埋設Ⅰ類の盛行する後期前葉前半においては，住居に付随する屋外施設として構築されるパターンが一般的であると考えられる。このパターンから逸脱して群集的に構築される事例も散見されるが，その様相は遺跡によって変異が大きいことが特質として指摘できる。他方において，各種属性において触れたように，単体の深鉢に底部への二次加工を施してから，正位・正斜位に埋設するという構築パターンが画一化する傾向が強い。これらのことから，後期前葉においては，土器を埋める行為自体に意味性が付与され，それが近畿地方において共有されていたものと考えられる。そして，基本的には住居単位，すなわち世帯単位での行為として位置づけられ，各集落，すなわち居住集団単位で，それぞれの経緯により集中的・累積的になされる場合があったと想定できる。

後期中葉に位置づけられる例は2例のみで，後期前葉後半から引き続いて，土器埋設Ⅰ類の構築はほぼ途絶した状態が続く（図92－1）。後期後葉から晩期初頭にかけは，31例の土器埋設Ⅰ類が確認できるが，このうち27例が三重県天白遺跡の事例である（図92－2～5）。したがって，全体傾向としては中期後葉以前の水準まで低下し，土器埋設Ⅰ類は後期前葉後半から当該期を通じて集落構造の一部となることはなかったと考えられる。

天白遺跡で検出された土器埋設Ⅰ類は，後期後葉21基，後期末葉4基，晩期初頭1基，後期後葉～晩期初頭1基である。後期後葉のうち型式の判明する11例中，元住吉山Ⅱ式が4基，宮滝1式が3基，宮滝2式が4基となり，後期後葉を通じて一定数の構築が続けられたものと考えられよう。また，天白遺跡における埋設方法の特徴として，有文深鉢を選択し，二次加工をおこなわず，逆位・逆斜位に埋設するものが主体となる点が挙げられる。これらの諸特徴は，後期前葉前半にみられた埋設方法との関連性が極めて低い。三重県という立地も考慮すると，他地域の影響を強く受けて成立したものと位置づけられよう。この点，3次調査で検出された埋設土器2は中部・東海地方の高井東式併行期に類する土器が用いられていることも注目される（図92－3）。なお，天白遺跡では配石遺構も群在しており，土偶や石棒といった儀器が多数出土しているが，住居址は検出されず居住域から分離した祭祀空間的な様相が強いものと評価されている⁽⁷⁾〔森川編1995，岡田憲2005〕。この点については配石遺構の項にて取り上げる。

晩期前葉は，土器埋設遺構がふたたび増加する時期にあたる。前項において，この時期

には土器蓋を有するものが一定量含まれることを挙げたが（図83）、蓋とする土器には逆位の浅鉢を用いた合わせ口のもの（図92－7）と、深鉢の破片を用いたもの（図92－8）の二者が認められる。前者については、九州の後期後葉に成立する「九州型埋甕」〔坂本1994〕に系譜することが指摘されるものである〔岡田憲2019〕。この時期に土器埋設Ⅰ類が盛行し始める背景として、土器型式にみられる変化とあわせて九州地方からの影響が想定されてきたが〔立岡2000〕、それを具体的に示す事例と言えよう。いっぽう、後者の破片で蓋をするものについては、埋設にかかる行為に差異が認められることから、「九州型埋甕」と直接的に対比することは適切でないだろう。「九州型埋甕」の事例が僅少であることも含めて、九州地方からの影響のみでは当該期の様相を理解し得ないと考える。

晩期前葉の土器埋設遺構が確認される遺跡では、後続する晩期中葉・篠原式期にも継続して営まれ、土器埋設遺構の構築が盛期を迎える。さらに晩期後葉～末葉の凸帯文土器期にかけても継続することもある。代表的な事例としては滋賀県滋賀里遺跡・北仰西海道遺跡、大阪府馬場川遺跡、三重県下川原遺跡が挙げられよう。また、これらの遺跡では土坑墓とともに検出される事例が多い点、晩期初頭以前とは大きく異なる特徴である。すなわち、土器埋設遺構にいわゆる土器棺墓としての性質を認めることができ、これが土坑墓とともに墓域を構成する要素として確立してゆく段階と考えられる。

4 配石遺構の様相

(1) 配石遺構数の時期的変化

今回集成した配石遺構は444例である。中期中頭の事例はみられず、中期前葉から晩期前葉に比定しうるものがある。全体のうち、Ⅰ類が211例（47.3%）、Ⅱ類が140例（31.4%）、Ⅲ類が40例（9.0%）、Ⅳ類が51例（11.4%）、となり、Ⅰ・Ⅱ類が主体的な類型であることがわかる（表4）。

次いで、時期ごとの類型の割合をみていこう（図93）。中期前葉～中葉は事例数が限られるため、具体的な様相をつかむことは難しい。中期後葉では事例数は少ないが、Ⅳ類、すなわち石囲炉で占められる。さらに中期末葉においてもⅣ類が5割程度を占めており、近畿地方において配石遺構の出現・定着を考える上では、石囲炉が重要な役割を果たしたことが推測されよう。後期初頭に至ると、事例数は中期末葉とほぼ変わらないが、その構成が大きく変化している。すなわち、半数近くを占めていたⅣ類は1割に満たず低調となり、代わってⅠ・Ⅱ類が9割近くを占めるようになる。このうち、Ⅰ類に比してⅡ類が

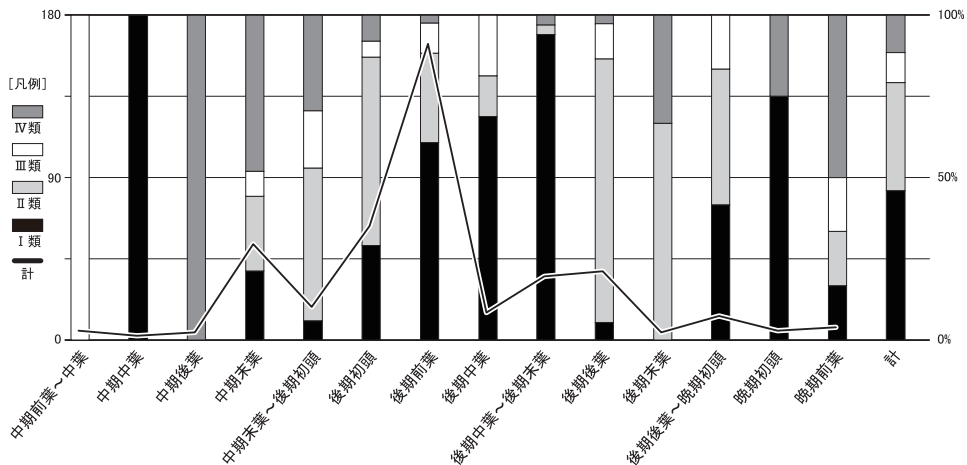


図93 配石遺構数の時期的変化グラフ

1.5倍ほど多い点に特徴を求めることができるだろう。Ⅱ類は土坑を主とする遺構であることから、主として地下施設として配石遺構が構築されることがうかがえる。続く後期前葉には事例数が倍増し、全時期を通して最も頻繁に配石遺構が構築される。類型の構成では、Ⅰ類が6割以上を占めており、後期初頭に比べて地上施設として構築される傾向が強くなる。後期中葉に至ると事例数が急減し、後期前葉の1割程度の事例にとどまる。ただし、類型の構成にはあまり変化がみられない。後期後葉から末葉にかけて、緩やかに事例数が増加する傾向が認められる。このとき、Ⅰ類の減少傾向とⅡ類の増加傾向が重なって生じており、類型構成の転換が著しい。しかし、晩期初頭では一転してⅠ類が8割近くを占めるようになる。検出数でみると、これはⅡ類の事例が急減することに起因することがわかる。さらに、Ⅰ類が地上施設であるために時期の特定が困難であるという方法的な問題をともなっていることから、晩期初頭に位置づけられるものは提示した数量よりも少なくなる可能性もある。後続する晩期前葉には、配石遺構がほとんどみられないことも考慮すると、晩期初頭から前葉にかけては配石遺構の構築が総じて低調となるものと位置づけられよう。

(2) 配石遺構の変遷

次に、具体的な配石遺構の事例をもとに、特に配石Ⅰ・Ⅱ類の様相を中心に取り上げながら、近畿地方における配石遺構の変遷を検討する。

中期後葉までは事例数は少ない。大阪府野畑春日町遺跡では、中期前葉～中葉とみられるものが4基ある。いずれも長形土坑に小礫が含まれるもので、配石Ⅲ類d種にあたる(図

94-1)。ただし、土坑の形態は不定形で底面も平坦面をなさず、混入する礫は5～20cm程度と小型であるため、意図的な配石行為とは断言しがたい。同遺跡の3次調査では、この種の遺構は風倒木根である可能性も指摘されているため、今後の類例の増加を待つ必要があろう。中期中葉では、兵庫県小部北ノ谷遺跡で配石Ⅰ類b1種(図94-2)があるほか、大阪府砂遺跡でも確認されている(表5-配265, 以下「表5-」は省略)。現状では、これらに共通性や系統性を見出すことは難しく、一部の遺跡において配石遺構が散発的に構築されていた状況をうかがうのみに留まる。中期後葉でも、時期が不確定な醍醐遺跡の「石造特殊遺構」(図71)を除くと、配石Ⅰ・Ⅱ類はみられない。この時期の注目すべきものとして配石Ⅳ類、すなわち石囲炉の出現がある。特に京都府薪遺跡(図94-4)と三重県鈴山遺跡(図94-5)をみると、薪遺跡の石囲炉は原形を留めない部分が多いものの、両者の住居形態は極めて近似している。このような住居形態は、中部地方から東海・北陸地方において、中期後葉に盛行するものとされる〔橋本1976, 櫛原1991, 岩田・大石2003〕。鈴山遺跡や起し又遺跡(図94-3)では、出土土器の特徴が東海地方西部の中富Ⅳ・Ⅴ式に相当することから、これらの分布圏の末端として理解することは可能だろう。しかし薪遺跡では、出土遺物は限られるので問題は残るが、在地的な里木Ⅱ・Ⅲ式が主体となるものとみられる。薪遺跡の住居形態は在地的な展開の中では決して成立し得ず、東海・北陸以東から石囲炉を含むこうした住居形態が、この段階には確実に近畿地方中央部まで影響していたことが指摘できよう。石囲炉の波及と狭義の配石遺構とのつながりはなお検討の余地があるが、配石遺構の定着に至る前の様相として、中期後葉を一つの画期と捉えたい。

中期末葉では配石遺構の事例が増加する。これは、集落遺跡数および住居址数との増加とも同調的な傾向であるが、それに加えて奈良県宮の平遺跡で7基、滋賀県起し又遺跡で4基など、一遺跡での検出数が増加しており、配石遺構が累積的・集中的に構築されることが指摘できよう。

配石Ⅰ類では、立石状となるⅠ類e種が注目される。奈良県宮の平遺跡例(図95-1)が最も良好であるが、このほかに起し又遺跡配石遺構2(図95-2)も、上部を欠失するものの、立位の礫が並ぶ。醍醐遺跡の石造特殊遺構(図71)も、立石としての評価が難しいが、これに類するものであれば、中期末葉に位置づけても矛盾なかろう。これ以外の当該期の配石Ⅰ類は図95-3のように径2m以下の小型のものがほとんどであるが、大阪府仏並遺跡では大型の配石Ⅰ類c1種が2基隣接して確認されている(SX011・SX012, 図95-10)。この2基の用いる礫の大きさや配置には共通性がなく、相互の関係性は不明

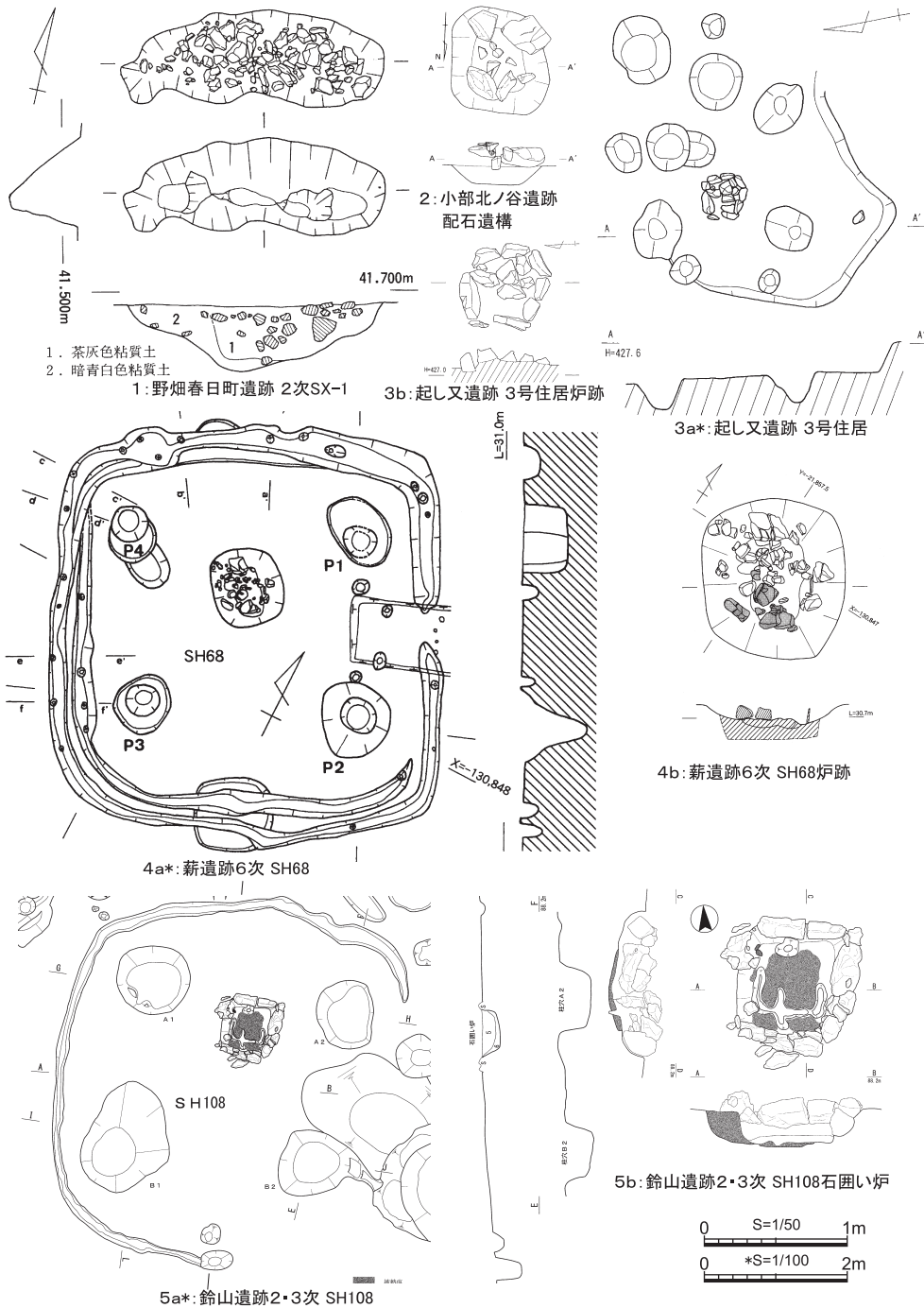
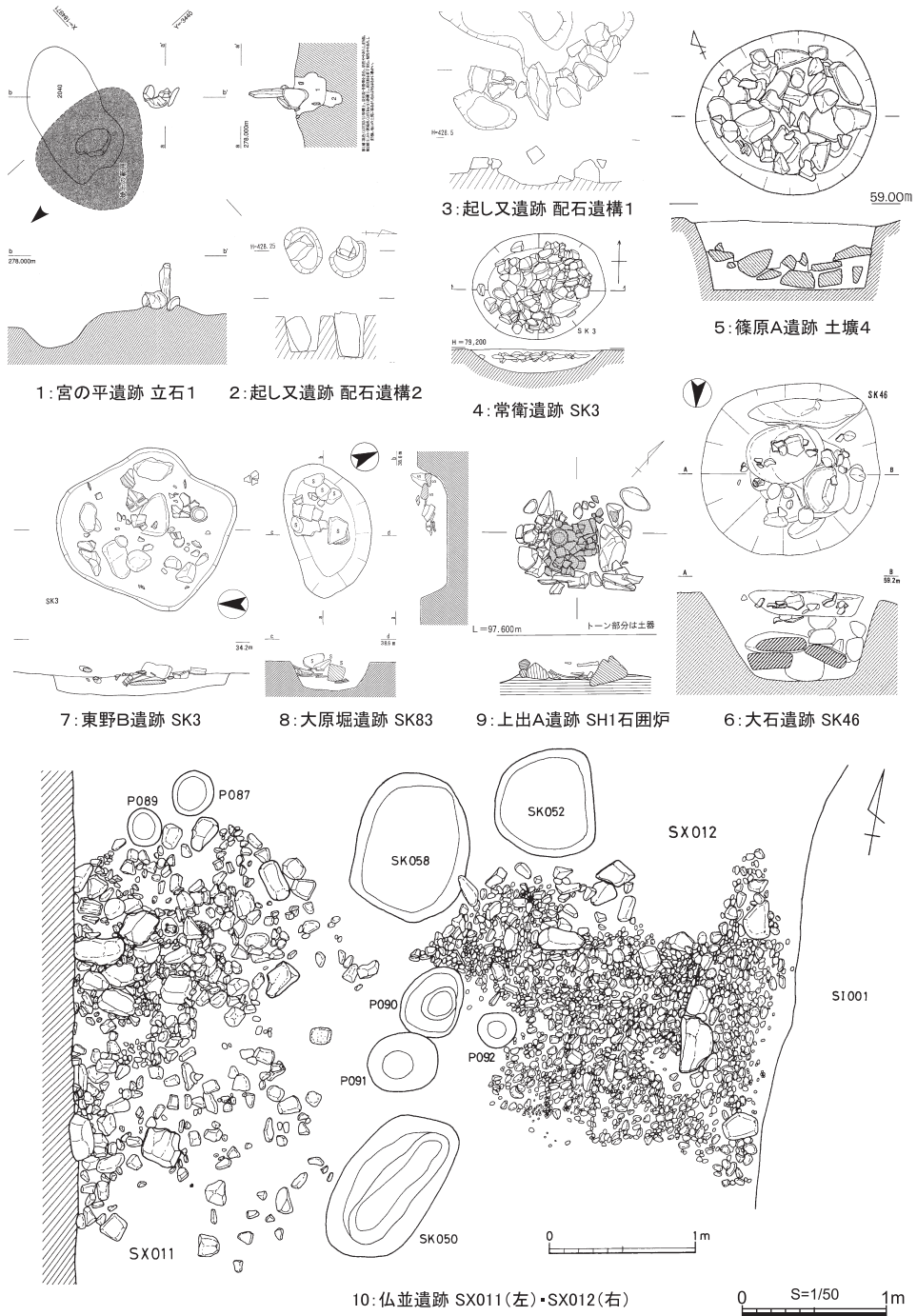


図94 中期後葉以前の配石遺構

配石遺構の様相



であるが、SX012に関しては上面が平坦に揃うことから、敷石的な性格があった可能性のある事例である。

配石Ⅱ類では、礫が不規則に落ち込むⅡ類b種が主体的である。三重県東野B遺跡SK3（図95-7）、中の原遺跡土坑4などでは、礫と共に複数個体の土器片や焼土、骨片が含まれる。これらはいわゆる廃棄土坑と考えられる。このほか、土坑内に礫を密に配する配石Ⅱ類a種（図95-4～6）や、土坑墓形状をもつ配石Ⅲ類（図95-8）もみられ、この段階には配石遺構の類型がほぼ出揃うようである。

配石Ⅳ類は、近畿一円で確認されるようになり、炉の形態として普遍的なものとなる。この中には、炉内に破片化した土器を埋置するものが認められる（図95-9）。炉底に土器片を敷きたいわゆる土器敷炉とは異なり、炉内を埋めるように埋置されるものが通例である。したがって、炉の機能廃止にともなう行為と捉えられ、儀礼・呪術的側面の強いものと考えられる。

以上の事例をもとに、中期末葉における配石遺構の性質を考えると、まず配石Ⅰ類e種は、地上施設として構築された配石Ⅰ類のなかでも、特に強い空間の標示性を具有する。先述した集中的・累積的な配石遺構の構築とあわせて、当該期における特定空間の場所性を示すものと捉えうる。ただし、これらの配石と有機的に関連するような儀器の出土はみられず、また中央広場のような空閑地の境界ともみなし難い。したがって、少なくとも現状では特別な空間を分離・標示するような施設として評価しうるものではなく、より生活空間としての利用に根差した標示の意図を想定したい。

この点、配石Ⅳ類が多い点と、配石Ⅱ類では廃棄土坑とみられる配石Ⅱ類b種が主体となることも重要であろう。すなわち、石囲炉を有する堅穴建物のような、恒久性のある居住施設を有することは、特定空間への定着性が強まることを示唆する。また、集落において不要物の廃棄がある程度まとまっておこなわれる点では、居住空間内の汚染を積極的に制御する意図を想定しうる。すなわち、中期末葉における配石遺構の増加、特に累積的に構築される事例の増加は、特定の地点への定着的な生活様式が普及することにもなるものと理解することができよう。

後期初頭は、丁ノ町・妙寺遺跡で11基、大阪府池田寺遺跡で6基など中期末葉に比べてさらに一遺跡での検出数が増加する。また、仏並遺跡や宮の平遺跡など、中期末葉から継続する事例も認められる。配石遺構そのものの精緻な年代的位置づけは困難であるため、後者のような事例がどの程度の連続性を有するのかが課題として残るが、配石遺構も集落

配石遺構の様相

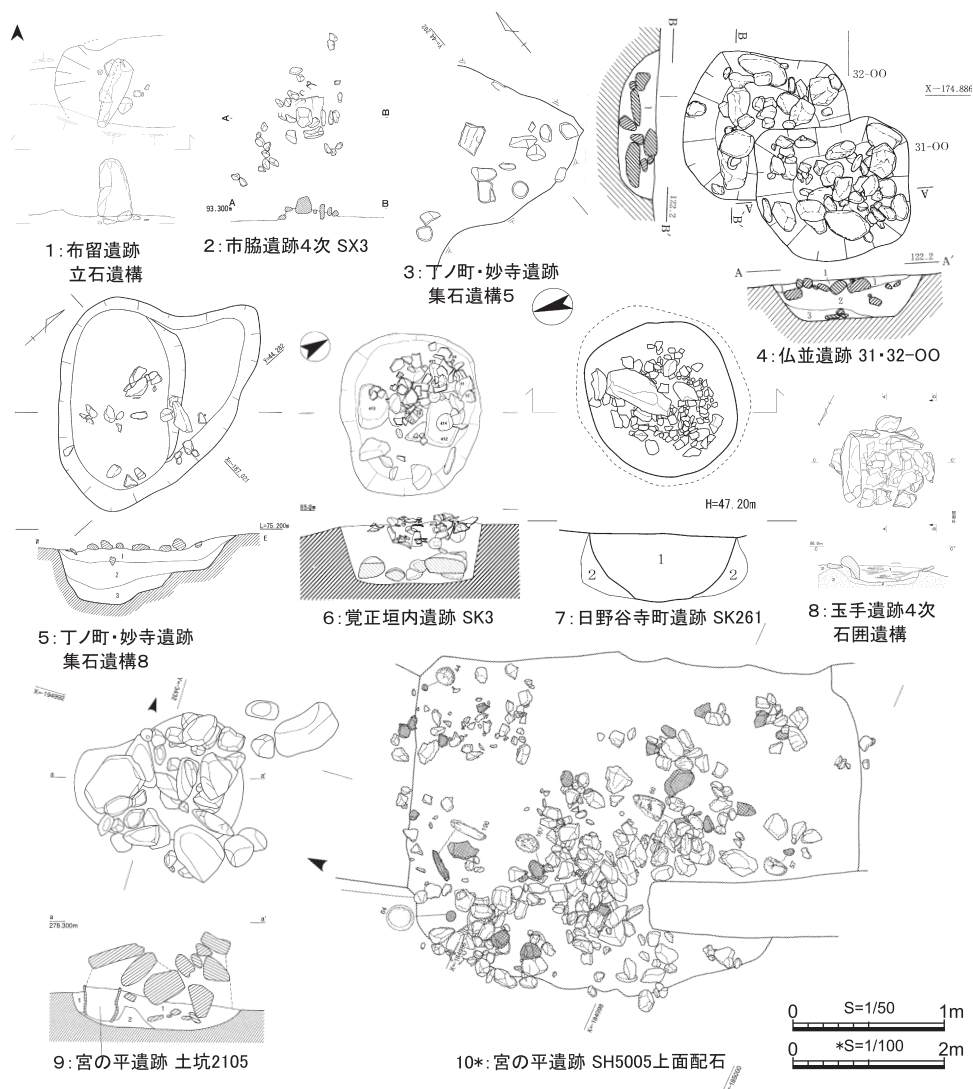


図96 後期初頭の配石遺構

全体の継続と連なった展開を示すものと考えておきたい。各類型にあまり形態上の差異がみられない点も、その傍証となろう（図96－1～8）。

そうした中で、類型構成に関しては、後期初頭には配石Ⅱ類が主体的になる点が特徴となる。特に、不規則に礫が落ち込む配石Ⅱ類b種が半数以上を占めることは、集落内に於いて、礫を含む不要物を集約的に廃棄する行為がより一般化したと理解することができる。日野谷寺町遺跡のS K261（図96－7）のように、断面形が袋状を呈する土坑も含ま

れており、貯蔵穴等の施設を廃棄坑として利用したものも一定量あったと考えられる。なお、配石Ⅰ類にも不定形で配石の意図が不明瞭な配石Ⅰ類d種が一定程度みられる。中でも、宮の平遺跡の竪穴住居5005上面配石（図96-10）は、多量の遺物とともに焼土や炭化物を含んでおり、配石Ⅱ類b種と同様に廃棄行為によって形成されたものである可能性がある。さらに付言すれば、配石Ⅱ類b種とした大阪府池田寺遺跡2503-00（配271）では、含まれる焼骨片に人骨が混じる。ほかに類例はないが、単なる生活残滓の廃棄のみならず、ヒトの遺体処理をも含む葬送儀礼にともなう行為の発達が表れている可能性があるだろう。

他方、後期初頭から顕在化するものとして、土器埋設遺構の上部に配石をもつ事例がある（図96-9）。これらの地上部は立石状または積石状であり、立体的な外観を示していることが特徴である。すなわち、中期末葉にみられた配石Ⅰ類e種のような標示性の強い配石形態と、後期初頭に増加する土器埋設遺構が組み合わさった遺構と評価できよう。

後期前葉に至ると配石遺構の事例数は最も多くなり、前後の時期にまたがる可能性のある例などを除いても164例を数える。前段階までに比べて、一遺跡での検出数がさらに増加し、京都大学植物園遺跡では10基、兵庫県延吉遺跡では9基、滋賀県小川原遺跡に至っては100基を越す配石遺構が検出されている。また、後期初頭の状況とは対照的に、これらの遺跡で後期初頭から継続して営まれるものは仏並遺跡など少数に限られ、後期前葉からあらたに集落形成が始まった遺跡が過半を占める。さらには、京都大学植物園遺跡や小川原遺跡に代表されるように、後期前葉でも1～2型式の幅におさまるような、比較的短期間の利用に留まるものも多く、したがって配石遺構が短期間のうちに集中的に構築されたことが最大の特徴と言えよう。小川原遺跡は中でも特異な事例であり、その数量が全体量比に大きく影響することから、これを考慮して検討を進める。

配石Ⅰ類は、北白川上層式1期より以前に比定されるものでは、京都大学植物園遺跡に代表されるように、径2m未満の比較的小規模な配石Ⅰ類a・b種が主体となる。配石Ⅰ類a種は立体的な構造をもつことから、配石Ⅰ類e種と同様に強い標示性を有する。京都大学植物園遺跡配石Ⅰ号（図97-1）は棒状礫が隣接することから立石状であった可能性のあるものだが、後期初頭以前の配石Ⅰ類e種と比べると、根石となる基部の配石が大形化していることが明らかである。さらに、京都大学植物園遺跡配石Ⅶ号（図97-2）などの平面的な配石Ⅰ類b種は、中村徹也が指摘したように、形態としては上部の積石を省略したもののみとみなすことができる〔中村徹1974〕。いっぽう、北白川上層式2～3a期では、大阪府縄手遺跡10次調査配石遺構（図97-3）や和歌山県溝ノ口遺跡SX-01（図97-4）

配石遺構の様相

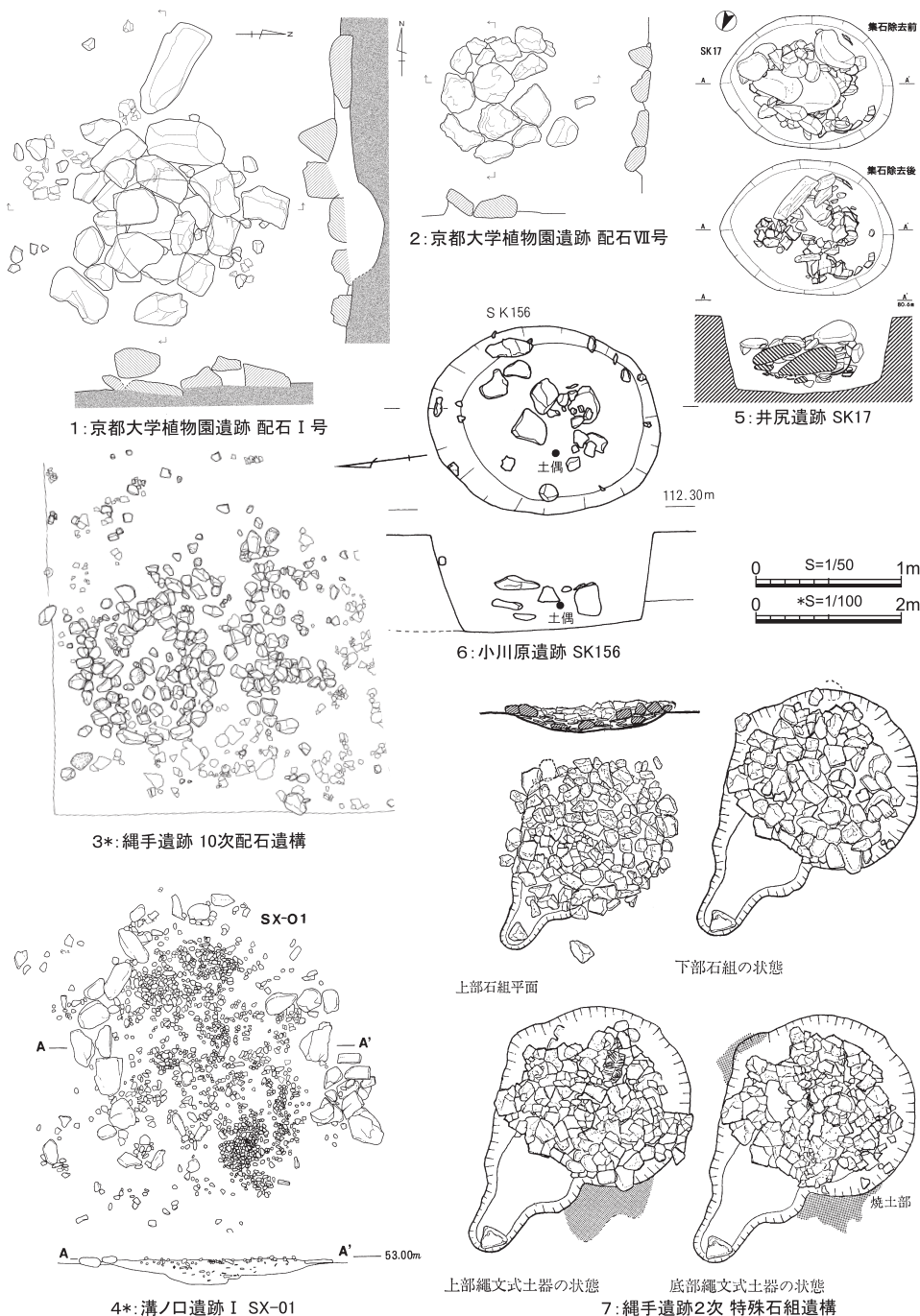


図97 後期前葉の配石遺構(1)

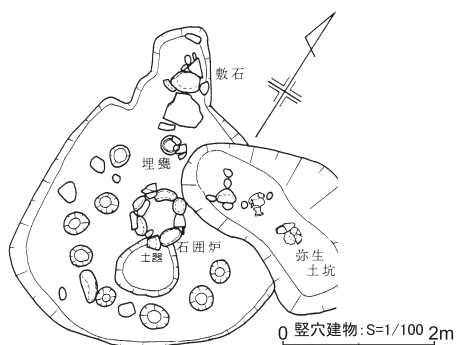
のように、径2mを超える規模の配石Ⅰ類c種が普遍化し、代わって積石状の配石Ⅰ類a種はみられなくなる。

以上のことから、配石Ⅰ類は、中期末葉にあらわれた地点の標示性が強いⅠ類e1種から、後期前葉・北白川上層式1期までには基部が大型化して積石状となったⅠ類a種に変化する。ここからさらに、立体性を失った配石Ⅰ類b種へと変化し、平面的な広がりを表示する指向性をもつようになると考えられる。そして、北白川上層式2期には、その平面的な範囲が拡大することで、大型の配石Ⅰ類c種が成立するものと整理できよう。

これに対して配石Ⅱ類は、後期初頭の状況から大きな変化は認めがたい。三重県井尻遺跡SK17(図97-5)や兵庫県貝野前遺跡SK70では土器片とともに多量の炭化種実も出土し、廃棄土坑としての性格を想定できる。他方で、小川原遺跡では貯蔵穴SK156・SK247に礫とともに土偶・石棒がそれぞれ含まれており、儀器的廃棄と貯蔵穴の廃絶との関係が注意を惹く(図97-6)。縄手遺跡の特殊石組遺構(図97-7)は、配石Ⅱ類a種に分類したが、皿状の土坑に小礫と土器片を交互に重ねた特異なものである。この遺構の周囲には焼土が展開することから、中期末葉から後期初頭にみられた石囲炉内への土器片埋納との系譜関係を想起するが、礫敷をとまなう点で異質であり、後期初頭から本例までの時間的懸隔も大きい点、検討の余地を残す。配石Ⅱ類d種とした柄鏡形敷石住居は三重県下川原遺跡の1例のみ(図98-1)であるが、中央部に石囲炉を構えて、炉と張出部の間には逆位の埋設土器を備えており、敷石が部分的な範囲のみに確認されることを除けば変容は少ない。柄鏡形敷石住居は、関東・中部地方の中期後葉・加曾利EⅢ式～後期前葉・堀之内1式を中心に盛行することが知られるが、下川原遺跡の例は出土土器から後期前葉・北白川上層式1b期、すなわち関東地方の堀之内2式初頭に併行し、地域的にも時期的にも周縁の事例と位置づけられよう。

配石Ⅲ類も少数ながら複数の遺跡で散見される。溝ノ口遺跡ではb+c種としたSX-04(図98-3)から硬玉製丸玉が出土しているが、配石に規則性が乏しく、定型的なものとは言い難い。なお、SX-02(図98-2)は配石Ⅰ類c3種に分類されるが、下部土坑が土坑墓形状をとることから、配石をとまなう土坑墓であった可能性がある。小川原遺跡Ⅰ第9号配石(図98-4)は、土坑の形状は明確ではないが、長方形の箱状に礫を配する意図を読み取ることができる。これらはいずれの例も墓としての機能は確定的でないものの、配石土坑墓であったとしても、これらが集中的に構築されることはなかったものとみなせよう。

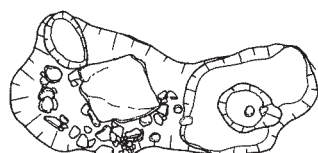
配石遺構の様相



1: 下川原遺跡5次 柄鏡形住居

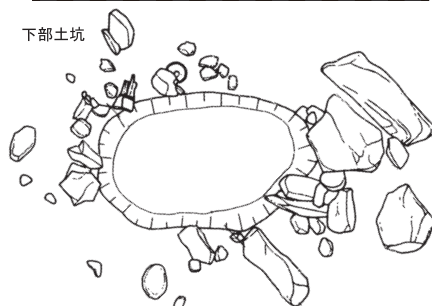


下部土坑

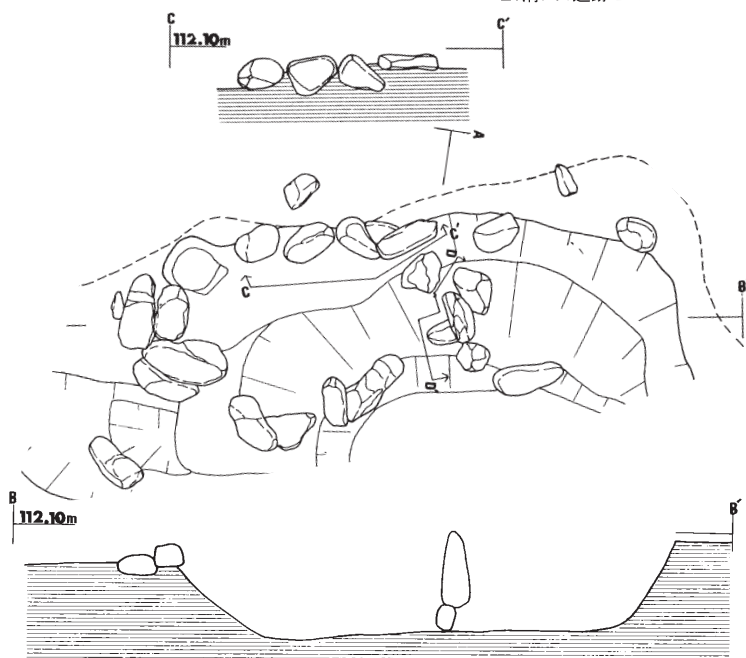


3: 溝ノ口遺跡 I SX-04

0 S=1/50 1m



2: 溝ノ口遺跡 I SX-02



4: 小川原遺跡 第9号配石遺構

図98 後期前葉の配石遺構 (2)

後期中葉前半の北白川上層式3b期～一乗寺K式にかけての様相は、遺跡の僅少さも相まって不明瞭な点が多く残る。一乗寺K式の小破片をとまなう和歌山県溝ノ口遺跡JSX-09(配437)が、この時期に特定しうるほぼ唯一の例となろう。焼土がとまなう点の特徴であるが、散発的な事例と位置づけるほかない。

これに対し、後続する元住吉山I式期では、配石遺構が集中的に検出された三重県天白遺跡をはじめ、滋賀県穴太遺跡、京都府森山遺跡、三重県森添遺跡などで複数の配石遺構群の形成がみられ、後期末葉にかけて盛行する様相を示す。この時期は、配石I類が主体となる点の特徴である。なかでも、立体的な構造をもたない配石I類b・c種がほとんどを占め、上述の北白川上層式2期の様相と共通する。ただし、溝ノ口遺跡JSX-07では土偶片が、穴太遺跡配石遺構-3では耳飾がともなっている。これを積極的に評価すれば、儀礼・祭祀場としての性格が強まったことを読み取ることができるかもしれない。

このことは、天白遺跡においてより顕著である(図99-1)。天白遺跡では前述のように土器埋設遺構群・配石遺構群に重なるように、多量の土器・石器類のほか土偶・岩偶、被熱した大型石棒、石刀・石剣など儀器類がまとまって出土した。まず、天白遺跡の配石遺構の分布状況に着目すると、外周に大径の礫を配置して内部に小径礫を充填する配石I類b3・c3種は1次調査区の南端から南西部にかけて集中して構築され、大礫を平面的に集めた配石I類b1・c1種もこれに付随する傾向にある(図99-2～4)。一方で、小円環状の列石となる配石I類f種はその周囲にあたる1次調査区北半から南東部にかけて散在的に構築されている(図99-5～7)。

遺構ごとの時間的關係性は十分明らかではないが、報告書において提示された土器型式ごとの分布状況〔森川編1995：第196図〕を参照すると、元住吉山I式は配石I類f種の散在する周辺部に多く、元住吉山II式～滋賀里I式は配石I類b3・c3種の集中する地点からも多く出土する傾向を読み取ることができる。また、出土した儀器類の型式学的な位置づけからは、後期後葉～末葉に主体があるとみられる。以上のことから、天白遺跡の配石遺構群は、後期中葉には散発的な萌芽段階であった儀礼・祭祀場としての性格が、後期後葉から末葉にかけて累積的に発展したことを示す事例として位置づけることができるだろう。

この天白遺跡の様相と対をなすとみられるのが、大阪府向出遺跡である。向出遺跡では、後期後葉から晩期初頭にかけて配石遺構が累積的に構築され、これに大型石棒や石刀・石剣類がともなっており、天白遺跡と同様に配石と儀器との関連が強く見出される。しかし

配石遺構の様相



1: 天白遺跡1次～4次調査 遺構配置図

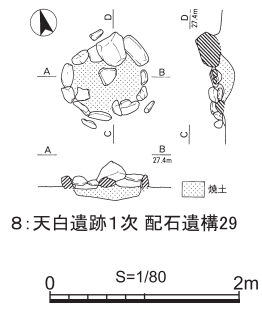
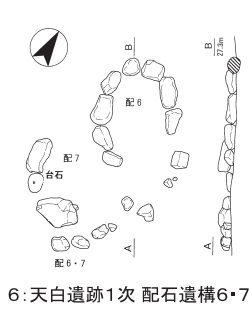
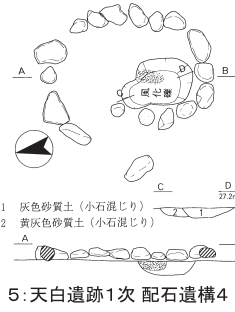
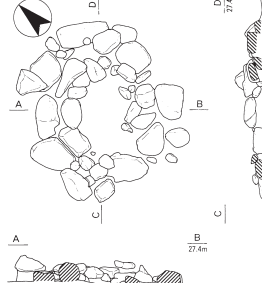
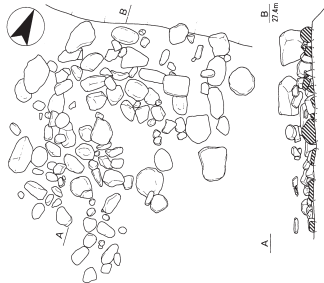
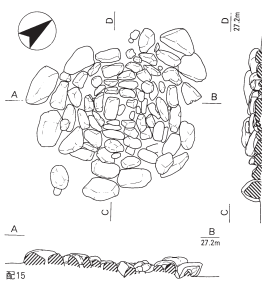


図99 天白遺跡の遺構配置図および配石遺構

ながら、向出遺跡では土坑をとまなう配石Ⅱ類が大半を占め、地上部に形成される配石Ⅰ類は僅少である。この配石土坑の多くは、報告書において「大型正形土坑」と分類されたもので、「長形土坑」すなわち土坑墓形状の土坑と対置的なものと位置づけられている〔岡田憲2000 a・b〕。これには焼人骨を包含するものがあり、後期前葉以前にみられた廃棄土坑とは異なり墓制との関連が強く見出される。同様の事例が伊賀寺遺跡においても確認できることから、岡田憲一は「大型正形土坑」に類する土坑を火化による再葬施設と位置づけている〔岡田憲2019〕。

さて、後期中葉から晩期初頭に位置づけられる配石遺構は124例を数えるが、このうち40例が大阪府向出遺跡、34例が三重県天白遺跡で、この2遺跡を除くと16遺跡45例となり、集中的にみられる遺跡と、そうでない遺跡との差異が著しいことが特徴と言える。そして、これら非集中遺跡では配石遺構周辺に儀器をほとんどとまわさない。特に、後期後葉段階の焼人骨再葬が顕著に見出された伊賀寺遺跡においても、儀器とみられるものは出土しておらず、碧玉製玉類の製作に関する遺物があるのみである。このような、儀器と墓葬制と配石との関係性が密接になるいっぽうで、遺跡ごとにそれぞれの強弱は多様なあり方を示すことが、当該期の特徴とみなすことができるだろう。

晩期前葉では、ふたたび事例数が急減し、配石遺構の構築は途絶に近い状況になる。ただし、この時期には配石Ⅳ類が若干ながら認められる（配260～262）。これらの石囲炉に関しては、東西の隣接地域を含めた住居構造の比較検討が課題となろう。

5 近畿地方における土器埋設遺構・配石遺構の展開

前節まで、近畿地方およびその周辺において検出された配石遺構と土器埋設遺構の事例から、各遺構の展開について述べてきた。これらの検討結果を踏まえて、近畿地方における配石遺構と土器埋設遺構の展開について、中期後葉における出現と系譜、中期末葉から後期前葉における定着過程、後期前葉後半における断絶と変容、の3点からまとめる。

(1) 近畿地方における土器埋設遺構と配石遺構の出現過程

近畿地方における配石遺構と土器埋設遺構の出現を考えるうえで、中期後葉が一つの定点となる。土器埋設遺構に関しては、中期後葉では事例数も少なく、定型的な様相も認められないものの、確実な事例が現れるという点は重要な画期をなす。本稿での検討でも、既往研究で最古の事例と認識されてきた船元Ⅳ式期には資料の蓄積はみられなかったが、これに後続する資料はわずかながら認められた。そして、これらのいずれも屋外埋設

であったことは、出現から定着に向けた展開を考えるうえで重視すべきである。すなわち、近畿地方において土器埋設遺構は屋外施設として顕在化したのであって、屋内施設として定着することはなかったとみるべきであろう。加えて、埋設方法に共通性がないことから、特定地域にその系譜を求められるものではないと考える。

他方、配石遺構については、中期後葉における方形石囲炉の出現を一つの契機と捉えた。先にみた京都府薪遺跡の事例では、単に炉の形態という要素のみではなく、住居そのものの形態に中部～東海・北陸地方との類似性が認められ、系譜関係は明瞭である。ただし、中部地方ではこの住居形態の付帯施設として狭義の「埋甕」は普遍的なものであるが、東海・近畿地方ではこれが欠落することから、一定の変容を経ていることがうかがえる。付言すれば、上述した土器埋設遺構の系譜において、少なくとも「埋甕」による影響は低く見積もられよう。

石囲炉以外の配石遺構の系譜については、事例が僅少であるために土器埋設遺構よりさらに困難がともなう。ただし、後述する中期末葉以降の配石遺構の展開を加味するならば、近畿地方における配石遺構の出現と定着は、集落を構成する遺構の質的な変化、すなわち定着的な居住様式への変化が深く関与しているとみられ、東日本の諸地域における配石遺構の盛行とは明確な関連性を有さないものと考えられる。

(2) 中期末葉から後期前葉における土器埋設遺構・配石遺構の盛行とその背景

土器埋設遺構は、中期末葉において定着が進むのは東海・北陸地方との境界領域にほぼ限られ、近畿地方中央部では後期初頭に至って集落を構成する要素として定着する。この際、屋外施設として定着する点では、中期後葉からの一定の連続性を評価できる。土器埋設遺構の定着過程は、中期後葉から後期初頭という長期にわたって、多様な土器の埋設行為がゆるやかに普及する様相が復元され、強い外的影響を受けたものとは考え難い。宮の平遺跡の狭義の「埋甕」や浜詰遺跡の「倒置深鉢」のような事例は例外的であり、むしろそうした間欠的な事例は、特定の埋設方法に関する情報が伝わっていながらも、それが定着しなかったと捉えることもできよう。

後期前葉には、それ以前にみられた多様な土器埋設から土器埋設Ⅰ類へ収斂してゆくことが読み取られ、埋設方法の定型化も進む。土器埋設遺構の構築数は、本稿で検討した時期のなかでも最大に達するが、こうした土器埋設にかかる行為が定型化し、地域全体へと共有されたことによって、著しい増加に繋がったものと考えられる。この定型化した埋設方法、すなわち有文・素文・無文の深鉢を「屋外一居住域内へ／単体かつ正位または正斜

位で／底部穿孔のうえ」埋設するものを「近畿型埋設土器」と呼ぶこともできようが、そのためには同時期における土器埋設遺構の広域的な比較検討により、その地域的特殊性を明確に示す必要があり、今後の課題としたい。

配石遺構に関しては、中期末葉から集落の構成要素として定着がみられ、土器埋設遺構に先行して普及する。ここでみられる配石遺構は、特定地点の標示性を示すものと、廃棄行為により形成されたものが主体である。このことは、近畿地方において、一定の領域に占地し、定着的な居住空間を創出することを指向する生活様式が定着したことを示すと考えられる。中期末葉には堅穴建物の検出された遺跡数が顕著に増加することが指摘されており〔瀬口2003〕、住居の構造的安定性が高まることも整合的である。こうした傾向は後期前葉前半まで顕著な変化は認められず、安定的に推移してゆく。

以上のように、中期末葉から後期前葉における土器埋設遺構・配石遺構の盛行の背景には、これらが集落を構成する要素として定着する点が重要であると考えられる。集落遺跡の構成要素から集落構造の変化を検討した瀬口眞司は、住居・埋葬施設・貯蔵穴の三施設を有する「多機能型」集落が中期後葉～末葉に出現し、後期前葉まで継続することを指摘しているが〔瀬口2009a〕、配石遺構と土器埋設遺構も日用施設としてこれに加わるものと言えよう。なお、岡田憲一は後期前葉の集落構造の特徴として、上述のような各種遺構の複合とともに、機能による空間分離が認められる点を挙げている〔岡田憲2005〕。本稿における検討、特に配石遺構の検討を踏まえると、空間分離の指向性については中期末葉の定着的な集落形成と同時に成立したものとして敷衍できると考える。

(3) 土器埋設遺構と配石遺構の性質変化と断絶の評価

土器埋設遺構は、後期前葉後半・北白川上層式2期を境に急激に数を減らしている。前述のとおり、後期前葉前半に土器埋設Ⅰ類へと収斂するが、これにより後期初頭以前にみられた土器埋設の多様性が失われたことが指摘でき、土器の埋設によって達成されていた目的が別の行為へと置換されることで土器埋設遺構が急減したと考えることができる。

同時期、配石遺構は集落における日常的な性格から、儀礼・祭祀的な器物との関係性が強まることを見出された。配石遺構の数量は、小川原遺跡において当該期に著しく増加するが、これを除くと土器埋設遺構のような急激な転換は認められない。配石Ⅰ類の形態にみられる型式学的な変化や、配石Ⅱ・Ⅲ類の構築にも断絶はないことから、従前から存在していた配石という行為に、あらたな目的的意図が付与されたことで、質的变化が生じたものと理解できよう。

ここで重要であるのが、当該期における居住遺構の変化である。滋賀県小川原遺跡や後川遺跡、兵庫県佃遺跡の事例から、後期前葉後半から中葉にかけては、竪穴住居に代わって平地式住居が普遍的にみられるようになる。加えて、集落の継続性についても後期前葉から連続する遺跡は少なく、短期間での地点的な利用が主体的になるものとみられる。すなわち、中期末葉～後期前葉前半までの居住様式よりも、機動性が高まることがうかがえるのである。こうした非定着的な居住様式を取る中で、祭祀的な性質を帯びた配石遺構が形成されることは、岡田憲一が「大規模葬祭空間」として提示したような、単位集団内あるいは単位集団間における社会的紐帯の強化装置としての機能を想定できよう〔岡田憲2005〕。ただし、現状においては大型正形土坑を除いて配石遺構と墓制とのかわりは明瞭ではなく、したがって祖先祭祀のような集団の系譜的關係性を紐帯とするような社会組織は想定しがたい。

(4) 京都大学植物園遺跡の土器埋設遺構と配石遺構の位置づけ

以上にみたように、京都大学植物園遺跡の主体的な時期である後期前葉の芥川式から北白川上層式1期は、土器埋設遺構が盛行して急減する直前の時期であるとともに、配石遺構の質的变化が生じる先駆けとなる時期にあたる。すでに個別的に触れたように、本遺跡において土器埋設遺構と配石遺構が集中的に構築される様相は、同時期の遺跡では確認されなかった。

これまでの研究では、後期前葉の土器埋設遺構を土器棺墓として理解する向きが強く、配石遺構とともに墓域の分離する事例と位置づけられることが通有であった〔富井2000, 岡田憲2005, 中村健2007〕。しかしながら、当該期の土器埋設遺構を土器棺墓として限定的な位置づけをすることは難しく、同時期における集中的・累積的な土器埋設遺構群の様相と比較検討し、土器を埋めること自体に目的的な意図があったものとする理解を示したところである。このことは、すでに山田康弘が、埋設土器の内容物の多様性に着目し、埋設という行為自体に祭祀的な性質があるものとみなした見解と近い〔山田2007〕。また、配石遺構群についても、墓制と結びつける積極的な根拠は見出されず、前段階からの展開過程や、共存する遺物の内容などから、特定地点の標示、なかでも居住空間における特定空間の明示を主目的としたものと理解した。

ただし、本遺跡においては、土器埋設遺構と配石遺構が一体となったものがみられるほか、明らかに土器埋設遺構を破壊して構築された配石遺構も存在する。土器埋設Ⅰ類が本遺跡の段階の直後に断絶することを考慮すると、配石遺構の構築に、日常的な行為とは異

なる目的意図が付加されつつある過渡的な様相を示している可能性が想起されよう。

おわりに

本論では、京都大学植物園遺跡の土器埋設遺構と配石遺構を出発点として、近畿地方におけるこれらの遺構について分類と集成をおこない、その通時的変遷を検討した。各事例の収集と基礎的な事実関係の整理に終始した観が否めないが、これらの遺構の展開過程を整理するなかで、集落構造における各遺構の位置づけを含めた理解を展望として示した。これまでの研究で、この種の遺構の機能や系譜に関する議論が多くなされてきたところであるが、その背景となる地域集団の居住様式や集落構造のなかにこれらを位置づけることによって、さらに議論を深化させてゆくことが必要であると考えられる。

〔注〕

- (1) 配石遺構は〔山崎1975, 阿部義1983, 塚原1987, 新津1999, 山本1999, 秋元1999, 阿部昭2019〕など。土器埋設遺構は、埋甕、甕棺、土器埋設炉も含め〔神村1973, 木下1981, 菊池1983, 桐原1983, 平林1994, 末木1999, 三上2008, 長沢2008, 太田2017, 中村大2019〕などを参照した。
- (2) 東北地方の再葬土器棺墓が最初に報告されたのが1918年の青森市天狗平遺跡の事例（後期前葉・十腰内Ⅰ式に相当）であり、ほぼ同時期に人骨を土器に納める葬法の存在が学会に周知されたと言える。
- (3) 土井義夫・黒尾和久はこれ以前に、中部・関東の貯蔵穴に石組など礫が付帯する事例について「栗林・砂沼タイプ」として類型化し、「墓墳」と報告されてきた遺構に多数の貯蔵穴が含まれる可能性を指摘している〔土井・黒尾2001〕。
- (4) 容量計算にあたっては、Simple Digitizer を用いた方法に拠った〔宮内2008〕。
- (5) 土坑墓の認定は主として平面プランと断面形により、山田康弘や岡田憲一の研究をもとに分類した〔山田1999, 岡田憲2000 a・b〕。本稿は平面形状のみによる分類であり、今回示したもので人骨をともなう事例は日笠山貝塚例（表5－配338）のみであるため、墓としての利用は確定的でない点に留意されたい。
- (6) こうした配置に限って言えば、縄文中期の中部・関東地方にみられるような、支柱穴に棒状礫などを配する「住居内配石」〔佐野2003〕あるいは「置石」状配石〔石坂・林2014〕との関連が想起されよう。時期・地域的な懸隔が大きいことから、これらと直接的な影響関係はないものと考えられるが、大型堅穴建物の土器埋設Ⅰ類が正位・正斜位埋設である点を考慮すると、棒状礫と同様に正立方向への指向性を示す器物であることが共通しており、両者に共通する性向を読み取ることも可能かもしれない。
- (7) ただし、焼土の検出もみられる点などから、居住空間が存在した可能性を指摘する研究もある〔川添2014〕。第二次調査では堅穴状遺構も検出されており、本稿においても、配石と評価された遺構に石囲炉としての特徴を極めてよく示す事例も含まれることが見出された（図99－8）。本稿では天白遺跡の位置づけに関して、儀礼・祭祀的な性格を有する遺構・遺物が累積

参 考 文 献

的に構築される点を第一に評価し、これが居住域外に独立した空間を形成する可否かは、その可能性のある事例としての理解に留める。

〔参考文献〕

【論文等】

- | | | |
|-----------|-------|--|
| 青木和寛 | 2017年 | 「土坑を伴う配石遺構の基礎的研究—縄文時代の山陰地方を対象として—」『島根考古学会誌』第34集，島根考古学会 |
| 秋元信夫 | 1999年 | 「遺構研究 環状列石」『縄文時代』第10号第3分冊，縄文時代文化研究会 |
| 阿部昭典 | 2009年 | 「新潟県における縄文時代後期前葉集落と配石遺構の隆盛—信濃川流域を中心として」『國學院大學考古学資料館紀要』25号，國學院大學考古学資料館研究室 |
| 阿部昭典 | 2019年 | 「配石墓・石棺墓」『縄文時代葬墓制研究の現段階』第2回研究集会発表要旨，縄文時代文化研究会 |
| 阿部義平 | 1983年 | 「配石」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣 |
| 石井香代子 | 2000年 | 「奈良県の縄文墓制概要」『関西の縄文墓地 発表要旨・資料集』第2回関西縄文文化研究会，関西縄文文化研究会 |
| 石川 健 | 2001年 | 「九州縄文後晩期における埋設土器の性格」『古文化談叢』第46集，九州古文化研究会 |
| 石坂 茂・林 克彦 | 2014年 | 「関東地方の縄文集落の信仰・祭祀」『信仰・祭祀 シリーズ縄文集落の多様性IV』雄山閣 |
| 泉 拓良 | 1977年 | 「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』115，毎日新聞社 |
| 泉 拓良 | 1985年 | 「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 伊藤正人 | 1997年 | 「愛知県・岐阜県の縄文時代配石遺構」『三河考古』10号，三河考古刊行会 |
| 岩田 崇・大石崇史 | 2003年 | 「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1，関西縄文文化研究会 |
| 岩永祐貴 | 2018年 | 「岐阜県における埋甕の様相—埋甕の施工率について—」『奈良大学大学院研究年報』23号，奈良大学大学院 |
| 岩永祐貴 | 2019年 | 「岐阜県における埋甕の系統差と埋設方法」『奈良大学大学院研究年報』24号，奈良大学大学院 |
| 植田文雄 | 1991年 | 「拡張，あるいは展開する縄文文化」『滋賀考古』第5号，滋賀考古学研究会 |
| 植田文雄・瀬口眞司 | 2001年 | 「近畿地方における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』第1回研究集会基礎資料集，縄文時代文化研究会 |
| 上野佳也 | 1985年 | 「配石遺構についての一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第3号，東京大学文学部考古学研究室 |
| 小江慶雄 | 1952年 | 「滋賀縣醍醐縄文式遺跡について」『文化史学』第5号，文化史学会 |
| 小江慶雄 | 1953年 | 「滋賀県醍醐遺跡発見の石製遺物」『京都学芸大学学報 Ser.A』No.3，京都学芸大学 |
| 小江慶雄 | 1954年 | 「滋賀県醍醐遺跡発見の縄文式土器」『京都学芸大学学報 Ser.A』No.5，京都学芸大学 |
| 大串菊太郎 | 1920年 | 「津雲貝塚及国府石器時代遺跡に対する二三の私見」『民族と歴史』第3巻第4号 |

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

- 太田 圭 2017年 「縄文時代における屋外土器埋設遺構の研究―「埋壘」のこれまでとこれから―」『アーキオ・クレイオ』14, 東京学芸大学考古学研究室
- 大野 薫 1997年 「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』第1集, 柏原市古文化研究会
- 大野 薫 2001年 「近畿・中国・四国地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』第1回研究集会発表要旨, 縄文時代文化研究会
- 大野 薫 2012年 「縄文集落における小規模性と弱定着性」『関西縄文時代研究の新展開 松尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文論集3, 関西縄文文化研究会
- 大本朋弥 2020年 「辻遺跡の研究(その1)―但馬東部地域の縄文時代中期末後期初頭集落の概要―」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第13号, 兵庫県立考古博物館
- 岡田憲一 2000年 a 「遺構分析の視座と方法」『向出遺跡』大阪府文化財調査研究センター調査報告書55, 大阪府文化財調査研究センター
- 岡田憲一 2000年 b 「土坑「墓」認定の手続き―大阪府向出遺跡の分析・基礎編―」『関西の縄文墓地 発表要旨・資料集』第2回関西縄文文化研究会, 関西縄文文化研究会
- 岡田憲一 2005年 「大規模葬祭空間の形成―近畿地方における縄文時代後晩期集落のあり方―」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』関西縄文論集2, 関西縄文文化研究会
- 岡田憲一 2012年 「関西縄文集落の一時的景観と時間的累積―墓地の分析から矢野健一氏の批判にええる―」『関西縄文時代研究の新展開 松尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文論集3, 関西縄文文化研究会
- 岡田憲一 2019年 「近畿・中国・四国地方における葬墓制研究の現状」『縄文時代葬墓制研究の現段階』第2回研究集会発表要旨, 縄文時代文化研究会
- 岡田茂弘 1965年 「縄文文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 海藤 元 2013年 「配石遺構からみた米代川上流域における縄文時代中期末～後期中葉の集落構造の変遷」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』12, 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 鏡山 猛 1953年 「甕棺累考(二)―遠賀川式甕棺とその源流―」『史淵』第55輯, 九州史学会
- 賀川光夫 1969年 「縄文時代のカメ棺(1)～(3)」『考古学ジャーナル』No.34・35・37, ニュー・サイエンス社
- 賀川光夫 1974年 「縄文時代カメ棺の出現と弥生文化前段の問題」『考古学論叢2』縄文時代のカメ棺特集号, 別府大学考古学研究会
- 加藤雅士 2006年 「石棺墓の展開とその意義―縄文時代後期の関東甲信越―」『考古学雑誌』90巻1号
- 葛西 勵 2002年 『再葬土器棺墓の研究―縄文時代の洗骨葬』再葬土器棺墓の研究刊行会
- 川添和暁 2014年 「東海地方の縄文集落の信仰・祭祀」『信仰・祭祀 シリーズ縄文集落の多様性Ⅳ』雄山閣
- 関西縄文文化研究会編 2000年 『関西の縄文墓地 発表要旨・資料集』第2回関西縄文文化研究会
- 関西縄文文化研究会編 2009年 『関西縄文時代の集落と地域社会 発表要旨集・資料集』第10回関西縄文文化研究会
- 菊池 実 1983年 「甕棺葬」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣
- 木下 忠 1981年 『埋壘―古代の出産習俗―』雄山閣
- 清野謙次 1920年 「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『備中津雲貝塚発掘報告 肥後轟貝塚

参 考 文 献

- 發掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊，京都帝國大学
- 桐原 健 1983年 「埋甕」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣
- 櫛原功一 1991年 「住居型式の変遷—辻沢南遺跡を中心に—」『山梨県考古学協会誌』第4号，山梨県考古学協会
- 神村 透 1973年 「南信地方の埋甕について—その学史と事例—」『長野県考古学会誌』No.15，長野県考古学会
- 神村 透 1974年 「埋甕と伏甕—その違い—」『長野県考古学会誌』No.19・20，長野県考古学会
- 小金井良精 1923年 「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』第38巻第1号，東京人類学会
- 小杉 康 1995年 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立 「葬墓祭制」の構造と機能」駿台史學93号，駿台史学会
- 坂詰秀一 1958年 「縄文文化における甕棺葬の基礎的研究」『文學部論叢』9号，立正大学文学部
- 坂本嘉弘 1994年 「埋甕から甕棺へ—九州縄文埋甕考—」『古文化談叢』第32集，九州古文化研究会
- 佐々木藤雄 2008年 「埋甕（中部・関東地方）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 佐野 隆 2003年 「縄文時代中期の住居内配石について—敷石住居発生以前の住居内祭祀施設の様相—」『山梨県考古学協会誌』第14号，山梨県考古学協会
- 末木 健 1999年 「遺構研究 埋甕」『縄文時代』第10号第3分冊，縄文時代文化研究会
- 鈴木保彦 1980年 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』第9号，神奈川考古同人会
- 鈴木保彦 1986年 「続・配石墓の研究」『神奈川考古』第22号（神奈川考古同人会10周年記念論集），神奈川考古同人会
- 鈴木保彦 2006年 『縄文時代集落の研究』雄山閣
- 鈴木保彦 2009年 「関東・東海地方の縄文集落と縄文社会」『集落の変遷と地域性 シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ』雄山閣
- 瀬口眞司 2003年 「関西縄文社会における集団規模の推移—人口と居住集団の数量的変化をめぐる検討—」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1，関西縄文文化研究会
- 瀬口眞司 2009年 a 「関西地方の縄文集落と縄文社会」『集落の変遷と地域性 シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ』雄山閣
- 瀬口眞司 2009年 b 『縄文集落の考古学—西日本における定住集落の成立と展開』昭和堂
- 瀬口眞司 2018年 「関西縄文社会の地域的特色とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』208
- 立岡和人 2000年 「近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開」『関西の縄文墓地 発表要旨・資料集』第2回関西縄文文化研究会，関西縄文文化研究会
- 千葉 豊 1989年 「近畿地方出土の埋設土器について」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財調査報告79，三重県教育委員会
- 千葉 豊 1993年 「配石墓小考（上・下）—辰野町樋口五反田遺跡の「配石址」を中心として—」『伊那路』第37巻11号・12号，上伊那郷土研究会
- 塚原正典 1987年 『配石遺構』考古学ライブラリー49，ニュー・サイエンス社
- 土井義夫・黒尾和久 2001年 「東京都における縄文時代集落の様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』第1回研究集会基礎資料集，縄文時代文化研究会
- 富井 眞 2000年 「京都府下の墓址事例の概要」『関西の縄文墓地 発表要旨・資料集』第2回関西縄文文化研究会，関西縄文文化研究会

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

- 長沢宏昌 2008年 「土器棺（中部・関東地方）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 中村 大 2019年 「土器棺墓（土器埋設遺構）」『縄文時代葬墓制研究の現段階』第2回研究集会
発表要旨，縄文時代文化研究会
- 中村健二 1991年 a 「近畿地方における縄文晩期の墓制について」『古代文化』第43巻第1号，古代
文化研究会
- 中村健二 1992年 「小川原遺跡の発掘調査—西日本最大級の配石遺構群—」『滋賀考古』8号，滋
賀考古学研究会
- 中村健二 1993年 「土器棺墓よりみた近畿地方縄文晩期後半の地域色について」『滋賀考古』第10
号，滋賀考古学研究会
- 中村健二 1994年 「坂本嘉弘「埋甕から甕棺へ—九州縄文埋甕考—」を読んで」『古文化談叢』第
33集，九州古文化研究会
- 中村健二 2007年 「西日本の葬・墓制」『縄文時代の考古学9 死と弔い 墓制』同成社
- 新津 健 1985年 a 「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」『日本史の黎明 八幡一郎先生
公寿記念考古学論集』六興出版
- 新津 健 1985年 b 「中部地方の配石遺構」『考古学ジャーナル』No.254（特集・配石遺構），ニュー・
サイエンス社
- 新津 健 1999年 「葬墓制研究 配石墓」『縄文時代』第10号第3分冊，縄文時代文化研究会
- 丹羽祐一 1980年 「埋甕集団の構成と婚姻システム」『奈良大学紀要』9号
- 橋口達也 1992年 「大型棺成立以前の甕棺の編年」『九州歴史資料館研究論集』17，九州歴史資料
館
- 橋本 正 1976年 「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第22巻第4号，考古学研究会
- 平林 彰 1994年 「埋甕」『縄文時代研究辞典』東京堂出版
- 三上徹也 2008年 「炉体土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 松田真一 2014年 「近畿地方の縄文集落の信仰・祭祀」『信仰・祭祀 シリーズ縄文集落の多様性
IV』雄山閣
- 水野正好 1978年 「埋甕祭式の復原」『信濃』30巻4号，信濃史学会
- 宮内信雄 2008年 「縄文土器の容量」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 山崎 丈 1975年 「縄文時代配石遺構研究概史（1）」『New Wave Archaeology』vol.2，新しい考
古学の波
- 家根祥多 1990年 「西日本の配石遺構」『シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とそ
の画期—』山梨県考古学協会秋期大会資料集，山梨県考古学協会
- 山田康弘 1995年 「九州の埋設土器」『熊本大学文学部論叢』第49号，熊本大学文学部
- 山田康弘 1999年 「縄文人骨の埋葬属性と土壌長」『筑波大学先史・考古学研究』第10号
- 山田康弘 2001年 「中国地方の土器埋設遺構」『島根県考古学会誌』第18集，島根県考古学会
- 山田康弘 2007年 「土器を埋める祭祀」『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 山田康弘 2008年 「土器棺（西日本）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 山梨県考古学協会シンポジウム実行委員会編 1990年 『シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地
域的特色とその画期—』山梨県考古学協会秋期大会資料集，山梨県考古学協会
- 山本暉久 1977年 「縄文時代中期末～後期初頭の屋外埋甕について（上）・（下）」『信濃』第29巻
第11号・第12号，信濃史学会
- 山本暉久 1999年 「配石遺構」『縄文時代』第10号第3分冊，縄文時代文化研究会
- 山本暉久 2008年 「倒置深鉢」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

参 考 文 献

- 渡辺 誠 1968年 a「埋甕考」『信濃』第20巻第4号, 信濃史学会
- 渡辺 誠 1968年 b「九州地方における抜歯風習」『帝塚山考古学』1, 帝塚山考古学研究所
- 渡辺 誠 1970年 「縄文時代における埋甕習俗」『考古学ジャーナル』No.40, ニュー・サイエンス社
- 渡辺 誠 1974年 「縄文時代甕棺の基礎的研究・1」『考古学論叢2』縄文時代のカメ棺特集号, 別府大学考古学研究会
- 【発掘調査報告書】
- (福井県)
- 網谷克彦 1987年 『岩の鼻遺跡Ⅱ—1986年度調査概報—』若狭歴史民俗資料館
- 小島秀彰 2005年 『北寺遺跡Ⅱ発掘調査報告書』三方町文化財調査報告書第17集, 三方町教育委員会
- (三重県)
- 石井智大編 2018年 『堀町遺跡(第6・7次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告378, 三重県埋蔵文化財センター
- 石井智大編 2021年 『小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告323-9, 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤克幸・田村陽一・西村修久 1996年 『上ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告123-2, 三重県埋蔵文化財センター
- 奥 義次・上村安生・竹田憲治 2007年 『松阪市中村川流域の考古資料1』研究紀要16-2, 三重県埋蔵文化財センター
- 奥 義次・御村精治編 2011年 『森添遺跡』度会町文化財調査報告6, 度会町教育委員会
- 門田了三 1986年 『下川原遺跡』名張市遺跡調査会
- 門田了三 1997年 『下川原遺跡5次調査概要』名張市遺跡調査会
- 門田了三 2000年 『下川原遺跡3次調査概要』名張市教育委員会
- 倉田直純 1978年 『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市埋蔵文化財調査報告1, 亀山市教育委員会
- 小濱 学ほか 1997年 『新徳寺遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告123-3, 三重県埋蔵文化財センター
- 小林美沙子・水橋公恵 2012年 『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-29, 三重県埋蔵文化財センター
- 酒井巳紀子 2006年 『三寺地内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告268, 三重県埋蔵文化財センター
- 仁保晋作・千葉 豊 1989年 「IX. 名張市赤目町 中戸遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会
- 西村美幸・松葉和也 1996年 『井尻遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌・伊藤裕偉ほか 1992年 「Ⅱ. 津市大里地区内遺跡群 3. 大里西沖遺跡の調査」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』三重県埋蔵文化財調査報告99-1, 三重県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌・角正淳子 2003年 『覚正垣内遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財調査報告186-6, 三重県埋蔵文化財センター
- 松葉和也編 1999年 『奥ホリ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告197, 三重県埋蔵文化財センター
- 松本 覚・春日井恒 1993年 『川向遺跡発掘調査報告』北勢町埋蔵文化財調査報告書2, 北勢町教育委員会

- 森川幸雄編 1995年 『天白遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告108-2, 三重県埋蔵文化財センター
- 油田秀紀・穂積裕昌 2005年 『雲林院青木遺跡発掘調査報告』芸濃町埋蔵文化財調査報告5, 芸濃町教育委員会
- 和氣清章 1994年 『天白遺跡範囲確認調査報告』嬉野町文化財調査報告11集, 嬉野町教育委員会
- 和氣清章 2000年 『下沖遺跡発掘調査報告』嬉野町文化財調査報告15集, 嬉野町教育委員会
- 和氣清章 2003年 『天白遺跡発掘調査概要』嬉野町文化財調査報告18集, 嬉野町教育委員会
- 和氣清章 2005年 『平成16年度天白遺跡5次調査発掘調査概要』松阪市埋蔵文化財センター
- 渡辺和仁・森川常厚編 2020年 『朝見遺跡(第3・4・6次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告387-1, 三重県埋蔵文化財センター
- (滋賀県)
- 稲垣正宏・小島考修 1999年 『御所内遺跡 上出A遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書27-5, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 稲垣正宏・中村健二 1999年 『北落遺跡』国道307号単独道路改築事業に伴う発掘調査報告書, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 井上洋介 1987年 『志那湖底遺跡発掘調査概要—志那南その2工区—』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 植田文雄 1990年 『今安楽寺遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集, 能登川町教育委員会
- 植田文雄 1995年 『林・石田遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書36, 能登川町教育委員会
- 植田文雄編 1996年 『正楽寺遺跡—縄文後期集落の調査—』能登川町埋蔵文化財調査報告書第40集, 能登川町教育委員会
- 大岡由記子 2005年 『金森東遺跡(第30次)・金森遺跡(第2次)発掘調査概要報告書』守山市教育委員会
- 北原 治・内田保之・堀 真人 2001年 『上出A遺跡』県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 桐山秀徳 2000年 『経田遺跡発掘調査報告書』古代学協会
- 葛原秀雄編 1987年 『今津町文化財調査報告書第7集』今津町教育委員会
- 小島睦夫 1999年 『吉身西遺跡第70次発掘調査報告書』守山市教育委員会
- 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春寿 1938年 「近江坂田郡春照村杉沢遺跡 縄文式土器合口甕棺発掘報告」『考古學』第9巻第9号, 東京考古學會
- 重田 勉 1999年 『宮司遺跡Ⅱ 鴨田遺跡Ⅵ』長浜新川中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 篠宮 正 1986年 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ—5』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会・近江八幡市教育委員会
- 瀬口眞司編 2013年 b『六反田遺跡Ⅱ』中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書3-2, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 高橋順之 1993年 『起し又遺跡発掘調査報告書』伊吹町文化財調査報告書第6集, 伊吹町教育委員会
- 田辺昭三・加藤 修編 1973年 『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 坪井清足 1951年 「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報1(昭和23年度)』日本考古学協会
- 戸塚洋輔 2011年 『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集, 彦根市教育委員会

参 考 文 献

- 仲川 靖編 1997年 『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 中村健二 1991年 b『箕浦城・浄蓮寺遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅧ-9
- 中村健二編 1993年 『小川原遺跡1』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XX-3, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 中村健二編 1996年 『小川原遺跡3』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅢ-5, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 林 博通編 1998年 『醍醐遺跡』浅井町教育委員会
- 林 純 1993年 『新堂遺跡』五個荘町文化財発掘調査報告25, 五個荘町教育委員会
- 藤崎高志ほか 2009年 『関津遺跡Ⅱ』ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書36-5
- 横田洋三 1991年 『五斗井遺跡・太田氏館遺跡・宮ノ後遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅤⅢ-5, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 栗東町史編さん委員会編 1994年 『栗東の歴史 第4巻 資料編 1』栗東町役場
- 栗東市文化体育振興事業団編 2009年 『1989年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』栗東市教育委員会・栗東市文化体育振興事業団
- （京都府）
- 家崎孝治 2010年 『平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡—西院月双町の調査—』古代文化調査会
- 岩崎 誠 2010年 「右京第962次（7ANOH-12地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成20年度』長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩松, 保・木村啓章ほか 2009年 「3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集 第133冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 梅原末治 1935年 「北白川上終町史前住居遺蹟」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊, 京都府
- 岡田茂弘 1959年 「京都府浜詰遺跡発見の竪穴住居址」『先史学研究』1, 同志社大学先史学研究會
- 金木泰憲 1993年 『十王堂遺跡発掘調査概要』京都府網野町文化財調査報告第9集, 網野町教育委員会
- 小泉裕司・岡田憲一 1997年 『森山遺跡発掘調査報告書』城陽市埋蔵文化財調査報告書第32集, 城陽市教育委員会
- 小島孝修ほか 1997年 「恭仁宮跡」『埋蔵文化財発掘調査概報1997』京都府教育委員会
- 柴 暁彦 2006年 「薪遺跡第6次」『京都府遺跡調査概報第117集』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 菅田 薫・辻 純一・平方幸雄 1987年 「日野谷寺町遺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
- 高橋 潔・近藤奈央・竜子正彦編 2010年 『上里遺跡Ⅰ—縄文時代晩期集落遺跡の調査—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊
- 竹原一彦 1982年 「三河宮の下遺跡」『京都府遺跡調査概報第2冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田代 弘・筒井崇史編 2001年 『浦入遺跡群 京都府遺跡調査報告書第29冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 辻 純一・磯部 勝・平方幸雄 1982年 『中臣遺跡発掘調査概要 昭和56年度』京都市文化観光局・

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

- 京都市埋蔵文化財研究所
- 中川和哉・大本朋弥 2010年 『京都府遺跡調査報告集 第136冊』公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2012年 「1. 京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第984・988次・伊賀寺遺跡」『京都府遺跡調査報告集 第148冊』公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中塚 良 2005年 「長岡京跡左京第327次（7ANDID-5地区）～左京一条二坊五町，東二坊間小路，石田遺跡～発掘調査報告」『長岡京跡ほか』向日市埋蔵文化財調査報告書第64集（第1分冊），向日市埋蔵文化財センター
- 長戸満男・竜子正彦・尾藤德行 1997年 「15. 京都大学構内遺跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
- 中村徹也 1974年 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要〔京大植物園内縄文遺跡〕』京都大学
- 増田孝彦・黒坪一樹・木村啓章 2010年 「3. 右京第941次（7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区）・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集 第137冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山下 研 2020年 『長岡京市文化財調査報告書 第75冊—伊賀寺遺跡の調査 遺構編—』長岡京市教育委員会
- 山下 研 2022年 『長岡京市文化財調査報告書 第79冊—伊賀寺遺跡の調査 遺物編・まとめ—』長岡京市教育委員会
- 渡辺 誠編 1982年 『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』長岡京市文化財調査報告書10，長岡京市教育委員会
- 渡辺 誠編 1975年 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館（大阪府）
- 赤木克視編 1992年 『小阪遺跡』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 阿部幸一編 2010年 『府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2010-5，大阪府教育委員会
- 乾 哲也 1993年 『仏並遺跡発掘調査報告書』和泉市埋蔵文化財調査報告第1集，和泉市教育委員会
- 芋本隆裕 1986年 「縄手遺跡第10次調査」『縄手遺跡・若江遺跡の調査—昭和61年度—』東大阪府埋蔵文化財包蔵地調査概要28，東大阪府教育委員会
- 岩崎二郎編 1986年 『仏並遺跡発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財協会報告第5輯，大阪府埋蔵文化財協会
- 川瀬貴子 2014年 『千提寺南遺跡』大阪府文化財センター調査報告書第245集，大阪府文化財センター
- 北野 重・大塚惇子 1985年 「第7章 大泉遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報1984年度—原山・田辺・大泉遺跡—』柏原市文化財報告1984—II，柏原市教育委員会
- 小林義孝・吉田綾子・日野祥子編 2008年 『上の山遺跡III』大阪府文化財センター調査報告書第171集，大阪府文化財センター
- 四條史編さん委員会編 1977年 『河内四條史』第2冊 史料編I
- 芝野圭之助・岩崎二郎・一瀬和夫 1986年 『石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要I』大阪府教育委員会
- 菅原章太・奈良拓弥 2010年 「第4章 馬場川遺跡第20次発掘調査」『東大阪府埋蔵文化財発掘調査

参 考 文 献

- 菅原章太・奈良拓弥 2011年 『第2章 馬場川遺跡第20次発掘調査（遺物・総括編）』『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成21年度—』東大阪市教育委員会
- 武内雅人・西村 歩・田中清美編 1991年 『池田寺遺跡Ⅳ』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第71輯，大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会
- 中野 清 1987年 「大泉遺跡86-1次調査」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1986年度』柏原市文化財報告1986—Ⅰ，柏原市教育委員会
- 奈良拓弥・妹尾裕介・木村啓章・小泉翔太・旭大輝・河本純一 2015年 「馬場川遺跡C・D・E地点の縄文時代資料」『大阪文化財研究』第46号，大阪府文化財センター
- 西村 歩 1993年 『仏並遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財協会報告書第77輯，大阪府埋蔵文化財協会
- 橋本久和編 1995年 『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 濱田耕作 1918年 『河内國府石器時代遺跡發掘調査報告等』京都帝国大学文学部考古学研究報告第2冊，京都帝國大學
- 林 日佐子編 2015年 『鳩原遺跡他発掘調査概要』大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会
- 原田 修ほか 1971年 『縄手遺跡1』縄手遺跡調査会
- 原田 修・中村友博ほか 1976年 『縄手遺跡2』東大阪市文化財調査報告書第5冊，東大阪市教育委員会
- 原田 修・大野 薫 1981年 『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報22，東大阪市教育委員会
- 樋口吉文 1985年 「1. 四ツ池遺跡発掘調査報告—YoC 第86地区の調査—」『堺市文化財調査報告第22集』堺市教育委員会
- 藤井直正ほか 1970年 『馬場川遺跡Ⅰ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報4，東大阪市教育委員会
- 藤永正明ほか 1981年 『林遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会
- 宮野淳一 1992年 『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 山元 健・岡田憲一ほか 2000年 『向出遺跡』大阪府文化財調査研究センター調査報告書55，大阪府文化財調査研究センター
- 吉川義彦・豊岡卓之・宮原晋一ほか 1988年 『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第24輯，大阪府埋蔵文化財協会
- 吉村博恵・下村晴文 1985年 『日下遺跡発掘調査概要第11・12次調査』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要26
- 吉村博恵ほか 1986年 「日下遺跡第13次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27
- 吉村博恵 1991年 『東大阪市文化財資料目録』第1集，東大阪市郷土博物館（兵庫県）
- 秋枝 芳 1995年 「今宿丁田遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県史編纂委員会
- 池田征弘ほか 2010年 『延吉遺跡』兵庫県文化財調査報告第374冊，兵庫県教育委員会
- 市村高規・泉 拓良・玉田芳英・森本 晋 1985年 『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書6，龍野市教育委員会
- 稲原昭嘉 1997年 「藤江川添遺跡」『明石市文化財年報 平成7年度』明石市立文化博物館
- 衣笠基宏 1999年 「本位田円応寺遺跡」『平成9年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡文化財報告書2，佐用郡教育委員会

- 佐伯二郎・橋詰清孝・池田 毅 1992年 「印路遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 篠宮 正編 2009年 『東南遺跡』兵庫県文化財調査報告第362冊, 兵庫県教育委員会
- 河野通哉・喜谷美宣 1964年 『日笠山貝塚 第1次発掘調査報告』高砂市文化財調査報告1, 高砂市教育委員会
- 高松龍暉・千葉 豊・大下 明 1990年 『小森岡遺跡』竹野町文化財調査報告書8, 竹野町教育委員会
- 高松龍暉・矢野健一・大下 明 1990年 『小路頃オノ木遺跡発掘調査報告書』関宮町埋蔵文化財調査報告書(4), 関宮町教育委員会
- 千葉 豊・大石崇史・宮原文隆・藤原 敏 1995年 『貝野前遺跡』中町文化財報告10, 中町教育委員会
- 西口圭介ほか 2017年 『広根遺跡』兵庫県文化財調査報告第492冊, 兵庫県教育委員会
- 禰宜田佳男ほか 1996年 「加茂遺跡第150次調査」『平成7年度 川西市発掘調査概要報告』川西市教育委員会
- 菱田淳子編 2001年 『長坂遺跡』兵庫県文化財調査報告書第218冊, 兵庫県教育委員会
- 深井明比古編 1998年 『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊, 兵庫県教育委員会
- 藤木 徹 1995年 「中の原遺跡」『平成7年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡教育委員会
- 前田佳久ほか 1993年 「宅原遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 前田佳久 1998年 「原野・沢遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 松林宏典 1997年 「五番町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 南 博史 1984年 『篠原A遺跡』古代学協會
- 三村修次 1992年 「東南遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県史編纂委員会
- 安田 滋・佐伯二郎・須藤 宏 1993年 「小部北ノ谷遺跡(第1・2次調査)」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 吉田昇・佐藤良二 1988年 「川端遺跡(AN-91)」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』兵庫県文化財調査報告書第62冊
- 渡辺 昇編 2012年 『加都遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第422冊
(奈良県)
- 青木勘時 1998年 「別所ツルベ遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報平成6・7年度』天理市教育委員会
- 池田保信編 2022年 『布留遺跡布留(堂垣内)地区発掘調査報告書』考古学調査研究報告31, 埋蔵文化財天理教調査団
- 伊藤雅和・岡田憲一 2003年 『西坊城遺跡Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第90集, 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田雅彦編 2013年 『観音寺本馬遺跡Ⅰ(観音寺Ⅲ区)』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第113冊, 奈良県立橿原考古学研究所
- 関西大学考古学研究室 1987年 「稲渕ムカンダ遺跡発掘調査概報」『関西大学考古学研究紀要5』関西大学考古学研究会
- 木許 守・小泉翔太・村島有紀編 2017年 『玉手遺跡』御所市文化財調査報告書第52集, 御所市教育委員会

参 考 文 献

- 木本誠二 2002年 「五條市西河内吉山遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報2001年度（第三分冊）』奈良県立橿原考古学研究所
- 末永雅雄 1944年 『宮瀧の遺跡』奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告第15冊，奈良県
- 末永雅雄 1961年 『橿原—橿原市畝傍町橿原神宮神苑施設事業による考古学遺跡の調査—』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書第17冊，奈良県教育委員会
- 角南総一郎・佐藤聖聖編 1998年 『秋篠・山陵遺跡』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第17集，秋篠・山陵遺跡調査会・奈良大学考古学研究室・学校法人正強学園
- 中井一夫・松田真一 1981年 「箸尾遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1980年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所
- 橋本裕行編 2005年 『宮の平遺跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第89冊，奈良県立橿原考古学研究所
- 坂 靖編 2000年 『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第76冊，奈良県立橿原考古学研究所
- 前坂尚志 2004年 「中遺跡第4次」『大和を掘る22』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 松田真一 1982年 「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 松田真一編 2011年 『重要文化財橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第11冊，奈良県立橿原考古学研究所
- 柳澤一宏・古谷眞由美・野地ますみ・山内基樹 2013年 『沢遺跡第5次～8・10次発掘調査報告書』宇陀市文化財調査報告書第4集，宇陀市教育委員会
- 柳澤一宏 1987年 「高井遺跡」『榛原町遺跡分布調査概報』榛原町文化財調査概要2，榛原町教育委員会
- (和歌山県)
- 井石好裕編 1988年 『粟生遺跡』和歌山県文化財センター
- 大岡康之・中村貞史 1984年 「市脇遺跡」『市脇遺跡ほか発掘調査概報』橋本市教育委員会
- 小野山節・清水芳裕編 1979年 『和歌山県北山村下尾井遺跡』北山村教育委員会
- 渋谷高秀ほか 2005年 『徳蔵地区遺跡』和歌山県文化財センター
- 田中元宏 2010年 『西飯降遺跡Ⅱ，丁ノ町・妙寺遺跡』和歌山県文化財センター
- 土井孝之 1986年 『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会
- 富永里菜編 2012年 『中飯降遺跡・西飯降Ⅱ遺跡・加陀寺前経塚・大谷遺跡・重行遺跡』和歌山県文化財センター
- 富永里菜編 2012年 『中飯降遺跡・西飯降Ⅱ遺跡・加陀寺前経塚・大谷遺跡・重行遺跡』和歌山県文化財センター
- 中尾憲市・前田敬彦 1984年 『溝ノ口遺跡Ⅰ』海南市教育委員会
- 中尾憲市・前田敬彦 1987年 『溝ノ口遺跡Ⅱ』海南市教育委員会

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 土器埋設遺構集成表

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋1	福井	北寺遺跡Ⅱ	B-1区埋設土器	中期前葉	船元Ⅰ式	Ⅳ類b	有文鉢	口縁～底部	破片化
埋2	福井	北寺遺跡Ⅱ	C0区埋設土器	後期前葉		Ⅰ類	無文深鉢	口縁～胴部	底部穿孔
埋3	福井	北寺遺跡Ⅱ	A-1区1号埋設土器	後期前葉		Ⅰ類	無文深鉢	口縁～底部	底部穿孔
埋4	福井	北寺遺跡Ⅱ	A-1区2号埋設土器	後期前葉	四ツ池式	Ⅰ類	有文浅鉢	口縁～底部	底部穿孔
埋5	福井	北寺遺跡Ⅱ	A-2区埋設土器 P16	後期前葉		不明	不明		不明
埋6	福井	岩の鼻遺跡	土器埋設遺構 SX01	中期末葉か	北白川C式か	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋7	福井	岩の鼻遺跡	土器埋設遺構 SX04	中期末葉か	北白川C式か	Ⅰ類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋8-1	福井	岩の鼻遺跡	土坑 SK58	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類b	有文深鉢	頸～胴部	破片化
埋8-2	福井	岩の鼻遺跡	土坑 SK58	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類b	素文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋9	福井	岩の鼻遺跡	炉 SF03	後期初頭	中津式	Ⅲ類a	有文壺	胴～底部	なし
埋10	三重	覚正垣内遺跡	埋設土器 SM9	後期初頭		Ⅰ類	素文深鉢	完形	底部穿孔
埋11	三重	小牧南遺跡第2・3次	土器埋設炉 SF139	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）	Ⅲ類a	有文深鉢	胴部	口縁部・底部除去
埋12	三重	小牧南遺跡第2・3次	土器埋設炉 SF310	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）か	Ⅲ類a + b	有文深鉢	胴部	口縁部・底部除去
埋13	三重	小牧南遺跡第2・3次	SH355埋設土器	中期末葉	北白川C式か	Ⅰ類	深鉢	胴～底部	なし
埋14	三重	小牧南遺跡第2・3次	SX149	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）	Ⅰ類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋15	三重	小牧南遺跡第2・3次	SX250	中期末葉	北白川C式か	Ⅰ類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋16	三重	小牧南遺跡第2・3次	SX251	中期後葉	中富Ⅳ・Ⅴ式（篠原A段階併行）か	Ⅰ類	無文深鉢	口縁～底部	なし
埋17	三重	小牧南遺跡第2・3次	SX279	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋18-1	三重	朝見遺跡6次	SX611037	後期初頭	中津Ⅱ式	Ⅳ類b	有文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋18-2	三重	朝見遺跡6次	SX611037	後期初頭		Ⅳ類b	無文	胴部	底部除去
埋19	三重	朝見遺跡6次	SX611051	後期初頭	中津Ⅱ式か	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋20	三重	朝見遺跡6次	SX611052	後期初頭か		Ⅰ類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋21-1	三重	堀町遺跡6次	SX6029	後期初頭か		Ⅰ類	無文深鉢	ほぼ完形	なし
埋21-2	三重	堀町遺跡6次	SX6029	後期初頭か		Ⅰ類	深鉢	胴～底部	口縁～胴部除去
埋22	三重	堀町遺跡6次	SX6037	中期後葉	中富Ⅳ・Ⅴ式（篠原A段階併行）か	Ⅰ類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋23	三重	川向遺跡	埋甕 1	後期前葉		Ⅰ類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋24	三重	川向遺跡	埋甕 2	後期前葉		Ⅰ類	無文深鉢	口縁～胴部	なし
埋25	三重	地蔵僧遺跡	SK54	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	口縁部除去
埋26	三重	地蔵僧遺跡	SK6	中期末葉	山の神式（北白川C式中～新併行）	Ⅳ類c	有文深鉢	口縁～底部	なし
埋27	三重	東野B遺跡	埋甕 SX8	中期末葉	北白川C式	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋28	三重	岩瀬遺跡	D地区 SK73	中期末葉	北白川C式か	Ⅰ類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋29	三重	木造赤坂遺跡 e 地区	SK651	後期中葉		Ⅰ類	無文深鉢	完形	なし
埋30	三重	大石遺跡	埋甕 SZ38	中期末葉	北白川C式か	Ⅰ類	無文深鉢	胴～底部	なし

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
18.3	14.7	3.01	単体	破片集積		不整円形	0.5	0.5	屋内	建物中央部	焼土は土器の周囲のみで内部にみられず、炉の上位に破片化したものが重ねられた状態
36.4	31.3	13.29	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	土石流堆積物により欠損
28.0	34.1	8.89	単体	正位		なし	-	-	屋内	建物張出部	住居の掘り込みや炉は未検出だが、報告では柱穴プランから柄鏡形住居とする
30.8	19.9	12.43	単体	正位		なし	-	-	屋内	建物縁辺部	住居の掘り込みや炉は未検出だが、報告では柱穴プランから柄鏡形住居とする
-	-	-	不明	不明		不明	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.6	0.3	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	単体	正位		不整円形	0.4	0.4	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	複合：破片集積	破片集積		楕円形	1.0	0.8	屋外	居住域内	底面に板状礫を置き、その上に2個体の深鉢破片を内面を上にして重ねる
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正斜位		方形	1.1	0.8	屋内	炉内	住居の掘り込みは検出されず
45.0	54.6	31.73	単体	正位		円形	0.9	0.8	屋外	居住域内	口縁部は露出
-	-	-	単体	正位	焼礫	円形	0.4	0.4	屋内	建物中央部	内部の焼礫は炉床の焼土より上位のため廃絶時のものか
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.5	屋内	建物中央部	土器内の下層に別の土器片敷、上層に焼土塊
-	-	-	単体	正位		円形	0.2	0.2	屋内	建物縁辺部	上部削平
39.3	50.1	25.92	単体	横位		円形	1.1	1.1	屋外	居住域内	土坑の上部はほぼ削平
-	-	-	単体	正位	蛇紋岩製玉製品、炭化物	円形	0.5	0.5	屋外	居住域内	上部削平
30.5	-	-	単体	正位		楕円形	0.4	0.3	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	単体	正位		不明	-	-	屋外	居住域内	C/N 同位体比分析あり
45.2	-	-	複合：破片集積	破片集積		不明	-	-	屋外	居住域外	正位に据えられた胴部の内側に、別破片を内面上向きに敷設
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	土壌のP・Ca分析実施されたが明確な違いはみられず
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	土壌のP・Ca分析実施されたが明確な違いはみられず
33.9	38.7	16.20	単体	横位		楕円形	0.8	0.6	屋外	居住域外	SX6029とSX6037は隣接
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
45.1	-	-	単体	横位		不明	-	-	屋外	居住域外	SX6029とSX6037は隣接、上部削平
-	-	-	単体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	
26.1	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	
-	-	-	単体	正位		円形	1.0	0.3	屋外	居住域外	
29.0	-	-	複合：別破片	不明		楕円形	2.5	1.1	屋外	居住域外	10数個体が出土と記載、報告は1個体のみ
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	劣化のため型式比定が難しい、縄文時代の遺物はこのほか僅少
23.1	26.4	6.12	単体	正位		円形	0.7	0.7	屋外	居住域外	晩期末遺構面に単独で検出
-	-	-	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域内	

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋31	三重	大石遺跡	SH49炉	中期末葉	北白川C式か	IV類a	不明	不明	破片化
埋32	三重	雲林院青木遺跡	b区SK6	後期初頭	中津式	II類a	有文壺	胴～底部	口縁部除去
埋33	三重	上ノ垣内遺跡(多気)	SX2	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋34	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ45	後期前葉		I類	素文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋35	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ46	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋36	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ47	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋37	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ48	後期前葉		I類	素文深鉢	胴～底部	なし
埋38	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ54	後期初頭	福田K2式古段階	I類	有文深鉢	完形	なし
埋39	三重	新徳寺遺跡	埋設土器SZ222	後期前葉		I類	無文深鉢	胴部	底部除去
埋40	三重	井尻遺跡	Pit1	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	胴部穿孔
埋41	三重	中戸遺跡	埋設土器P2	後期初頭	中津式	I類	有文深鉢	頭～底部	なし
埋42	三重	中戸遺跡	埋設土器P3	後期初頭～ 前葉		I類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋43	三重	中戸遺跡	埋設土器P1	後期初頭～ 前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋44	三重	下川原遺跡2次	埋設土器1	後期前葉		I類	不明	不明	不明
埋45	三重	下川原遺跡2次	埋設土器2	後期前葉		I類	不明	不明	不明
埋46	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX7	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～底 部	不明
埋47-1	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX1	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	不明
埋47-2	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX1	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	口縁部除去 か
埋48-1	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX2	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋48-2	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX2	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	口縁部除去 か
埋49-1	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX16	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	不明
埋49-2	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX16	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	口縁部除去 か
埋50-1	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX6北棺	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	不明
埋50-2	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX6北棺	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	不明	不明	破片化
埋51-1	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX14	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	深鉢	不明	不明
埋51-2	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX14	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	不明	不明	破片化
埋52	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX15	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	IV類b	深鉢	胴部	破片化
埋53	三重	下川原遺跡3次	土器棺墓SX35	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	IV類b	深鉢	不明	破片化
埋54	三重	下川原遺跡5次	埋設土器104	後期前葉		I類	不明	不明	不明
埋55	三重	下川原遺跡5次	埋設土器121	後期前葉		I類	不明	不明	不明
埋56	三重	下川原遺跡5次	埋設土器122	後期前葉		I類	不明	不明	不明
埋57	三重	下川原遺跡5次	埋設土器123	後期前葉	北白川上層式1期	I類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋58	三重	下川原遺跡5次	埋設土器124	後期前葉		II類b	無文壺	ほぼ完形	なし
埋59	三重	下川原遺跡5次	埋設土器125	後期前葉		I類	不明	胴～底部	底部穿孔
埋60	三重	下川原遺跡5次	埋甕	後期前葉	北白川上層式1b期	I類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋61	三重	下川原遺跡5次	埋甕炉	後期前葉		III類a	無文深鉢か	胴～底部	口頸部除去
埋62	三重	天白遺跡	埋設土器1	後期後葉	宮滝1式	I類	有文深鉢	口縁～頭 部	なし
埋63-1	三重	天白遺跡	埋設土器2	後期後葉	宮滝1式	I類	有文深鉢	口縁～頭 部	なし
埋63-2	三重	天白遺跡	埋設土器2	後期後葉	宮滝1式	I類	有文深鉢	口縁～頭 部	不明
埋64	三重	天白遺跡	埋設土器3	後期後葉		I類	深鉢	胴～底部	口縁部除去
埋65	三重	天白遺跡	埋設土器4	後期末葉	滋賀里I式	I類	有文深鉢	口縁～胴 部	なし
埋66	三重	天白遺跡	埋設土器5	後期後葉	宮滝2式	I類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋67	三重	天白遺跡	埋設土器6	後期後葉		I類	深鉢	胴～底部	なし
埋68	三重	天白遺跡	埋設土器7	後期末葉	滋賀里I式か	I類	無文深鉢	胴～底部	なし

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
-	-	-	单体破片集積	破片集積		方形	0.8	0.8	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、炉石は被熱するが土器は被熱なし
-	-	-	单体	正位		方形	1.9	0.7	屋外	居住域外	
-	-	-	单体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	上部削平、遺跡は新徳寺遺跡に隣接
-	-	-	单体	正位	土器片	なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
38.6	48.4	32.18	单体	正位		円形	1.8	1.6	屋外	居住域外	中世遺構と重複、報告では埋没後の地震等で破損と推定
-	-	-	单体	正位	礫	なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
26.3	26.7	8.04	单体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平、P1～3は5 m間隔で三角形に配置
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	-	单体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	未報告
-	-	-	单体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	未報告
-	-	-	单体	横位		長方形	1.2	1.0	屋外	居住域外	
-	-	-	複合：土器蓋	横位		不明	不明	不明	屋外	居住域外	蓋は深鉢を割ったものを合わせ口状に組み合わせる
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
39.5	43.0	-	複合：土器蓋	横位	石鏃、骨片	不明	不明	不明	屋外	居住域外	蓋は深鉢を割ったものを合わせ口状に組み合わせる
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	複合：土器蓋	横位		不明	不明	不明	屋外	居住域外	蓋は深鉢を割ったものを合わせ口状に組み合わせる
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	複合：土器蓋	横位		不明	不明	不明	屋外	居住域外	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	複合：土器蓋	不明		不明	不明	不明	屋外	居住域外	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	单体破片集積	破片集積	不明	不明	不明	不明	屋外	居住域外	内面下向きにして重ねて埋置
-	-	-	单体破片集積	破片集積	不明	不明	不明	不明	屋外	居住域外	
-	-	-	单体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	未報告
-	-	-	单体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	未報告
-	-	-	单体	不明		不明	-	-	屋外	居住域内	未報告
34.8	34.8	13.22	单体	正斜位		円形	不明	不明	屋外	居住域内	
14.7	15.5	3.29	单体	正位		円形	不明	不明	屋外	居住域内	
-	-	-	单体	正位		円形	不明	不明	屋外	居住域内	
26.1	-	-	複合：石蓋	逆位		円形	0.3	0.3	屋内	建物縁辺部	扁平な礫を蓋とし、さらに円礫を乗せる
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋内	建物中央部	
32.8	-	-	单体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
33.6	-	-	複合：入れ子	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
39.2	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	单体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	
38.4	-	-	单体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平、焼土上に構築
-	-	-	单体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	单体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋69	三重	天白遺跡	埋設土器8	後期後葉	宮滝2式	I類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋70	三重	天白遺跡	埋設土器9	後期後葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋71	三重	天白遺跡	埋設土器10	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式か	I類	無文深鉢	ほぼ完形	なし
埋72	三重	天白遺跡	埋設土器11	後期末葉	滋賀里Ⅰ式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋73	三重	天白遺跡	埋設土器12	後期後葉	宮滝2式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋74	三重	天白遺跡	埋設土器13	後期後葉		I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋75	三重	天白遺跡	埋設土器14	後期後葉	宮滝2式	I類	有文深鉢	口縁～頭部	なし
埋76	三重	天白遺跡	埋設土器15	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋77	三重	天白遺跡	埋設土器16	後期末葉	滋賀里Ⅰ式か	I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋78-1	三重	天白遺跡	埋設土器17	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋78-2	三重	天白遺跡	埋設土器17	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	不明
埋79	三重	天白遺跡	埋設土器18	後期後葉	宮滝1式	I類	有文深鉢	口縁～頭部	なし
埋80	三重	天白遺跡	埋設土器19	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	Ⅱ類b	有文鉢	完形	なし
埋81	三重	天白遺跡	埋設土器20	後期後葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋82	三重	天白遺跡	埋設土器21	後期後葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋83	三重	天白遺跡	埋設土器22	後期後葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋84	三重	天白遺跡	埋設土器23	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類	無文深鉢	胴～底部	口縁部除去
埋85	三重	天白遺跡	埋設土器24	後期後葉		I類	有文深鉢	頭～底部	なし
埋86	三重	天白遺跡	埋設土器25	後期後葉		I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋87	三重	天白遺跡	埋設土器26	後期後葉		I類	深鉢	胴～底部	なし
埋88	三重	天白遺跡3次	埋設土器1	後期後葉～ 晩期初頭		I類	不明	不明	不明
埋89	三重	天白遺跡3次	埋設土器2	後期後葉	高井東式変容(元住 吉山Ⅱ式併行)	I類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋90	三重	天白遺跡5次	埋設土器1	後期前葉		I類	無文深鉢	頭～底部	不明
埋91	三重	森添遺跡	炉SF32	後期後葉	宮滝2式	Ⅲ類a	有文深鉢	胴部	口縁部・底 部除去
埋92-1	滋賀	滋賀里遺跡(S23)	(不明)	中期末葉	北白川C式古段階	I類	有文深鉢	口縁～底 部	不明
埋92-2	滋賀	滋賀里遺跡(S23)	(不明)	中期末葉	北白川C式古段階	I類	有文深鉢	口縁部	破片化
埋93	滋賀	滋賀里遺跡(湖西線)	甕棺墓225	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式か	I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋94-1	滋賀	志那湖底遺跡	土器棺墓2	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	Ⅳ類b	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去, 破片化
埋94-2	滋賀	志那湖底遺跡	土器棺墓2	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	Ⅳ類b	有文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋94-3	滋賀	志那湖底遺跡	土器棺墓2	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	Ⅳ類b	無文深鉢	頭～胴部	破片化
埋95	滋賀	関津遺跡	T68埋設土器S1	後期中葉	一乗寺K式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋96	滋賀	六反田遺跡	埋設土器S185D	中期末葉	北白川C式	I類	素文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋97	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX01	後期初頭		I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋98	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX02	後期初頭	福田K2式新段階	I類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋99	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX03	後期初頭		Ⅲ類a	無文深鉢	胴部	底部除去
埋100	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX04	後期初頭		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋101	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX05	後期初頭		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋102	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器SX06	後期初頭		I類	素文深鉢	胴～底部	底部穿孔

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
37.6	35.2	23.91	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	
28.8	-	-	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
39.2	44.4	18.33	単体	正位	礫	円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	上部に人頭大の礫が乗り、 土器内に落ち込んだもの
36.8	-	-	単体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
30.4	-	-	単体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	単体	正斜位	礫	なし	-	-	屋外	居住域外	焼土上に構築、内部に礫が 落ち込む
36.8	-	-	単体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部削平
29.6	-	-	単体	逆位		円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	上部削平か
-	-	-	単体	正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域外	上部削平
13.2	-	-	複合：入れ子	逆位		楕円形	0.4	0.3	屋外	居住域外	上部削平
32.0	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
36.0	-	-	単体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	隣接して礫あり
14.4	8.8	0.63	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部に人頭大の礫が乗る
26.6	-	-	単体	逆斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	上部に人頭大の礫が複数配 置
36.5	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	
41.2	-	-	単体	逆位		なし	-	-	屋外	居住域外	
-	-	-	複合：石蓋	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正位	棒状礫	円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	割れ面は擬口縁で磨かれて いる
-	-	-	単体	不明		なし	-	-	屋外	居住域外	
36.8	39.6	17.56	単体	正位		不明	-	-	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	後期末葉の遺構面より30cm 下位で検出
-	-	-	単体	正斜位	焼土、礫、 石鏝	楕円形	1.1	0.7	屋内	建物中央部	報告では火種壺とする
-	-	-	複合：土器蓋	不明		不明	-	-	屋外	居住域外	文章での報告のみ、詳細不 明
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.3	屋外	居住域外	上半部は攪乱により欠損
39.6	-	-	複合：破片集 積	破片集積		楕円形	0.7	0.5	屋外	居住域外	遺構図なし
32.1	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
29.1	-	-	単体	横位		円形	0.3	0.2	屋外	居住域外	中世遺構面で単独で検出
18.9	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.3	屋外	居住域外	後晩期の遺構面に単独で検 出
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内か	上部削平
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内か	土器劣化のため復元なし
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋内か	建物中央部	上部削平、炉跡の可能性あ り
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内か	上部削平
-	-	-	単体	正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内か	上部削平
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.4	0.3	屋外	居住域内か	上部削平

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋103-1	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器 SX07	後期初頭	中津式	I 類	素文深鉢	完形	底部穿孔
埋103-2	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器 SX07	後期初頭	中津Ⅱ式	I 類	有文深鉢	口縁～底 部	底部穿孔, 破片化
埋104	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器 SX10	後期初頭		I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋105	滋賀	今安楽寺遺跡	埋設土器 SX11	後期初頭		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋106	滋賀	正楽寺遺跡	C-1区埋甕	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋107	滋賀	林・石田遺跡	埋甕 1	後期前葉	北白川上層式 1 a 期	I 類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋108	滋賀	林・石田遺跡	埋甕 2	後期前葉		I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋109	滋賀	林・石田遺跡	埋甕 3	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋110	滋賀	小川原遺跡 H2・3年度	埋甕	後期前葉	小池原上層式 (北白川上層式 2 a 期併行)	I 類	有文鉢	胴部	なし
埋111-1	滋賀	常衛遺跡	土壇 SK5	中期末葉	北白川 C 式古段階	I 類	有文深鉢	口縁～胴 部, 底部	不明
埋111-2	滋賀	常衛遺跡	土壇 SK5	中期末葉	北白川 C 式	I 類	素文深鉢	胴部	不明
埋112	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 1	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋113	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 2	後期前葉		I 類	不明	口縁～胴 部	底部除去
埋114	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 3	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋115	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 4	後期前葉		I 類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋116	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 5	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋117	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 6	後期前葉		I 類	不明	不明	不明
埋118	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 7	後期前葉		I 類	不明	胴～底部	底部穿孔
埋119	滋賀	宮司遺跡	Q区埋設土器遺構 8	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類	有文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋120	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 1	後期前葉		I 類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋121	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 2	後期前葉		I 類	不明	不明	なし
埋122	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 3	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋123	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 4	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋124	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 5	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋125	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 6	後期前葉		I 類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋126	滋賀	宮司遺跡	S区埋設土器遺構 7	後期前葉		I 類	不明	不明	底部穿孔
埋127	滋賀	浄蓮寺遺跡	S101	後期初頭	中津式か	I 類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋128	滋賀	浄蓮寺遺跡	S146	後期初頭	中津Ⅱ式	I 類	有文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋129	滋賀	浄蓮寺遺跡	S157	後期初頭		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋130	滋賀	浄蓮寺遺跡	S220	後期初頭	中津Ⅱ式	I 類	有文深鉢	完形	底部穿孔
埋131	滋賀	上出A遺跡	T4SH1石囲炉	中期末葉	北白川 C 式中段階	Ⅳ類 a	有文深鉢	完形	破片化
埋132	滋賀	上出A遺跡	SK25	中期末葉	北白川 C 式古段階	Ⅱ類 b	有文深鉢	完形	なし
埋133	滋賀	丁田遺跡	埋設土器 SX01	中期末葉	北白川 C 式	I 類	素文深鉢	胴～底部	底部穿孔か
埋134-1	滋賀	丁田遺跡	埋設土器 SX02	中期末葉	北白川 C 式	Ⅱ類 a	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋134-2	滋賀	丁田遺跡	埋設土器 SX02	中期末葉	北白川 C 式	Ⅱ類 a	無文深鉢	胴～底部	口縁部除去
埋134-3	滋賀	丁田遺跡	埋設土器 SX02	中期末葉	北白川 C 式	Ⅱ類 a	不明	胴～底部	なし
埋135	滋賀	経田遺跡	Pit.339	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋136	滋賀	金森遺跡	埋甕	不明		I 類	不明	胴～底部	不明

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
20.4	25.6	4.75	複合：別破片	正位		方形	0.4	0.4	屋外	居住域内	小型の素文深鉢の内部と周辺に破片化した有文深鉢が収められたもの
33.9	42.8	28.68	-	-		-	-	-	屋外	居住域内か	
27.6	32.4	9.69	単体	正斜位	貝または角片	円形	0.4	0.4	屋外	居住域内か	埋土水洗選別、SX09埋土より下位で検出
-	-	-	単体	正斜位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内か	SX09下層中で検出
-	-	-	単体	正斜位		円形	0.2	0.2	屋外	居住域内	上部削平
28.9	34.8	14.57	単体	正位	焼骨片	楕円形	0.6	0.5	屋内	建物縁辺部	焼骨片は動物骨で、ヒトならば少年期以上の手根骨と推定
30.7	45.2	22.31	単体	正位		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住域内	
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.3	0.2	屋外	居住域内	
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋内	建物縁辺部	
39.6	-	-	単体	正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	上部削平か、風化著しい、近接する焼土は地床炉の可能性があるが柱穴・掘り込みは検出されず
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
30.9	-	-	単体	正位	骨片、石器剥片	円形	0.8	0.8	屋外	居住域外	埋土フルイ、口縁部は露出
-	-	-	単体	正位	骨片、石器片	楕円形	0.6	0.5	屋外	居住域外	埋土フルイ、口縁部は露出か
-	-	-	単体	正位		楕円形	1.2	0.9	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
39.2	34.9	19.26	単体	正斜位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	埋土フルイ
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	埋土フルイ、口縁部は露出
-	-	-	単体	不明		楕円形	0.7	0.6	屋外	居住域外	埋土フルイ、破片のみ
-	-	-	単体	正位		円形	0.6	0.5	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正位	骨片	円形	0.8	0.8	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
28.6	31.9	12.32	単体	正位		不明	0.7	0.7	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.7	0.5	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正位	骨片	楕円形	1.3	-	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正位		不整形	0.6	0.5	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正位	炭化物、石器剥片	楕円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
28.8	30.4	10.35	単体	正位	骨片	楕円形	0.6	0.4	屋外	居住域外	埋土フルイ、上部削平
-	-	-	単体	正斜位	骨片	楕円形	0.8	-	屋外	居住域外	埋土フルイ
-	-	-	単体	正位		円形	0.3	0.2	屋外	居住域内	上部削平、土器劣化のため復元できず
-	-	-	単体	正位か		なし	-	-	屋内	建物縁辺部	炉跡 S145は埋塞 S146を壊している
-	-	-	単体	正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内	上部削平、報告では土坑の埋土を裏詰め粘土とする
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内	土器劣化のため復元できず
52.8	-	-	単体破片集積	破片集積		方形	0.8	0.7	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、口縁部→胴部→底部の順
14.8	22.3	2.31	単体	逆斜位		不整円形	1.3	1.2	屋外	居住域内	埋設ではなく投棄か
-	-	-	単体	横位	ヒスイ製玉製品	楕円形	1.1	0.7	屋外	居住域外	上部削平、他の遺構から離れた位置で検出
27.8	48.2	13.25	複合：入れ子	正位か	粘土	楕円形	0.9	0.6	屋外	居住域内	有文深鉢の中に、粘土を充填した無文深鉢を逆位に入れ、その上位に底部破片を逆位にかぶせるように配する。土坑内からは焼成粘土塊が出土
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	横位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内	上部削平か、遺存状態悪い
-	-	-	単体	不明		なし	-	-	屋外	居住域内	遺物劣化のため取り上げできず

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存部位	二次加工
埋137	滋賀	太田氏館遺跡	埋設土器1	後期前葉		I類	深鉢	胴～底部	なし
埋138	滋賀	高野遺跡	埋設土器	中期後葉	里木Ⅱ式古段階	I類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋139	滋賀	狐塚遺跡	堅穴住居SH-1石囲炉	後期初頭	中津Ⅰ式古段階	Ⅳ類a	有文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋140	滋賀	新堂遺跡	埋甕遺構	後期初頭		I類	無文深鉢	完形	なし
埋141-1	滋賀	北仰西海道遺跡	土器棺墓28	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋141-2	滋賀	北仰西海道遺跡	土器棺墓28	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋142-1	滋賀	北仰西海道遺跡	土器棺墓86	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	完形	なし
埋142-2	滋賀	北仰西海道遺跡	土器棺墓86	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	不明	破片化
埋143	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構SX1	後期初頭	中津式か	I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋144	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構SX2	後期初頭	中津Ⅰ式	I類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋145	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構SX3	後期初頭	中津式か	I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋146	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構SX5	後期初頭	中津Ⅰ式	I類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋147	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構SX6	後期初頭	中津式か	I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋148	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設1号	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部穿孔
埋149	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設2号	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋150	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設3号	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底部	底部穿孔
埋151	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設4号	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底部	なし
埋152	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設5号	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底部	不明
埋153	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設6号	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋154	京都	京都大学植物園遺跡	土器埋設7号	後期前葉	北白川上層式1期	I類	素文深鉢	口縁～底部	なし
埋155	京都	京都大学構内遺跡	土器棺墓1	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋156	京都	北白川上終町遺跡	炉址	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類a	有文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋157	京都	西京極遺跡	土壇74	後期初頭	福田K2式古段階	I類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋158	京都	中臣遺跡49次	埋甕SK1	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋159	京都	中臣遺跡49次	埋甕SK2	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋160	京都	上里遺跡	土器棺墓18-340	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁部～胴部	底部除去
埋161	京都	上里遺跡	土器棺墓18-354	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁部～胴部	底部除去
埋162-1	京都	上里遺跡	土器棺墓18-845	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁部～胴部	底部除去
埋162-2	京都	上里遺跡	土器棺墓18-845	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁部～胴部	破片化
埋163	京都	上里遺跡	土器棺墓18-1452	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	胴部	底部除去
埋164	京都	上里遺跡	土器棺墓19-1358	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁部～胴部	底部除去
埋165	京都	下海印寺遺跡R962次	縄文土器埋設遺構SX13	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底部	なし
埋166	京都	伊賀寺遺跡R927次	土坑SK51	後期初頭	中津Ⅰ式古段階	Ⅱ類b	有文鉢	ほぼ完形	なし
埋167	京都	伊賀寺遺跡R943次	火葬墓SK03	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	Ⅱ類b	有文注口土器	口縁～底部	注口部・口縁部除去
埋168-1	京都	伊賀寺遺跡R927次	SH08石囲炉	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類a	有文深鉢	口縁～胴部	破片化

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	ほかに縄文遺構・遺物なし
-	-	-	単体	横位か		楕円形	1.2	0.9	屋外	居住域外	
35.6	-	-	単体破片集積	破片集積		方形	0.8	0.8	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、東側にSH-2が重複
28.8	33.0		単体	正位		楕円形	0.7	0.6	屋内	建物中央部	住居の炉跡は中央ではなく南西側に偏っている
-	-	-	複合：土器蓋	正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	複合：土器蓋	正位	礫	円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	
-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正斜位	拳大の礫	楕円形	1.1	1.0	屋外	居住域外	石皿を据えてから土器を埋設
29.0	39.8	17.32	単体	正位	拳大の礫	なし	-	-	屋外	居住域外	口縁部露出し外側に倒れて出土、配石に接する
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	土坑底にビットあり、土坑内から棒状礫、上部削平
-	-	-	単体	正位	礫	楕円形	0.8	0.4	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正位	炭	なし	-	-	屋外	居住域外	組石状で底部に板石を敷く配石遺構内に埋置
30.9	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	口縁部露出し外側に倒れて出土
29.2	33.2	14.04	単体	正斜位		なし	-	-	屋外	居住域外	
30.4	34.5	15.44	単体	正斜位	骨片	なし	-	-	屋外	居住域外	配石IV構築時に壊されたとみられる
32.2	37.5	16.37	単体	横位		なし	-	-	屋外	居住域外	
			単体	横位		不整楕円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	配石遺構下の土坑内に埋置
39.2	41.8	26.45	単体	正位		なし	-	-	屋外	居住域外	口縁部露出し外側に倒れて出土
32.0	35.9	20.08	単体	横位		なし	-	-	屋外	居住域外	
33.8	34.6	15.37	単体	正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	遺構図なし、掘方内に河原石数個
25.8	-	-	単体破片集積	破片集積		円形	0.8	0.8	屋内	建物中央部	炉内に土器片を外面上向きで埋置
34.4	-	-	単体	正斜位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	弥生時代住居により上部削平、土坑底面に砂利敷きか
29.6	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	
37.4	41.2	18.56	単体	不明		不整方形	0.6	0.4	屋外	居住域外	遺構図なし
24.8	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内	
37.2	-	-	単体	正位		楕円形	0.6	0.4	屋外	居住域内	
36.8	-	-	複合：土器蓋	正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域内	
34.8	-	-	-	-		-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.4	0.3	屋外	居住域内	除去した底部を蓋のように埋置する
24.8	-	-	単体	横位		楕円形	0.6	0.5	屋外	居住域内	
31.8	34.9	15.62	単体	横位		楕円形	0.5	0.3	屋内	建物縁辺部	上部は削平、周辺に径8 mの円周上に柱穴がならぶ
19.1	18.9	3.35	単体	横位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域外	
14.3	17.6	17.65	複合：別破片	正斜位	炭化物	不整方形	1.2	1.0	屋外	居住域内	焼骨集積墓
25.2	-	-	複合：破片集積	破片集積		方形	1.0	1.0	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで埋置

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋168-2	京都	伊賀寺遺跡 R927次	SH08石囲炉	中期未葉	北白川C式中段階	IV類a	有文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋169-1	京都	伊賀寺遺跡 R988次	SK73	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	IV類c	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋169-2	京都	伊賀寺遺跡 R988次	SK73	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	IV類c	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋169-3	京都	伊賀寺遺跡 R988次	SK73	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	IV類c	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋170-1	京都	石田遺跡 L327次	SK32750	後期前葉	北白川上層式2期	IV類b	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋170-2	京都	石田遺跡 L327次	SK32750	後期前葉	北白川上層式2期	IV類b	素文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋171	京都	柿ノ内遺跡	土坑 SK951002	後期前葉	北白川上層式1期	I類	素文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋172	京都	十王堂遺跡	(なし)	後期初頭	福田K2式新段階	IV類b	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋173	京都	桑飼下遺跡	埋甕	後期前葉	堀之内1式(北白川上層式1期併行)	I類	有文深鉢	口縁～底部	なし
埋174	京都	浜詰遺跡	住居址北壁中央ビツト	後期初頭	称名寺Ⅱ式(福田K2式併行)	I類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋175	大阪	芥川遺跡	土器棺墓1	後期前葉	芥川式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋176	大阪	芥川遺跡	土器棺墓2	後期前葉	芥川式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋177	大阪	千提寺南遺跡	2区215土坑	中期未葉	北白川C式中段階	IV類c	有文深鉢	頸～胴部	破片化
埋178	大阪	上の山遺跡	埋甕遺構63土坑	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔か
埋179	大阪	上の山遺跡	埋甕遺構41土坑	後期前葉	芥川式か	I類	有文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋180	大阪	上の山遺跡	埋甕遺構50土坑	後期		I類	不明	胴～底部	なし
埋181	大阪	日下遺跡11次	甕棺墓三	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部穿孔
埋182	大阪	縄手遺跡1次	土器片敷遺構	後期初頭～前葉		IV類b	不明	不明	破片化
埋183	大阪	縄手遺跡2次	(なし)	後期前葉		I類	素文深鉢	ほぼ完形	なし
埋184-1	大阪	縄手遺跡2次	特殊石組遺構	後期前葉	北白川上層式1b期	IV類b	有文深鉢	ほぼ完形	破片化
埋184-2	大阪	縄手遺跡2次	特殊石組遺構	後期前葉		IV類b	無文深鉢	ほぼ完形	破片化
埋184-3	大阪	縄手遺跡2次	特殊石組遺構	後期前葉		IV類b	無文深鉢	ほぼ完形	破片化
埋184-4	大阪	縄手遺跡2次	特殊石組遺構	後期前葉		IV類b	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋184-5	大阪	縄手遺跡2次	特殊石組遺構	後期前葉		IV類b	無文深鉢	胴部	破片化
埋185	大阪	縄手遺跡3次	埋甕1	後期前葉	北白川上層式1b期	I類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋186	大阪	縄手遺跡3次	埋甕2	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋187	大阪	馬場川遺跡E地点	埋設土器	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式か	I類	無文深鉢	不明	不明
埋188	大阪	馬場川遺跡F地点	埋設土器	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋189	大阪	馬場川遺跡G・H地点	埋設土器1	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋190	大阪	馬場川遺跡G・H地点	埋設土器2	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋191	大阪	馬場川遺跡I地点	埋設土器1	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋192	大阪	馬場川遺跡I地点	埋設土器2	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	不明
埋193	大阪	大泉遺跡	土坑	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋194	大阪	西大井遺跡	SK-01	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	IV類b	無文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋195	大阪	林遺跡	80-10区埋甕	後期前葉	北白川上層式1期	I類	有文深鉢	口縁～底部	底部穿孔
埋196	大阪	鳩原遺跡	2071土坑	後期前葉		I類	無文深鉢	胴部	底部穿孔か
埋197	大阪	鳩原遺跡	2072土坑	後期前葉		I類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋198	大阪	四ノ池遺跡 YoC 第56地区	SK03	後期初頭		I類	無文深鉢	ほぼ完形	なし

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
37.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	複合：破片集積	破片集積	円形	0.5	0.5	屋外	居住域外		周辺に同時期の遺構なし、礫を囲うように3個体の土器を配置
21.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
40.9	-	-	複合：破片集積	破片集積	円形	0.6	0.6	屋外	居住域内か	内面上向きで重ねて埋置	
30.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32.8	-	-	単体	横位	不明	-	-	屋外	居住域外	壁面で発見、遺構図なし	
36.0	-	-	単体	破片集積	なし	-	-	屋外	居住域外	遺構図なし	
26.5	34.0	13.42	単体	正位	なし	-	-	屋内	建物縁辺部	地床炉に近接するため屋内と判断	
33.5	29.5	12.01	単体	逆位	円形	0.8	0.7	屋内	建物縁辺部	住居北壁の中央に接する貯蔵穴から出土、焼失住居	
25.2	28.5	8.82	単体	正斜位	礫	隅円方形	0.3	0.3	屋外	居住域内	
22.8	30.6	8.14	単体	正位	円形	0.3	0.3	屋外	居住域内		
-	-	-	複合：破片集積	破片集積	不整円形	0.7	0.6	屋外	居住域外	廃棄土坑か	
-	-	-	単体	正斜位	円形	0.3	0.3	屋内	建物縁辺部	土坑63、41、50はいずれも同じ建物に帰属として復元	
-	-	-	単体	正斜位	円形	0.8	0.8	屋内	建物縁辺部	土坑内には重複する柱痕2か所がある、報告書では北白川C式	
-	-	-	単体	正斜位	円形	0.3	0.3	屋内	建物縁辺部		
38.4	-	-	単体	正斜位	楕円形	0.9	0.6	屋外	居住域外		
-	-	-	単体破片集積	破片集積	なし	0.6	0.5	屋外	居住域内	全面に被熱痕あり	
27.6	35.4	13.05	単体	不明	不明	-	-	屋内	建物縁辺部	報告では記載なし、その後の整理で埋没として報告	
39.4	42.6	13.23	複合：破片集積	破片集積	不整円形	1.4	1.3	屋外	居住域内	中層土器、拳大の礫と土器片敷を交互に4層、周辺には焼土	
40.7	44.4	-	-	-	-	-	-	-	-	中層土器	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	下層土器	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	下層土器	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	下層土器	
26.8	26.4	-	単体	正位	なし	-	-	屋外	居住域内	2基が隣接して検出	
27.5	30.9	-	単体	正位	なし	-	-	屋外	居住域内	2基が隣接して検出	
-	-	-	単体	正位	円形	0.6	0.6	屋外	居住域内		
-	-	-	単体	正斜位	円形	-	-	屋外	居住域内		
-	-	-	単体	正位	不明	-	-	屋外	居住域内		
-	-	-	単体	正位	不明	-	-	屋外	居住域内		
-	-	-	単体	正位	楕円形	-	-	屋外	居住域内		
-	-	-	単体	正位	楕円形	-	-	屋外	居住域内		
43.2	40.8	36.14	単体	逆位	不明	-	-	屋外	居住域外		
32.7	-	-	単体	破片集積	円形	0.6	0.6	屋外	居住域外		
-	-	-	単体	正位	円形	0.5	0.5	屋外	居住域内	風化により接合されず	
-	-	-	単体	正位	不整円形	0.7	0.5	屋外	居住域内	上部削平	
-	-	-	単体	正斜位	不整円形	0.7	0.4	屋外	居住域内	上部削平	
14.6	17.9	1.60	単体	横位か	不整円形	0.9	0.6	屋外	居住域内		

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表 3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋199-1	大阪	小阪遺跡	土器片敷遺構	中期末葉	北白川 C 式新段階	IV 類 b	有文深鉢	ほぼ完形	破片化
埋199-2	大阪	小阪遺跡	土器片敷遺構	中期末葉	北白川 C 式新段階	IV 類 b	有文深鉢	口縁部～ 胴部	破片化
埋199-3	大阪	小阪遺跡	土器片敷遺構	中期末葉	北白川 C 式新段階	IV 類 b	素文深鉢	口縁部～ 胴部	破片化
埋199-4	大阪	小阪遺跡	土器片敷遺構	中期末葉	北白川 C 式新段階	IV 類 b	素文深鉢	口縁部～ 胴部	破片化
埋200	大阪	山ノ内遺跡 B 地区	2012-OU 土器棺墓	後期初頭	中津式	I 類	素文深鉢	口縁～底 部	なし
埋201	大阪	府中遺跡	08-4区03SK	中期末葉	北白川 C 式中段階	II 類 b	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋202	大阪	池田寺遺跡	3038-OO	後期初頭	中津式か	I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋203	大阪	池田寺遺跡	2525-OO	後期初頭	中津 I 式新段階	II 類 a	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋204	大阪	仏並遺跡	埋甕460-OX	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋205	大阪	仏並遺跡	374-OD 内埋甕	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部穿孔
埋206	大阪	仏並遺跡	土壙375-OU	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	II 類 b	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋207	大阪	仏並遺跡	土壙393-OU	中期末葉	北白川 C 式中段階	I 類	有文深鉢	口縁～胴 部	底部穿孔
埋208	大阪	仏並遺跡	450-OU	後期初頭	中津式か	II 類 b	無文深鉢	胴部	底部除去
埋209	大阪	仏並遺跡	25-OG	後期前葉		I 類	無文深鉢	頸～底部	底部穿孔
埋210	大阪	仏並遺跡	26-OG	後期前葉		I 類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋211	大阪	仏並遺跡	27-OG	後期前葉		I 類	無文深鉢	頸～底部	底部穿孔
埋212	大阪	仏並遺跡	28-OG	後期前葉		I 類	無文深鉢	ほぼ完形	胴部穿孔
埋213	大阪	仏並遺跡	104-OG	中期末葉	北白川 C 式中段階	I 類	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋214	大阪	仏並遺跡	SU-001	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類	有文深鉢	口縁～底 部	底部穿孔
埋215	大阪	向出遺跡	土坑1248	後期前葉		I 類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋216	大阪	向出遺跡	土坑248 (大型正形 土坑)	晩期初頭	滋賀里 II 式	II 類 b	有文注口土 器	胴～底部	なし
埋217	大阪	向出遺跡	土坑401 (大型正形 土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	II 類 b	有文深鉢	完形	なし
埋218	大阪	向出遺跡	土坑483 (有段底型 土坑)	後期後葉	宮滝 1 式	IV 類 b	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋219-1	兵庫	加茂遺跡150次	埋設土器 1	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴部	底部穿孔
埋219-2	兵庫	加茂遺跡150次	埋設土器 1	後期前葉		I 類	無文浅鉢	口縁～胴 部	底部穿孔
埋220	兵庫	加茂遺跡150次	埋設土器 2	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴部	底部穿孔
埋221	兵庫	加茂遺跡150次	埋設土器 3	後期前葉		I 類	無文深鉢	頸部	口縁部除去
埋222	兵庫	加茂遺跡150次	埋設土器 4	後期前葉		I 類	深鉢	胴部	底部除去
埋223	兵庫	原野・沢遺跡	埋甕 SP101	後期前葉	四ツ池式	I 類	有文深鉢	口縁～胴 部	底部除去か
埋224	兵庫	原野・沢遺跡	SX101内埋甕 1	後期前葉	四ツ池式	I 類	有文深鉢	胴～底部	不明
埋225	兵庫	原野・沢遺跡	SX101内埋甕 2	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	不明
埋226	兵庫	五番町遺跡	SK402	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～底 部	破片化
埋227	兵庫	五番町遺跡	SK406	後期前葉		I 類	不明	不明	不明
埋228	兵庫	印路遺跡	II トレンチ SK21	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去か
埋229	兵庫	佃遺跡	SX210	晩期前葉	滋賀里 III a 式	I 類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
28.5	-	-	複合：破片集積	破片集積		不整円形	0.7	0.7	屋外	居住域外	7.2m×3.5mの浅い落ち込み内に形成、報告では住居の炉とも推定
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
33.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
32.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
28.9	40.8	14.04	単体	横位		楕円形	1.1	0.9	屋外	居住域外	上半は削平か
27.4	-	-	単体	横位		不整円形	1.3	1.0	屋外	居住域外	底部は接合せず
-	-	-	単体	横位		楕円形	0.5	0.3	屋外	居住域外	
26.1	29.7	6.89	複合：別破片	横位		隅円長方形	1.7	1.0	屋外	居住域外	土坑の最終埋土に完形の土器が横倒しに埋置、土坑内には別個体の土器破片も含まれる
33.6	41.3	20.33	単体	正位		楕円形	1.2	0.6	屋内	建物縁辺部	土坑内に支え石となる礫を検出
19.2	-	-	単体	正位		円形	0.7	0.7	屋内	建物縁辺部	
27.8	25.8	8.24	単体	正斜位		楕円形	1.0	0.9	屋外	居住域内	深さ60cmの楕円形土壇の上部に土器を埋置したもの
-	-	-	単体	正位	礫	楕円形	0.8	0.5	屋外	居住域外	
-	-	-	単体	正位		楕円形	1.2	1.2	屋外	居住域外	土坑底に石敷き、土器を埋設してさらにマウンド状に埋め戻し、立石を構築か
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.4	屋外	居住域内	上部削平、土坑内に据え石
34.2	-	-	単体	正位		円形	0.6	0.5	屋外	居住域内	上部削平、土坑内に据え石
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域内	上部削平、土坑底に石を敷くが、土器底部とは接しない
31.3	32.4	14.36	単体	正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内	上部削平、土坑底に礫を置き、その上に土器を埋置、補修孔複数あり
31.6	59.8	37.19	単体	不明		不明	-	-	屋外	居住域外	側溝内のため状況不明
-	-	-	単体	正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域内	上部削平
39.6	-	-	単体	正位		隅円方形	1.1	0.9	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	複合：別破片	正位		隅円方形	1.4	1.4	屋外	居住域外	上部削平か、扁平礫に囲まれたような状態、土坑内にはその他の土器片も含む
36.2	20.2	11.78	単体	破片集積		円形	1.0	0.8	屋外	居住域外	
35.3	-	-	単体	破片集積		円形	1.9	1.1	屋外	居住域外	上面に板状の礫の集石状配石
-	-	-	複合：土器蓋	正位		楕円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	上部削平
32.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	単体	正位		不整円形	0.6	0.5	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	単体	逆位か		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	単体	正位		楕円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	上部削平
-	-	-	単体	正位		円形	0.4	0.3	屋外	居住域内	
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋内	建物縁辺部	頸部以上は削平
-	-	-	単体	正位		なし	-	-	屋内	建物縁辺部	頸部以上は削平
-	-	-	単体	不明		楕円形	0.7	0.5	屋外	居住域外	土坑内に10～20cmの礫5個を含む、炉跡の残欠の可能性あり
-	-	-	単体	不明		楕円形	0.9	0.7	屋外	居住域外	
34.8	-	-	単体	横位		楕円形	1.5	0.9	屋外	居住域外	
38.8	-	-	単体	横位		なし	-	-	屋外	居住域外	

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋230	兵庫	佃遺跡	SX211	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋231	兵庫	東南遺跡2次	埋甕1	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋232	兵庫	東南遺跡2次	埋甕2	後期前葉		I類	無文深鉢	不明	なし
埋233	兵庫	東南遺跡2次	埋甕3	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去か
埋234	兵庫	東南遺跡2次	埋甕4	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋235	兵庫	東南遺跡2次	埋甕5	後期前葉		I類	無文深鉢		底部穿孔
埋236	兵庫	東南遺跡2次	第4号ピット	後期		I類	不明	口縁～底部	底部穿孔か
埋237	兵庫	辻遺跡	20G 堅穴住居埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底部	底部穿孔
埋238	兵庫	加都遺跡	土器埋納土坑 SK02	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋239	兵庫	中の原遺跡	埋設土器	中期末葉～ 後期初頭		I類	深鉢	不明	底部除去か
埋240	兵庫	円応寺遺跡	土器棺墓1	後期前葉		I類	不明	胴～底部	底部穿孔
埋241	兵庫	円応寺遺跡	土器棺墓2	後期前葉		I類	不明	胴～底部	底部穿孔
埋242	兵庫	円応寺遺跡	土器棺墓3	後期前葉		I類	不明	胴～底部	底部穿孔
埋243	兵庫	今宿丁田遺跡	土器棺1	後期前葉か		I類	不明	不明	不明
埋244	兵庫	今宿丁田遺跡	土器棺2	後期前葉か		I類	不明	不明	不明
埋245	兵庫	今宿丁田遺跡	土器棺3	後期前葉か		I類	不明	不明	不明
埋246	兵庫	藤江川添遺跡	土器棺1	後期前葉	芥川式	I類	有文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋247	兵庫	長坂遺跡	SK3001	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋248-1	兵庫	長坂遺跡	SK3003	後期前葉	北白川上層式1b期	IV類c	有文深鉢	ほぼ完形	破片化
埋248-2	兵庫	長坂遺跡	SK3003	後期前葉	北白川上層式1b期	IV類c	有文注口土器	胴～底部	破片化
埋249	兵庫	川端遺跡	埋甕	後期初頭～ 前葉		I類	不明	胴～底部	不明
埋250	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	埋設土器 SK10	後期前葉		I類	有文深鉢	頸～底部	底部穿孔
埋251	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	埋設土器 SK36	後期前葉		I類	素文深鉢	胴部	底部除去
埋252	奈良	秋篠・山陵遺跡	埋設土器1	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋253	奈良	秋篠・山陵遺跡	埋設土器2	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	胴～底部	なし
埋254	奈良	西坊城遺跡	土坑5	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋255-1	奈良	西坊城遺跡	土坑6	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	無文深鉢	頸～底部	口縁部除去
埋255-2	奈良	西坊城遺跡	土坑6	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	I類	浅鉢	口縁～胴部	不明
埋256	奈良	観音寺本馬遺跡(樫原市調査)	埋設土器 SX285	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類	有文深鉢	口縁～頸部	なし
埋257	奈良	玉手遺跡4次	土器棺墓1	後期後葉		I類	無文深鉢	胴部	底部穿孔
埋258	奈良	玉手遺跡4次	埋設土器1	後期初頭	中津Ⅰ式古段階	I類	有文深鉢	完形	底部穿孔
埋259	奈良	玉手遺跡4次	石囲遺構	後期初頭	称名寺式変容(中津Ⅱ式併行)	IV類a	有文深鉢	口縁～底部	破片化
埋260	奈良	玉手遺跡4次	埋設土器2	後期前葉		I類	無文深鉢	頸～底部	底部穿孔
埋261	奈良	下茶屋地藏谷遺跡	埋甕 SX101	後期初頭	中津式	I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋262-1	奈良	下茶屋地藏谷遺跡	埋甕 SX102	後期初頭	中津式か	I類	無文深鉢	胴部	不明
埋262-2	奈良	下茶屋地藏谷遺跡	埋甕 SX102	後期初頭	中津式か	I類	素文深鉢	口縁～胴部	破片化
埋263	奈良	布留遺跡堂垣内地区	埋設土器	後期初頭	中津式	I類	素文深鉢	胴～底部	なし
埋264-1	奈良	布留遺跡堂垣内地区	堅穴建物1炉2	中期末葉	北白川C式中段階	IV類a	有文深鉢	口縁部～胴部	破片化
埋264-2	奈良	布留遺跡堂垣内地区	堅穴建物1炉2	中期末葉	北白川C式中段階	IV類a	有文浅鉢	口縁部～胴部	破片化
埋265	奈良	別所ソルベ遺跡	埋甕遺構1	後期前葉		I類	素文深鉢	胴～底部	底部穿孔

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
42.0	-	- 単体		横位		なし	-	-	屋外	居住域外	
-	-	- 単体		正位		なし	0.4	0.4	屋外	居住域内	
-	-	- 複合：石蓋		正位		不明	-	-	屋外	居住域内	径30cm程度の礫が落ち込む
-	-	- 単体		正位		なし	0.3	0.3	屋外	居住域内	
-	-	- 単体		正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内	口縁部露出し外側に倒れて出土
-	-	- 単体		正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住域内	
-	-	- 単体		横位		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住域内	
35.5	-	- 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋内	建物縁辺部	
-	-	- 単体		正斜位		円形	0.5	0.5	屋外	居住域外	周辺に縄文時代の遺構・遺物なし
-	-	- 単体		正位		不明	-	-	屋外	居住域内	
-	-	- 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域内	
-	-	- 単体		正位		楕円形	0.7	0.7	屋外	居住域内	
-	-	- 単体		正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域内	土坑底に据え石あり
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	不明	
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	不明	
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	不明	
32.4	-	- 単体		正位		なし	-	-	屋外	居住域外	
30.3	-	- 単体		横位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域内	埋土に磨石等含む、貯蔵穴か
23.6	23.4	6.76	複合：破片集積	横位		円形	0.7	0.7	屋外	居住域内	袋状土坑、埋土に石器含む、貯蔵穴か
-	-	- -		-		-	-	-	-	-	
-	-	- 単体		正位		不明	-	-	屋外	居住域外	
-	-	- 単体		正位		楕円形	0.6	0.4	屋外	居住域外	上部削平
-	-	- 単体		正位	礫	円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	上部削平
-	-	- 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	墳砂を検出
-	-	- 単体		正位		なし	0.3	0.3	屋外	居住域外	
34.2	-	- 単体		横位	焼骨片	隅円長方形	0.9	0.6	屋外	居住域外	
-	-	- 複合：土器蓋		正位	焼骨片	楕円形	0.6	0.4	屋外	居住域外	
40.0	-	- -		-		-	-	-	-	-	
36.0	-	- 単体		逆位		不明	-	-	屋外	居住域内	上部削平
-	-	- 単体		正位か		不整円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	
32.0	40.3	18.60	単体	正位		楕円形	1.0	0.6	屋外	居住域外	口縁部露出し外側に倒れて出土
38.7	-	- 単体破片集積	破片集積			方形	0.5	0.5	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置
-	-	- 単体		正斜位		円形	0.7	0.7	屋外	居住域外	
25.8	28.4	7.16	複合：石蓋	正斜位		円形	0.4	0.3	屋外	居住域外	
-	-	- 複合：別破片	横位		凹石	なし	0.4	0.3	屋外	居住域外	
34.0	-	- -		-		-	-	-	-	-	
-	-	- 単体		正位	骨片	なし	-	-	屋外	居住域内	住居は不定形、炉2（石囲炉）のほぼ直上に埋設
24.8	-	- 複合：破片集積	破片集積		サヌカイト片、骨片、焼成粘土	円形か	0.6	0.5	屋内	建物中央部	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置
24.0	-	- -		-		-	-	-	-	-	
-	-	- 単体		正位		楕円形	0.8	0.7	屋外	居住域内	上部削平、埋土中から堀之内1式C群の深鉢の大破片が出土

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋266	奈良	別所ソルベ遺跡	埋甕遺構2	後期前葉	堀之内1式(北白川 上層式1期併行)	I類	有文深鉢	ほぼ完形 底部穿孔	
埋267	奈良	別所ソルベ遺跡	埋甕遺構3	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形 底部穿孔	
埋268	奈良	別所ソルベ遺跡	5F区土坑(SD401)	後期前葉		I類	無文深鉢	口縁～底 部	底部穿孔
埋269	奈良	広瀬遺跡	土坑24	後期初頭	中津I式新段階	I類	有文深鉢	完形	なし
埋270	奈良	広瀬遺跡	土坑51	後期初頭	中津I式新段階	IV類c	有文深鉢	口縁～胴 部	破片化
埋271	奈良	広瀬遺跡	土坑37	中期末葉	北白川C式新段階	I類	有文深鉢	ほぼ完形	胴下部～底 部穿孔
埋272	奈良	広瀬遺跡	土坑21	後期前葉	四ツ池式	II類b	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋273	奈良	西河内吉山遺跡	土器埋納遺構	後期末葉	滋賀里I式	I類	無文深鉢	口縁～底 部	なし
埋274	奈良	沢遺跡第5次	SX-01	後期前葉	芥川式	I類	有文深鉢	完形	なし
埋275	奈良	沢遺跡第5次	SX-02	後期前葉		I類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋276-1	奈良	沢遺跡第5次	SX-03	後期前葉	芥川式	I類	有文深鉢	頸～胴部	底部除去
埋276-2	奈良	沢遺跡第5次	SX-03	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	口縁部除去
埋277	奈良	沢遺跡第5次	SX-04	後期前葉	後期前葉	I類	無文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋278	奈良	沢遺跡第5次	SX-05	後期		I類	不明	不明	不明
埋279-1	奈良	高井遺跡	SK120	後期初頭	中津I式	不明	有文深鉢	口縁～胴 部	底部穿孔
埋279-2	奈良	高井遺跡	SK120	後期初頭	中津I式新段階	不明	有文深鉢	ほぼ完形	なし
埋280	奈良	高井遺跡	SK105	後期初頭	中津II式	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋281	奈良	高井遺跡	SK144	後期初頭		I類	素文深鉢	ほぼ完形	底部除去
埋282	奈良	高井遺跡	SK154	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋283	奈良	高井遺跡	SK153	後期前葉	芥川式	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋284	奈良	稲刈ムカンダ遺跡	J-1土壇1	後期末葉	滋賀里I式	I類	有文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋285	奈良	宮滝遺跡	埋設土器1	中期末葉	北白川C式中段階	I類	有文深鉢	胴～底部	なし
埋286	奈良	宮の平遺跡	土坑2105	後期初頭		II類b	素文深鉢	口縁～胴 部	底部除去
埋287	奈良	宮の平遺跡	竪穴住居5002張り出し部伏鉢	中期末葉	北白川C式中段階	I類	有文深鉢	口縁～胴 部	なし
埋288-1	奈良	中遺跡	土器埋納土坑	後期後葉	宮滝2式	II類b	有文注口土 器	ほぼ完形	なし
埋288-2	奈良	中遺跡	土器埋納土坑	後期後葉	宮滝2式	II類b	有文深鉢	不明	破片化
埋289	和歌山	中飯降遺跡	9080埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋290	和歌山	中飯降遺跡	10033埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋291	和歌山	中飯降遺跡	10086埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋292	和歌山	中飯降遺跡	10032埋設土器	後期前葉		I類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋293	和歌山	中飯降遺跡	10039埋設土器	後期前葉		I類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋294	和歌山	中飯降遺跡	10085埋設土器	後期前葉		I類	深鉢	胴～底部	なし
埋295	和歌山	中飯降遺跡	10084埋設土器	後期前葉		I類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋296	和歌山	中飯降遺跡	9259埋設土器	後期前葉	北白川上層式1期	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋297	和歌山	中飯降遺跡	9270埋設土器	後期前葉	北白川上層式1期	I類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋298	和歌山	中飯降遺跡	9263埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	胴部	底部除去か
埋299	和歌山	中飯降遺跡	9276埋設土器	後期前葉	北白川上層式1a期	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋300	和歌山	中飯降遺跡	10045埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋301	和歌山	中飯降遺跡	9203埋設土器	後期前葉	北白川上層式1a期	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋302	和歌山	中飯降遺跡	10076埋設土器	後期前葉		I類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋303	和歌山	中飯降遺跡	10077埋設土器	後期前葉	堀之内1式(北白川 上層式1a期併行)	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋304	和歌山	中飯降遺跡	8229埋設土器	後期前葉	北白川上層式1a期	I類	有文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
-	-	- 単体		正位		円形	0.6	0.5	屋外	居住域内	上部削平
23.2	19.1	7.50 単体		正斜位	ヒスイ製玉 製品	円形	0.7	0.5	屋内	建物縁辺部	上部削平、住居状遺構の床 面より上のレベルに構築
38.0	52.0	- 単体		不明		楕円形	-	-	屋外	居住域内	遺構図なし
26.4	28.8	7.24 単体		正位		楕円形	0.8	0.7	屋外	居住域外	遺構図は石井1999による
32.6	-	- 単体破片集積		破片集積		楕円形	1.3	1.2	屋外	居住域外	遺構図は石井1999による
-	-	- 単体		正斜位		楕円形	1.0	0.9	屋外	居住域外	遺構図は石井1999による
-	-	- 単体		逆斜位		円形	0.8	0.8	屋外	居住域内か	遺構図は石井1999による
24.8	23.2	8.38 単体		横位		楕円形	0.8	0.6	屋外	居住域外	埋設土器以外に縄文時代の 遺構・遺物なし
25.0	28.1	6.58 単体		正斜位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	
32.6	36.1	15.02 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	
-	-	- 複合：入れ子		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住域外	2 個体の胴部を重ねて埋設
-	-	-		-		-	-	-	-	-	
-	-	- 単体		正位		円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	
-	-	- 不明		正位		円形か	0.3	0.3	屋外	居住域外	遺物報告なし、遺構図なし
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	居住域内か	未報告
-	-	-		-		-	-	-	-	-	未報告
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	居住域内か	未報告
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	居住域内か	未報告
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	居住域内か	未報告
-	-	- 不明		不明		不明	-	-	屋外	居住域内か	未報告
22.5	-	- 単体		不明		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住域外	
-	-	- 単体		正位		不明	-	-	屋外	居住域外か	
26.4	-	- 単体		正位		不整円形	1.1	0.9	屋外	居住域外	上部に積石状配石をとま う
20.6	-	- 単体		逆位		なし	-	-	屋内	建物張出部	柄杓形住居の張り出し部
-	-	- 複合：別破片		正位		円形	0.7	0.7	屋外	居住域外	土坑内に、深鉢 6 個体以上 の破片敷き→胴下半部を打 ち欠いた深鉢→完形の注口 土器→深鉢破片で被覆
-	-	-		-		-	-	-	-	-	
-	-	- 単体		正位		円形	0.8	0.8	屋外	居住域内	上面削平、後期初頭の可能 性あり
33.4	39.2	13.80 単体		正位	礫	円形	0.6	0.5	屋内	建物縁辺部	上面に板状の礫の集石状配 石
33.4	38.6	18.40 単体		正位		円形	0.5	0.5	屋内	建物縁辺部	
28.0	39.5	13.78 単体		正位	礫	方形	1.1	1.1	屋内	建物縁辺部	マウンドを検出か
-	-	- 単体		正斜位		円形	0.3	0.3	屋内	建物縁辺部	上面削平
-	-	- 単体		正位		なし	-	-	屋外	居住域内	遺構図なし
-	-	- 単体		正位		なし	-	-	屋外	居住域内	遺構図なし
37.2	38.2	24.74 単体		正位		円形	0.5	0.5	屋内	建物縁辺部	上部削平、柱穴9200と重複 柱穴9202と重複、蓋石とみ られる板状礫が土器内部に 落ち込み、それにともなっ て土器も損壊を受けている ものか
28.2	33.6	10.40 単体		正位	礫	楕円形	0.5	0.5	屋内	建物縁辺部	
-	-	- 単体		正位か		円形	0.6	0.6	屋外	居住域内	底部付近の 3 分の 1 程度の み残存
32.2	34.0	11.97 単体		不明		円形	0.5	0.5	屋内	建物縁辺部	
32.4	40.4	17.25 単体		正位	礫	円形	0.5	0.5	屋内	建物縁辺部	
29.6	33.1	11.24 単体		不明		不明	-	-	屋内	建物縁辺部	遺構図なし、9100の土層断 面から床面の構築と判断
37.2	41.6	19.44 単体		正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住域内	
31.2	38.0	19.64 単体		正位		円形	0.7	0.6	屋外	居住域内	
31.2	42.8	14.36 単体		正斜位	礫	楕円形	0.7	0.6	屋内	建物縁辺部	口縁部は床面から突出

近畿地方における配石遺構・土器埋設遺構の基礎的研究

表3 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名	時期	型式	類型	器種	残存 部位	二次 加工
埋305	和歌山	中飯降遺跡	8183埋設土器	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋306	和歌山	中飯降遺跡	3010埋設土器	後期前葉		I 類	素文鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋307	和歌山	中飯降遺跡	3011埋設土器	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴部	底部除去
埋308	和歌山	中飯降遺跡	9032埋設土器	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋309	和歌山	中飯降遺跡	9033埋設土器	後期前葉		I 類	無文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋310	和歌山	西飯降Ⅱ遺跡	1450埋設土器	晩期前葉	滋賀里Ⅲ a 式	I 類	無文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋311	和歌山	西飯降Ⅱ遺跡	2600埋設土器	後期		不明	不明	口縁～頸部	不明
埋312	和歌山	西飯降Ⅱ遺跡	6352埋設土器	後期		不明	不明	胴部	不明
埋313	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	埋設土器 1 (3149)	後期初頭	福田K 2 式古段階	I 類	有文深鉢	口縁～胴部, 底部	なし
埋314	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	埋設土器 2 (3153)	後期初頭	中津Ⅱ式	I 類	有文深鉢	口縁～胴部	なし
埋315	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	埋設土器 4 (3225)	後期初頭	中津式か	I 類	有文深鉢	口縁～底部	なし
埋316	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	土壇墓 SK-01	後期前葉	北白川上層式 1 b 期	IV 類 c	有文深鉢・ 無文深鉢・ 無文浅鉢	口縁～胴部	破片化
埋317	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	SK-04	後期前葉	北白川上層式 2 a 期	I 類	素文深鉢	ほぼ完形	底部穿孔
埋318	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	JSK-08	後期前葉		I 類	無文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋319	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	JSK-06	後期前葉	北白川上層式 1 期	Ⅱ 類 b	素文鉢	ほぼ完形	なし
埋320	和歌山	船岡山遺跡	SK725	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ 類 a	素文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋321	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 7	中期後葉	船元Ⅳ式	I 類	素文深鉢	口縁～胴部	底部除去
埋322	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 8	中期後葉	船元Ⅳ式	I 類	素文深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋323	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 1	後期前葉		I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋324	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 2	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋325	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 3	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	なし
埋326	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 4	後期前葉		I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋327	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 5	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類	有文深鉢	完形	なし
埋328	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 6	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋329	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 9	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類	有文深鉢	口縁～底部	なし
埋330	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 10	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋331	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 11	後期前葉		I 類	深鉢	胴～底部	底部穿孔
埋332	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 12	後期前葉		I 類	無文深鉢	完形	底部穿孔
埋333	和歌山	徳蔵地区遺跡	埋甕 13	後期前葉	芥川式	I 類	有文深鉢	完形	底部穿孔
埋334	和歌山	徳蔵地区遺跡	土坑2458	後期前葉	北白川上層式か	Ⅱ 類 a	有文壺	胴～底部	なし
埋335	和歌山	徳蔵地区遺跡	土坑2451	後期前葉		Ⅱ 類 a	深鉢	胴～底部	底部穿孔

土器埋設遺構集成表

表3 つづき

口径 (cm)	器高 (cm)	容量 (ℓ)	埋設 方法	埋設 姿勢	内容物	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	位置	列 1	備考
28.8	-	- 単体		正斜位		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住城内	
23.4	23.7	8.58 単体		正斜位		楕円形	0.7	0.6	屋外	居住城内	
-	-	- 単体		正位		楕円形	0.9	0.7	屋外	居住城内	上部削平
33.2	-	- 単体		不明		楕円形	0.9	0.7	屋外	居住城内	遺構図なし
29.0	-	- 単体		不明		円形	0.5	0.4	屋外	居住城内	遺構図なし
32.0	42.9	20.93 単体		正斜位		楕円形	0.8	0.6	屋外	居住城内	ピットを壊して構築か、 竈穴建物1182は黒色磨研浅鉢 1点のみ報告
-	-	- 単体		正位	不明	円形	0.4	0.4	屋外	不明	上部削平、胴部以下はもと もと欠損か、遺物報告なし
-	-	- 単体		横位	不明	楕円形	1.0	0.8	屋外	不明	上部削平、遺物報告なし、 時期不明
36.4	-	- 単体		横位		不整円形	1.3	1.1	屋外	居住城内	土坑底に板石、土坑内に蓋 石・礫が落ち込む
26.0	-	- 単体		逆斜位	石核	楕円形	0.7	0.5	屋外	居住城内	上部削平、周辺に10～30cm の礫が散在
-	-	- 単体		横位		楕円形	0.8	0.6	屋外	居住城内	上部削平
-	-	- 複合：破片集積		破片集積	骨片	不整円形	0.9	0.9	屋外	居住城内	土坑内に人頭大の礫5個含 む、配石遺構にも計上
37.6	44.2	26.30 複合：土器蓋		横位	骨片	楕円形			屋外	居住城内	埋土に礫・土器片を含む、 底部の打ち欠き部を別の底 部破片が覆う
-	-	- 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住城内	土器内の埋土は3層に分層 される。落ち込み内出土土 器は北白川上層式1b期
14.9	10.1	3.01 単体		正斜位		長楕円形	1.2	0.7	屋外	居住城内	土坑の底に掌大の板状礫を 置きその上に土器を埋置、 土坑底は階段状を呈する
34.2	-	- 単体		横位		楕円形	2.8	1.4	屋外	居住城内	底部を欠く1個体の土器が つぶれた状態で出土、他個 体の破片も含む
30.3	-	- 単体		正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住城内	竈穴住居の埋土を切って構 築される
-	-	- 単体		正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住城内	上部削平
34.0	46.0	29.48 単体		正位	礫	円形	0.7	0.7	屋外	居住城内	
-	-	- 単体		正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住城内	上部削平、土坑下部に支え 石か
-	-	- 単体		正位		楕円形	0.5	0.4	屋外	居住城内	上部削平
41.0	45.7	36.17 単体		正斜位		円形	0.6	0.6	屋外	居住城内	
26.4	24.8	8.25 単体		正斜位	礫	楕円形	0.7	0.6	屋外	居住城内	上部削平
-	-	- 単体		正位	礫	円形	0.5	0.5	屋外	居住城内	上部削平
33.2	-	- 単体		正位		円形	0.6	0.5	屋外	居住城内	上部削平
-	-	- 単体		正位		円形	0.5	0.5	屋外	居住城内	上部削平
-	-	- 単体		正位		円形	0.3	0.3	屋外	居住城内	上部削平
30.0	31.1	12.94 単体		正位		円形	0.4	0.4	屋外	居住城内	
31.8	28.8	11.45 単体		正位		円形	0.6	0.6	屋外	居住城内	土器を囲むように積石状配 石遺構が構築される
-	-	- 単体		正位	礫	長方形	0.7	0.6	屋外	居住城内	
-	-	- 単体		正位		長方形	0.8	0.6	屋外	居住城内	上部削平、土坑墓と埋設土 器の組み合わせか

表4 配石遺構数の時期的変化

時期		I 類															
		a	b1	b2	b3	c1	c2	c3	d1	d2	e1	e2	f1	f2	f3	不明	小計
中期	前葉～中葉																1
	中葉		1														
	後葉																
	後葉～末葉					1		1						1			3
	末葉		1	3(1)		2(2)			1		2(2)	2					11(5)
後期	末葉～後期初頭			1			1(1)										2(1)
	末葉～後期前葉	2															2
	初頭	3				1		1(1)	2	6	3	1					21(1)
	初頭～前葉			2		2		1									5
	前葉	7	19	13(1)	8	6(1)		4	11	16(1)		8	8	3			103(3)
	前葉～中葉																
	中葉	1	2(1)	2		3	1		2					1			12(1)
	中葉～後葉					1	2			2							5
	中葉～末葉		8		4	3		1	4				10	1		1	32
	中葉～晩期前葉									3							3
	後葉					1									1		2
	末葉																
	後葉～晩期初頭									1(1)		2(2)	2(2)				5(5)
晩期	初頭			1(1)					3								4(1)
	前葉																
	初頭～前葉																
計		13 2.9%	31 7.0%	26 5.8%	12 2.7%	20 4.5%	4 0.9%	8 1.8%	23 5.2%	28 6.3%	5 1.1%	13 2.9%	20 4.5%	6 1.3%	1 0.2%	1 0.2%	211 47.3%

時期		II 類					III 類	IV 類	不明	計
		a	b	c	d	小計				
中期	前葉～中葉						4			4
	中葉								1	2
	後葉							3		3
	後葉～末葉									3
	末葉	7(1)	5(2)			12(3)	4	25(1)		52(9)
	末葉～後期初頭	1	6			7	3	5	1(1)	18(2)
後期	末葉～後期前葉									2
	初頭	13	21(1)			34(1)	3(1)	5		63(3)
	初頭～前葉		3			3		2		10
	前葉	9	30	1	1	41	15(1)	4(1)	1	164(3)
	前葉～中葉						1			1
	中葉			1		1	3(1)			16(2)
	中葉～後葉		1			1				6
	中葉～末葉	1				1		1		34
	中葉～晩期前葉									3
	後葉	11(2)	19			30(2)	4(3)	1	1	38(5)
	末葉	1	1			2		1		3
	後葉～晩期初頭	2(2)	3(3)			5(5)	2(2)			12(12)
晩期	末葉～晩期初頭	1				1				1
	初頭		1			1		1		6(1)
	前葉						1	3(3)		4(3)
	初頭～前葉	1				1				1
計		47	90	2	1	140	40	51	4	446
		10.5%	20.2%	0.4%	0.2%	31.4%	9.0%	11.4%	0.9%	100.0%

※括弧内は時期比定が確定的でないものの内数
※複数類型の組み合わせは重複して計数

表 5 配石遺構集成表

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配1	福井	岩の鼻遺跡	炉 SF02	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.7	40～60		
配2	福井	岩の鼻遺跡	土坑 SK24	中期末葉	北白川C式	Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.3	0.8	20～40		土坑端に大礫1個が被覆, 報告では頭部被覆石とする
配3	福井	岩の鼻遺跡	土坑 SK87	中期末葉	北白川C式	Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.1	0.6	20～60		土坑端に大礫1個が被覆, 報告では頭部被覆石とする
配4	福井	岩の鼻遺跡	炉 SF03	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅳ類 b	側石土坑	土坑	楕円形	1.0	0.8	20～40		
配5	三重	覚正垣内遺跡	土坑 SK3	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.9	10～30	土器, 皿類	磨石・石
配6	三重	覚正垣内遺跡	土坑 SK8	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整円形	1.1	1.0	20～50	土器, 石・石皿類	磨石・石 大形の土器片含む
配7	三重	覚正垣内遺跡	土坑 SK5	後期初頭	中津式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	円形	0.8	0.8	20～50	土器, 石皿	
配8	三重	覚正垣内遺跡	土坑 SK7	後期初頭	中津式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	円形	0.8	0.8	20～30	土器, 皿類	磨石・石
配9	三重	釜生田遺跡	竪穴住居 SH1石 囲炉	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	Ⅳ類 b	列石状	なし	円形	0.6	0.6	20	焼土	
配10	三重	川向遺跡	Ⅱ D 5 区集石	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅱ類 b	混石土坑	竪穴建 物	不整形	3.7	3.4	10～60	土器	
配11	三重	川向遺跡	石囲炉 SF1	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	円形	1.0	1.0	20～50	土器, 石鏝	
配12	三重	川向遺跡	石囲炉 SF2	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.6	20～50		
配13	三重	川向遺跡	石囲炉 SF3	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.7	0.5	30～50	土器	
配14	三重	川向遺跡	石囲炉 SF4	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.6	0.4	10～30		
配15	三重	小牧南遺跡 2・3次	石囲炉 SF185	中期末葉		Ⅳ類不明	側石土坑	土坑	不明	0.8	0.7	20～30	土器, 石皿	遺存状態が悪く、形態不明
配16	三重	小牧南遺跡 2・3次	SH335石囲炉	中期末葉		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	円形	0.9	0.9	20	土器, 剥片	
配17	三重	小牧南遺跡 2・3次	SH360石囲炉	中期末葉		Ⅳ類不明	側石土坑	土坑	不明	0.8	0.6	10～20	土器, 石皿	遺存状態が悪く、形態不明
配18	三重	鈴山遺跡 2・3次	SH108石囲炉	中期後葉	里木Ⅱ式～篠原A段 階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.9	0.9	20～60	焼土	礫は被熱、内部底面は赤 変して硬化
配19	三重	井尻遺跡	土坑 SK47	後期初頭	中津Ⅱ式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.8	20～50	土器	
配20	三重	井尻遺跡	土坑 SK36	後期初頭～ 前葉		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.3	1.2	10～20		
配21	三重	井尻遺跡	土坑 SK40	後期初頭～ 前葉		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.2	1.0	20～40		
配22	三重	井尻遺跡	土坑 SK51	後期初頭～ 前葉		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	0.9	0.9	20～50	土器	
配23	三重	井尻遺跡	土坑 SK17	後期前葉	北白川上層式 1 期	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.9	20～40	土器, 石鏝, ト チ種実炭化物	
配24	三重	井尻遺跡	土坑 SK45	後期前葉		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整楕 円形	1.2	0.8	20～40	土器	
配25	三重	大石遺跡	SH48炉	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.6	0.5	40	土器	

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配26	三重	大石遺跡	SH49炉	中期末葉		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.8	20～50	土器	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、炉石は被熱するが土器は被熱なし、土器は未報告
配27	三重	大石遺跡	SH50炉	中期末葉		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.6	0.5	20～40	土器	住居は検出されず
配28	三重	大石遺跡	配石遺構 SK46	中期末葉	北白川C式か	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	方形	1.5	1.5	30～50/80	土器	下部に扁平礫、上部では80cmの棒状礫と土器がまともって出土 大形の土器片を含む
配29	三重	大原堀遺跡第2・3次	集石土坑 SK83	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	0.9	0.6	～20	土器	
配30	三重	大原堀遺跡第2・3次	集石土坑 SK84	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.0	0.5	10～50	炭化物、焼土粒	
配31	三重	堀之内遺跡	C地点 SX8	中期末葉		Ⅰ類 b 2	集石状	なし	円形	0.3	0.3	10～20		被熱、下部に焼土形成
配32	三重	堀之内遺跡	C地点 SX10	中期末葉		Ⅰ類 b 2	集石状	なし	円形	0.3	0.3	10～20		被熱、下部に焼土形成
配33	三重	高瀬B遺跡	土坑 SK26	後期初頭	福田K2式古段階	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整楕円形	1.2	0.9	20～30	土器	大形の土器片を含む
配34	三重	高瀬B遺跡	土坑 SK49	後期初頭	福田K2式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	0.7	0.6	10～30	土器	大形の土器片を含む
配35	三重	高瀬B遺跡	土坑 SK37	後期初頭	福田K2式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	1.4	1.4	10～30	土器	
配36	三重	高瀬B遺跡	土坑 SK29	後期前葉	四ツ池式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整円形	1.7	1.6	10～30	土器、磨石、炭化物	一部の礫に被熱痕
配37	三重	中戸遺跡	配石遺構 SX18	後期初頭	福田K2式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.2	0.7	10～30	土器、磨石	
配38	三重	中戸遺跡	配石遺構 SX27	後期前葉	四ツ池式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.9	1.2	20～50	土器	
配39	三重	中戸遺跡	土坑 SK23	後期前葉	四ツ池式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整楕円形	1.5	1.0	20～40	土器	
配40	三重	東野B遺跡	土坑 SK3	中期末葉	北白川C式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整円形	1.3	1.1	10～30	土器	検出面に礫が集中、土器片多く含む
配41	三重	東野B遺跡	焼土坑 SK4	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	長方形	1.2	0.6	10～30	土器、石鏃、石鏟、蔽石	埋土に焼土を多く含むため、報告では炉跡の可能性を指摘
配42	三重	東野B遺跡	炉跡 SF6	中期末葉～後期初頭		Ⅳ類 a	列石状	なし	方形	0.8	0.8	20～30	炭化物	
配43	三重	下川原遺跡5次	柄鏡形住居石囲炉	後期前葉	北白川上層式1期	Ⅳ類 b	側石土坑	土坑	円形	0.8	0.8	20～30		
配44	三重	下川原遺跡5次	柄鏡形住居	後期前葉	北白川上層式1期	Ⅱ類 d	集石状	なし	不定形	1.0	0.7	20～40	土器	張出部のみ敷石が残る
配45	三重	下川原遺跡7次	SB9石囲炉	後期前葉	北白川上層式2期	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.5	0.5	20～30		
配46	三重	下沖遺跡	3号集石遺構	後期中葉～晩期前葉		Ⅰ類 d 2	散石状	落ち込み	不整形	3.0	1.8	10～30		
配47	三重	下沖遺跡	1号集石遺構	後期中葉～晩期前葉		Ⅰ類 d 2	散石状	落ち込み	不整形	2.1	1.2	10～30		
配48	三重	下沖遺跡	2号集石遺構	後期中葉～晩期前葉		Ⅰ類 d 2	散石状	落ち込み	不整形	1.6	0.7	10～30		
配49	三重	天白遺跡	配石 1	後期中葉～後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀里Ⅰ式	Ⅰ類 f 1	列石状	なし	楕円形	1.0	0.9	20～40		
配50	三重	天白遺跡	配石 2	後期中葉～後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀里Ⅰ式	Ⅰ類 f 1	列石状	土坑	楕円形	2.0	1.5	20～40		

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配51	三重	天白遺跡	配石3	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	土坑	楕円形	1.8	1.5	20～40		下部土坑内に風化礫1点
配52	三重	天白遺跡	配石4	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	土坑	楕円形	2.0	1.5	20～40		下部土坑内に風化礫1点
配53	三重	天白遺跡	配石5	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	土坑	円形	1.3	1.3	20～40		
配54	三重	天白遺跡	配石6	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	土坑	楕円形	1.2	1.0	20～40		
配55	三重	天白遺跡	配石7	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類不明	不明	土坑	不明	-	-	20～40		
配56	三重	天白遺跡	配石8周辺	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類d1	散石状	なし	不整形	6.8	6.0	20～40		
配57	三重	天白遺跡	配石9	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	円形	0.8	0.8	20～40		
配58	三重	天白遺跡	配石10	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f2	列石状	なし	直線状	2.1	0.6	20～40		
配59	三重	天白遺跡	配石11	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	円形	1.0	1.0	20～40		
配60	三重	天白遺跡	配石12	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	なし	円形	1.0	1.0	20～40		1/2程度のみ残存
配61	三重	天白遺跡	配石13	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.1	0.9	20～40		
配62	三重	天白遺跡	配石14	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b3	集石状	なし	円形	2.0	2.0	20～40		ほぼ同心円状に配列
配63	三重	天白遺跡	配石15	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b3	集石状	なし	円形	1.8	1.8	20～40		ほぼ同心円状に配列
配64	三重	天白遺跡	配石16	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	円形	1.5	1.5	20～40		
配65	三重	天白遺跡	配石17	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	不整形	1.3	0.8	20～40		
配66	三重	天白遺跡	配石18	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b3	集石状	なし	円形	1.6	1.6	20～40		
配67	三重	天白遺跡	配石19	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類c1	集石状	なし	楕円形	3.6	2.0	20～40		
配68	三重	天白遺跡	配石20	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	円形	1.5	1.5	20～40		
配69	三重	天白遺跡	配石21	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.8	1.4	20～40		
配70	三重	天白遺跡	配石22	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.2	1.0	20～40		
配71	三重	天白遺跡	配石23	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類c1	集石状	なし	不整形	6.4	3.6	20～40		
配72	三重	天白遺跡	配石24	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類c1	集石状	なし	楕円形	3.0	1.2	20～40		

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石形態	下部遺構	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	礫径(cm)	伴出遺物	備考
配73	三重	天白遺跡	配石25	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b 3	集石状	なし	楕円形	1.9	1.7	20～40		中央部には礫なし
配74	三重	天白遺跡	配石26	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類c 3	集石状	なし	不整楕 円形	2.4	2.4	20～40		
配75	三重	天白遺跡	配石27	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類b 1	集石状	なし	円形	0.5	0.5	20～40		
配76	三重	天白遺跡	配石28	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f 1	列石状	なし	楕円形	1.4	1.2	20～40	焼土	
配77	三重	天白遺跡	配石29	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	IV類b	列石状	土坑	円形	0.9	0.9	20～40	焼土	報告では「焼土をとまな うタイプの配石遺構」と する
配78	三重	天白遺跡	配石30	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	II類a	集石土坑	土坑	円形	1.0	1.0	20～40		
配79	三重	天白遺跡2次	配石遺構1・2	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類f 1	列石状	なし	楕円形	1.2	1.0	30		
配80	三重	天白遺跡2次	配石遺構3	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	1.7	1.6	20～40		
配81	三重	天白遺跡3次	配石1	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	1.1	0.6	20～40		
配82	三重	天白遺跡3次	配石2	後期中葉～ 後期末葉	元住吉山Ⅰ式～滋賀 里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	0.7	0.5	20～40		
配83	三重	森添遺跡	配石SX1	後期中葉	元住吉山Ⅰ式新～Ⅱ 式	I類c 2	積石状	なし	不整楕 円形	2.1	1.7	10～20	土器	
配84	三重	森添遺跡	配石SX2	後期中葉	元住吉山Ⅰ式新	I類a	積石状	なし	楕円形	1.1	1.0	20～50	土器	
配85	三重	森添遺跡	配石SX3	後期中葉	元住吉山Ⅰ式新～Ⅱ 式	I類c 1	散石状	なし	不整楕 円形	2.4	1.2	20～50	土器	
配86	三重	森添遺跡	配石SX4	後期中葉	元住吉山Ⅰ式新	I類d 1	散石状	なし	不整楕 円形	1.9	1.2	10～30	土器	
配87	三重	森添遺跡	配石SX5	後期中葉	元住吉山Ⅰ式新	I類f 2	列石状	なし	直線状	0.9以上	0.5以上	10～30	土器	
配88	三重	森添遺跡	配石SX6	後期中葉～ 後葉		I類d 2	散石状	なし	不整形	2.4	1.3	10～30		
配89	三重	森添遺跡	配石SX7	後期中葉～ 後葉		I類d 2	散石状	なし	不整形	1.8	1.0	10～30		
配90	三重	森添遺跡	土坑SK29	後期中葉～ 後葉		II類b	混石土坑	土坑	円形	0.8	0.7	10～30		焼土が周辺に分布、石囲 炉が改変を受けたものか
配91	三重	森添遺跡	炉SF32	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	IV類b	列石状	土坑	楕円形	1.2	1.0	20～30	土器、焼土塊	
配92	三重	奥ホリ遺跡	配石土坑SK34	後期後葉	元住吉山Ⅱ式～宮瀧 Ⅰ式	II類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.9	10～30	土器、サヌカイ ト剥片	
配93	滋賀	穴太遺跡	配石遺構－1	後期中葉	元住吉山Ⅰ式	I類c 1	集石状	なし	楕円形	2.8	2.4	10～40	土器片、サヌカ イト片	
配94	滋賀	穴太遺跡	配石遺構－2	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	I類f 3	列石状	なし	方形	3.6	2.8	10～40	土器、石製品、 サヌカイト片	配石遺構－2・3・4は 隣接

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配95	滋賀	穴太遺跡	配石遺構-3	後期中葉～ 後葉	元住吉山Ⅰ～Ⅱ式	I類c 1	積石状	なし	不整形	4.2	3.6	10～40	土器片、石鏃、 耳栓、石製品、 サヌカイト片	複数の単位が集まったものか
配96	滋賀	穴太遺跡	配石遺構-4	後期中葉か		I類b 1	集石状	なし	楕円形	1.0	0.8	10～40		配石遺構-2の下位で検出
配97	滋賀	穴太遺跡	配石遺構-5	後期後葉		I類c 1	集石状	なし	円形	2.4	2.4	10～40		
配98	滋賀	穴太遺跡	集石遺構-1	後期中葉～ 後葉		I類c 2	集石状	なし	長方形	4.4	1.0	10～20	なし	
配99	滋賀	穴太遺跡	集石遺構-2	後期中葉～ 後葉		I類c 2	集石状	落ち込み	不整形	5.6	3.7	10～20	なし	
配100	滋賀	金森遺跡	配石	中期末葉～ 後期初頭		I類b 2	集石状	なし	円形	0.6	0.6	5～20		
配101	滋賀	上出A遺跡	T4SH1石囲炉	中期末葉	北白川C式中段階	IV類a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.7	30～60	土器	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、口縁部→胴部→底部の順
配102	滋賀	狐塚遺跡	SH-1石囲炉	後期初頭	中津Ⅰ式	IV類a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.8	20～50	土器	炉内に1個体の土器片を内面上向きに敷設
配103	滋賀	吉身西遺跡	配石	後期後葉		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
配104	滋賀	北落遺跡	石組1	晩期初頭	滋賀里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	2.0	1.6	20～40	土器、散石	石組1～4は互いに隣接
配105	滋賀	北落遺跡	石組2・4	晩期初頭	滋賀里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	2.8	1.9	20～40		石組1～4は互いに隣接
配106	滋賀	北落遺跡	石組3	晩期初頭	滋賀里Ⅰ式	I類d 1	散石状	なし	不整形	5.6	2.1	20～40		石組1～4は互いに隣接
配107	滋賀	常衛遺跡	集石土坑SK2	中期末葉	北白川C式古段階	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	0.4	0.4	5～15	なし	土坑底から浮いて小石が集積
配108	滋賀	常衛遺跡	集石土坑SK3	中期末葉	北白川C式古段階	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	5～15	土器	土坑底から浮いて小石が集積
配109	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第1号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d 1	散石状	なし	不整形	5.2	4.6	20～40	不明	
配110	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第2号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d 2	散石状	なし	不整形	2.4	1.8	10～20	不明	
配111	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第3号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d 2	散石状	なし	不整形	5.6	4.2	10～20	不明	
配112	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第4号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b 1	集石状	なし	円形	0.5	0.4	30～50	不明	
配113	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第5号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b 2	集石状	なし	円形	0.8	0.5	15～30	不明	
配114	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第6号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b 1	集石状	なし	不整形	0.6	0.3	30	不明	
配115	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第7号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d 2	散石状	なし	不整形	2.2	0.8	10～15	不明	
配116	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第8号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～2b期	I類d 2	散石状	落ち込み	不整形	8.7	8.7	10～30	土器	落ち込み→落ち込み拡張→土器捨て場・配石
配117	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第9号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅲ類d	側石土坑	土坑	長方形	4.1	1.5	30～50	なし	SK86→SK87→埋没・廃棄土坑→配石、組石部分の内法1.3m×0.6m

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配118	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第10・11号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	9.4	2.0	5～20	土器	
配119	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第12号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d1	散石状	なし	不整形	3.4	1.5	10～35	土器	
配120	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第13号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～2b期	I類c1	積石状	なし	楕円形	3.0	1.1	20～70	土器	一部の礫に比熱痕あり
配121	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第15号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2b期	I類d2	散石状	なし	不整形	2.5	1.0	10～25	土器	
配122	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第16号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d1	散石状	なし	不整形	2.0	0.8	20～50	土器・石棒?	
配123	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第17号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	2.7	1.2	10～30	土器	
配124	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第18号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	3.0	2.2	10～20	土器	
配125	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第19号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	1.6	1.4	10～30	土器	
配126	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第21号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	6.4	2.6	10～20	土器	
配127	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第22号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	6.2	2.8	10～20	土器	
配128	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第23号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2b期	I類d2	散石状	土坑	不整形	3.8	2.1	10～30	土器	SK3→土器捨て場→配石
配129	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第24号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～2b期	I類d2	散石状	なし	不整形	5.0	3.3	10～25	土器	
配130	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第25号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d1	散石状	なし	不整形	4.2	3.2	20～40	不明	土器だまりの上部に構築, 礫石器を含む
配131	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第1号集石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b2	集石状	なし	円形	0.4	0.4	10～20		
配132	滋賀	小川原遺跡(H2・3年度)	第2号集石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d2	散石状	なし	不整形	6.4	5.2	10～30		
配133	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第28号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.8	1.6	20～40		
配134	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第29号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.2	1.1	20～40		
配135	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第30号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.4	1.2	20～40		
配136	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第31号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	円形	1.0	1.0	20～40		
配137	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第32号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類c3	集石状	なし	楕円形	3.0	1.9	10～40		
配138	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第33号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	楕円形	0.8	0.5	20～50		
配139	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第34号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	円形	0.4	0.4	30		
配140	滋賀	小川原遺跡(H4・6年度)	第35号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅲ類b	集石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.8	20～50		脂肪酸分析あり

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	磔径 (cm)	伴出遺物	備考
配141	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第37号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b2 集石状	なし	不整形	0.7	0.5	20～30			
配142	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第38号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b2 集石状	なし	不整形	0.3	0.3	10～20			
配143	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第39号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b1 集石状	なし	楕円形	1.0	0.6	20～40			
配144	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第40号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類f1 列石状	なし	楕円形	1.4	1.2	20～40			
配145	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第41号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	II類b 混石土坑	土坑	楕円形	1.4	1.1	10～30			
配146	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第42・44・45号配 石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類f2 列石状	なし	直線状	7.8	2.7	20～60			
配147	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第43号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d1 散石状	なし	楕円形	2.8	1.9	20～60			
配148	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第46号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類e2 立石状	土坑	不明	-	-	30			
配149	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第47号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d1 散石状	なし	円形	3.0	2.7	20～40			
配150	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第57号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d1 散石状	なし	不整形	3.6	1.8	20～40			
配151	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第58号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d1 散石状	なし	不整形	2.6	1.7	10～50			
配152	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第60号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	III類a+ 側石+集石 d 土坑	土坑	長方形	1.4	1.0	20～60			
配153	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第61号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d2 散石状	土坑	不整形	2.0	2.0	10～30			
配154	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第63号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	II類b 混石土坑	土坑	楕円形	0.7	0.5	20～30			
配155	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第64号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	II類b 混石土坑	土坑	円形	0.3	0.3	10～20			
配156	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第65号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	II類b 混石土坑	土坑	円形	0.4	0.4	20～40			
配157	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第66号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	II類b 混石土坑	土坑	楕円形	2.4	1.6	10～40			
配158	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第69号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b2 集石状	なし	楕円形	0.7	0.4	10～20			
配159	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第70号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b2 集石状	土坑	楕円形	1.2	0.5	20～30			
配160	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第71号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類b2 集石状	なし	不整形	0.5	0.2	20			
配161	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第72号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類f2 列石状	なし	直線状	0.7	0.2	10～30			
配162	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第73号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～ 3a期	I類d1 散石状	なし	不整形	2.3	1.1	10～40			

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石形態	下部遺構	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	磔径(cm)	伴出遺物	備考
配163	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第74号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	不整形	0.4	0.3	30		
配164	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第75号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f2	列石状	なし	直線状	2.1	0.7	10～30		
配165	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第76号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	II類b	混石土坑	土坑	円形	0.5	0.5	10～30		
配166	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第77号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	II類b	混石土坑	土坑	円形	0.3	0.3	20		
配167	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第78号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.2	1.0	20～40		
配168	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第79号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.3	1.0	20～40		
配169	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第80号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.1	0.8	20～40		
配170	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第81号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.3	1.0	10～40		
配171	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第82号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類c1	集石状	なし	楕円形	2.1	1.5	20～50		
配172	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第83号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類c3	集石状	なし	楕円形	2.0	1.3	10～50		
配173	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第84号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	円形	0.9	0.9	20～40		
配174	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第85号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	II類b	混石土坑	土坑	長方形?	0.9	0.6	10～30		
配175	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第86号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類c3	集石状	なし	楕円形	2.6	1.5	10～40		
配176	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第88号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d1	散石状	なし	不整形	2.3	1.5	10～40		
配177	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第89号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	不整形	1.0	0.5	20～50		
配178	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第90号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	II類b	混石土坑	土坑	不整形	0.5	0.4	20		
配179	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第91号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	II類b	混石土坑	土坑	円形	0.7	0.7	10～30		
配180	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第93号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.9	1.6	20～60		
配181	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第94号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b1	集石状	なし	楕円形	1.2	0.7	20～40		
配182	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第95号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	なし	円形	1.2	1.1	10～40		
配183	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第97号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	楕円形	1.3	0.9	10～30		
配184	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第98号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	円形	1.8	1.8	10～50		

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石形態	下部遺構	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	磔径(cm)	伴出遺物	備考
配185	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第99号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	円形	1.8	1.6	10～50		
配186	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第100号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	円形	1.2	1.2	10～50		
配187	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第101号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類d1	散石状	なし	不整形	4.0	1.6	20～40		
配188	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第102号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b2	集石状	なし	円形	1.2	1.0	10～20		
配189	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第103号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	楕円形	1.2	0.8	10～50		
配190	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第104号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類f1	列石状	なし	楕円形	1.5	1.2	20～50		
配191	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第105号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	円形	0.4	0.4	10～20		
配192	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第106号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	円形	0.4	0.4	10～30		
配193	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第108号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類c	埋石土坑	土坑	楕円形	0.6	0.5	30		
配194	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第109号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類e2	立石状	土坑	円形	0.4	0.4	30		
配195	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第110号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類e2	立石状	土坑	円形	0.3	0.3	40		
配196	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第111号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	0.5	0.4	20		
配197	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第112号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類e2	立石状	土坑	楕円形	0.2	0.1	20		
配198	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第113号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類e2	立石状	土坑	楕円形	0.5	0.4	30		
配199	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第114号配石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類e2	立石状	土坑	円形	0.2	0.2	30		
配200	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第6号集石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b2	集石状	なし	円形	1.2	1.1	10～20		
配201	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第7・8号集石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b2	集石状	なし	不整形	1.3	1.0	10～20		
配202	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	第10号集石遺構	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	I類b3	集石状	土坑	楕円形	1.6	1.2	10～40		
配203	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	SK109	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅲ類c	混石土坑	土坑	長方形	1.3	0.6	20～50		
配204	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	貯蔵穴 SK156	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.6	1.3	10～30	土偶	
配205	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	貯蔵穴 SK247	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整楕円形	1.7	1.0	10～30	石棒	
配206	滋賀	小川原遺跡 (H4-6年度)	SK263	後期前葉	北白川上層式2a～3a期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.5	1.1	10～30		

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配207	滋賀	醍醐遺跡	石造特殊遺構 a	中期後葉～ 末葉か		I 類 c 3	集石状	なし	楕円形	3.0	1.8	10～60	土器・石器	炭化物、焼土がかからむ、 一部の礫に比熱痕
配208	滋賀	醍醐遺跡	石造特殊遺構 b	中期後葉～ 末葉か		I 類 c 1	集石状	なし	円形	1.6	1.1	10～60	土器・石器	炭化物、焼土がかからむ、 一部の礫に比熱痕
配209	滋賀	醍醐遺跡	石造特殊遺構 c	中期後葉～ 末葉か		I 類 f 2	列石状	なし	直線状	2.4	0.6	10～60	土器・石器	
配210	滋賀	起し又遺跡	3号住居跡石囲炉	中期後葉	篠原A段階	IV類 a	側石土坑	土坑	方形	0.7	0.7	10～30	なし	炉内に人頭大の礫が充填 (魔絶時?)
配211	滋賀	起し又遺跡	1号住居跡石囲炉	中期末葉	北白川C式成立期	IV類 a	側石土坑	土坑	方形	0.8	0.7	10～40	なし	隣接して石皿を配置
配212	滋賀	起し又遺跡	配石遺構 1	中期末葉		I 類 b 1	集石状	落ち込み	円弧状	1.1	0.4	5～40	なし	SH1埋土上に構築
配213	滋賀	起し又遺跡	配石遺構 2 (立石)	中期末葉		I 類 e 2	立石状	ビット	円形	0.6	0.3	30	なし	礫には摩耗痕あり
配214	滋賀	起し又遺跡	配石遺構 3 (集石)	中期末葉		I 類 d 1	散石状	なし	不整形	2.0	0.7	10～40	土器	SH2埋土上に構築
配215	滋賀	起し又遺跡	配石遺構 4	中期末葉		III類 a + d	側石+集石 土坑	土坑		1.0	0.7	10～40	なし	
配216	滋賀	起し又遺跡	土器埋設遺構 SX6	後期初頭	中津式か	I 類 a + II類 a	積石状+側 石+集石土 坑	土器埋 設遺構	不整楕 円形	1.1	0.8	10～40	土器	
配217	京都	京都大学植物園遺跡	配石 I 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 a	積石状	土坑	円形	1.4	1.4	30～60	骨片, 土器片	棒状の自然礫が隣接して 出土, 立石の可能性あり
配218	京都	京都大学植物園遺跡	配石 II 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 a	積石状	なし	楕円形	1.7	1.0	30～60		
配219	京都	京都大学植物園遺跡	配石 III 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 a	積石状	なし	楕円形	1.5	1.2	30～60	骨片	
配220	京都	京都大学植物園遺跡	配石 IV 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 a	積石状	土器埋 設遺構	楕円形	0.8	0.6	30～60		西に土器埋設 3 号が隣接
配221	京都	京都大学植物園遺跡	配石 V 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 b 1	集石状	なし	楕円形	1.0	0.7	30～60		西側は欠損
配222	京都	京都大学植物園遺跡	配石 VI 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 b 1	集石状	なし	楕円形	1.0	0.7	30～60	骨片	
配223	京都	京都大学植物園遺跡	配石 VII 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 b 1	集石状	なし	円形	0.9	0.9	30～60		
配224	京都	京都大学植物園遺跡	配石 VIII 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 a	積石状	土坑	楕円形	1.2	1.0	30～60	骨片, 耳飾	
配225	京都	京都大学植物園遺跡	配石 IX 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 b 1	集石状	土器埋 設遺構	円形	0.6	0.6	30～60		土器埋設 6 号に隣接, 周 辺にも礫が散在するため, 散石状となる可能性あり
配226	京都	京都大学植物園遺跡	配石 X 号	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	I 類 b 1	集石状	なし	楕円形	1.1	0.7	30～60		
配227	京都	北白川上終町遺跡	炉址	中期末葉	北白川C式中段階	IV類 a	側石土坑	土坑	円形	0.8	0.8	20～40		礫は一部被熱, 内部に大 形土器片あり
配228	京都	日野谷寺町遺跡	石囲炉 SK379 (堅 穴住居 1)	中期末葉	北白川C式新段階	IV類 b	側石土坑	土坑	楕円形	1.0	0.6	20～30	土器	住居は不定形落ち込み状, 落ち込みには人頭大の礫 が多量に混入

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配229	京都	日野谷寺町遺跡	石囲炉 SK421 (竪穴住居2)	中期末葉	北白川C式か	Ⅳ類b	側石土坑	土坑	円形	0.4	0.4	20～30	不明	住居は不定形落ち込み状、落ち込みには人頭大の礫が多量に混入
配230	京都	日野谷寺町遺跡	石囲炉 SK237 (竪穴住居3)	後期初頭		Ⅳ類a	側石土坑	土坑	方形	0.4	0.4	20～30	不明	住居は掘り込みなくピットのみ
配231	京都	日野谷寺町遺跡	配石土壙 SK261	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ類b	混石土坑	袋状土坑	円形	1.0	1.0	10～60	土器	報告では貯蔵穴の廃棄時に礫を投棄したものとする
配232	京都	日野谷寺町遺跡	集石土壙 SK428	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	円形	1.6	1.6	10～30	土器	報告では中期末葉とする
配233	京都	日野谷寺町遺跡	土壙墓 SK222	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	1.3	1.0	30～60	土器	土坑底面から深鉢1個体が出土(土器は未報告)
配234	京都	日野谷寺町遺跡	土壙 SK426	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.4	1.0	10～30	土器	遺物は未報告
配235	京都	伊賀寺遺跡 R927次	SH08石囲炉	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類a	側石土坑	土坑	方形	1.0	1.0	30～80		
配236	京都	伊賀寺遺跡 R941次	SX346	後期後葉		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	0.9	0.8	10～15	土器・石器・剥片	礫は被熱、上層に集中、報告では剥片石器製作残滓とする
配237	京都	伊賀寺遺跡 R941次	土坑 SK507	中期末葉か		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	長方形	1.0	0.8	5～15	土器	礫は中層に集中
配238	京都	伊賀寺遺跡 R941次	土坑 SK530	後期後葉か		Ⅱ類a	集石土坑	土坑	不整楕円形	1.7	1.1	5～30	土器細片・石器・剥片	土坑が二段に掘られ、上段は拳大、下段は人頭大の礫
配239	京都	伊賀寺遺跡 R941次	土坑 SK540	後期後葉	宮滝式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	5～15	土器・火葬骨	礫は底面付近に集中
配240	京都	伊賀寺遺跡 R941次	土坑 SK588	後期後葉	元住吉山Ⅱ式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	円形	1.2	1.2	5～15	土器・石器	礫は被熱、上層に固まる
配241	京都	伊賀寺遺跡 R943次	炉跡 SK19	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類a	側石土坑	土坑	方形	0.7	0.6	65	土器・焼土・焼礫	炉の周辺1.7×1.3mの範囲に粘土床貼、炉石はほぼ抜き取り、被熱による風化著しい
配242	京都	伊賀寺遺跡 R943次	土坑 SK20	後期後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	不整形	1.5	1.4	5～30	骨片・焼土・炭化物	礫は被熱、検出面に集中
配243	京都	伊賀寺遺跡 R975次	集石遺構 SX14	後期後葉か		Ⅲ類a	集石土坑	土坑	長方形	1.2	0.8	10～30	骨片	
配244	京都	伊賀寺遺跡 R988次	SK123	後期後葉か		Ⅱ類a	集石土坑	土坑	方形	1.0	0.9	10～40	土器細片	
配245	京都	伊賀寺遺跡 R1073次	竪穴建物 SH17	中期末葉		Ⅳ類a	側石土坑	土坑	方形	0.6	0.6	不明		炉石は一部抜き取り
配246	京都	下海印寺遺跡 (範囲確認)	集石遺構	後期前葉	芥川式	Ⅰ類a	積石状	なし	楕円形	1.5	0.9	10～40	土器	
配247	京都	下海印寺遺跡 (範囲確認)	土坑 3	後期初頭	中津Ⅱ式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.0	0.7	10～30	土器	少量の炭化種子が出土(未同定)
配248	京都	薪遺跡 6次	竪穴式住居跡 SH68炉	中期後葉	里木Ⅱ式か	Ⅳ類a	列石状	土坑	方形	0.8	0.8	20～40	焼土、石皿	礫は被熱、礫は一部しか残存せず、炉埋土に小礫多く含む
配249	京都	薪遺跡 6次	土坑 SK70	中期末葉か		Ⅰ類b 2	集石状	土坑	不整形	1.6	0.8	10～30	焼土塊	礫は被熱、時期は遺構面の主体時期からの類推
配250	京都	森山遺跡	配石遺構 SX29	後期中葉	元住吉山Ⅰ～Ⅱ式	Ⅰ類b 2	集石土坑	土坑	楕円形	1.6	1.4	10～30	土器細片	
配251	京都	森山遺跡	配石遺構 SX42	後期中葉	元住吉山Ⅰ～Ⅱ式	Ⅱ類c	埋石土坑	土坑	楕円形	0.6	0.4	45	土器細片	

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配252	京都	浦入遺跡N地点	石囲い炉	後期前葉か		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.4	0.4	20～30		礫は被熱，隣接して土器 体部下半が出土
配253	京都	三河宮の下遺跡	配石遺構	中期末葉か		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	0.6	0.4	20～40	なし	
配254	京都	三河宮の下遺跡	石囲い炉跡 1	中期末葉	北白川C式か	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	長方形	1.0	0.6	10～30	土器	3回の重複として報告
配255	京都	三河宮の下遺跡	石囲い炉跡 2	中期末葉か		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	不明	不明	不明	石鎌	詳細不明だが，中期末か
配256	大阪	縄手遺跡 1 次	石組炉跡	後期初頭～ 前葉		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	円形	0.9	0.8	20～30		住居跡は検出されず*
配257	大阪	縄手遺跡 1 次	石組遺構	後期初頭～ 前葉		Ⅰ類 b 2	集石状	なし	不整楕 円形	1.0	0.8	20		
配258	大阪	縄手遺跡 2 次	特殊石組遺構	後期前葉	北白川上層式 1 b 期	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	円形	1.1	1.1	10～20	土器	周囲に焼土，上部から石 敷き→土器片敷→石敷き →土器片敷き
配259	大阪	縄手遺跡10次	配石遺構	後期前葉	北白川上層式 2 a 期	Ⅰ類 c 1	集石状	なし	円形	2.2	1.9	20～50	土器	径 2 m の環状列石が先に 設置され，内部に石が集 積
配260	大阪	馬場川遺跡 G・H 地点	第 1 号炉跡	晩期前葉か		Ⅳ類 b	側石土坑	土坑	円形	0.7	0.7	10～20	焼土	礫は被熱
配261	大阪	馬場川遺跡 G・H 地点	第 2 号炉跡	晩期前葉か		Ⅳ類 b	側石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	10～20	焼土，土器	礫は被熱
配262	大阪	馬場川遺跡 G・H 地点	第 3 号炉跡	晩期前葉か		Ⅳ類 b	側石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	10～20	焼土，土器	礫は被熱
配263	大阪	日下遺跡第13次	方形石組炉	後期末葉	滋賀里 I 式	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.4	0.4	20	炭，貝片	
配264	大阪	大泉遺跡86-1次	石囲遺構	後期初頭	中津式	Ⅳ類 a	列石状	なし	円形	0.9	0.8	20～40		被熱，炭化物あり
配265	大阪	砂遺跡	集石遺構	中期中葉		不明	不明	なし	不明	不明	不明	不明		未報告
配266	大阪	野畑春日町遺跡 1 次	SX-2 (土墳墓)	中期中葉～ 中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	不整楕 円形	1.8	1.0	10～20		
配267	大阪	野畑春日町遺跡 1 次	SX-3 (土墳墓)	中期中葉～ 中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.9	1.0	10～20		
配268	大阪	野畑春日町遺跡 2 次	SX-01 (土墳墓)	中期中葉～ 中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	楕円形	1.8	0.7	5～20		
配269	大阪	野畑春日町遺跡 2 次	SX-02 (土墳墓)	中期中葉～ 中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	楕円形	2.4	1.0	5～20		
配270	大阪	池田寺遺跡	2000-00	後期初頭	中津 I 式古段階	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整円 形	1.4	1.4	20～40	土器，剥片	
配271	大阪	池田寺遺跡	2503-00	後期初頭	中津 I 式新段階	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.2	0.9	20～40	土器，焼人骨， 焼獣骨	
配272	大阪	池田寺遺跡	2522-00	後期初頭	中津 I 式	Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	楕円形	1.5	1.1	10～30	土器，剥片	
配273	大阪	池田寺遺跡	3599-00	後期初頭	中津 I 式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整楕 円形	1.3	0.9	10～30	土器	
配274	大阪	池田寺遺跡	2860-00	後期初頭	中津 II 式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整楕 円形	2.0	1.7	10～20	土器，剥片	
配275	大阪	池田寺遺跡	2561-00	後期初頭	中津 II 式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	1.0	1.0	10～30	土器，剥片	大形の土器片を含む
配276	大阪	仏並遺跡 I	354-0D 炉	中期末葉	北白川 C 式	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形？	0.8	0.8	10～30		焼土含む
配277	大阪	仏並遺跡 I	416-00	中期末葉～ 後期前葉		Ⅰ類 a	積石状	土坑	不整円 形	1.3	0.9	10～30		

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配278	大阪	仏並遺跡Ⅰ	418-00	中期末葉～ 後期前葉		I 類 a	積石状	土坑	楕円形	1.0	0.8	10～30		
配279	大阪	仏並遺跡Ⅰ	382-00	後期初頭	中津式	I 類 e 1	立石状	土坑	楕円形	1.0	0.8	10～40	土器, 石鏃	
配280	大阪	仏並遺跡Ⅰ	450-OU	後期初頭	中津式か	I 類 e 1 + II 類 a	立石状+集 石土坑	土器埋 設遺構	楕円形	1.2	不明	20～70	埋設土器, 土器, 蔽石	
配281	大阪	仏並遺跡Ⅰ	153-00	後期前葉		II 類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.6	1.2	20～40	土器	
配282	大阪	仏並遺跡Ⅰ	475-OH	後期前葉	北白川上層式 2 期	IV 類 b	列石状	土坑	不整楕 円形	0.8	0.6	10～30		埋土に炭, 灰含む
配283	大阪	仏並遺跡Ⅰ	484-OC	後期前葉か		I 類 c 1	集石状	なし	円形	3.6	3.0	10～50	なし	
配284	大阪	仏並遺跡Ⅲ	31-00	後期初頭	福田 K 2 式	II 類 a	混石土坑	土坑	円形	1.0	0.9	10～30	土器	
配285	大阪	仏並遺跡Ⅲ	32-00	後期初頭	福田 K 2 式	II 類 a	混石土坑	土坑	円形	1.1	1.0	10～30	土器	
配286	大阪	仏並遺跡Ⅲ	80-OD 床面集石	後期前葉	芥川式	I 類 b 1	集石状	なし	楕円形	1.3	0.7	10～40	石棒片	大型石棒含む, 報告では 床面とするが若干浮いた 礫もある
配287	大阪	仏並遺跡Ⅲ	1-OX	後期前葉か		I 類 b 2	集石状	なし	楕円形	1.7	1.5	10～30	なし	
配288	大阪	仏並遺跡 (市)	SX011	中期末葉か		I 類 c 1	積石状	なし	不整楕 円形	3.0	2.0	5～40	なし	最上部から最下部まで比 高40cm
配289	大阪	仏並遺跡 (市)	SX012	中期末葉か		I 類 c 1	積石状	なし	不整楕 円形	2.5	1.5	5～10/ 30～50	土器, 石鏃, 石 錐, 磨石	
配290	大阪	仏並遺跡 (市)	SX013	中期末葉～ 後期初頭か		I 類 c 2	集石状	土坑	不整形	2.4	1.2	5～35	凹石, 台石	下部土坑は不定形の落ち 込み, 焼礫含む
配291	大阪	仏並遺跡 (市)	SX014	中期末葉～ 後期初頭か		不明	不明	土坑	不明	3.0	不明	10～40	凹石, 台石	
配292	大阪	仏並遺跡 (市)	SX004	後期前葉か		I 類 d 2	散石状	なし	不整楕 円形	2.5	1.5	10～20	なし	
配293	大阪	向出遺跡	土坑1499・1500	後期中葉	元住吉山Ⅰ式	I 類 c 1	積石状	土坑	不整楕 円形	2.6	1.2	10～40	土器, 石皿・凹 石・蔽石・砥石の土坑	土器・石皿・凹 連続して構築された 2 つ の土坑
配294	大阪	向出遺跡	土坑1615 (大型正 形土坑)	後期後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝 1 式	II 類 b	混石土坑	土坑	不整方 形	1.1	1.0	10～30	土器, 楔形石器, 台石・石皿・磨 石	
配295	大阪	向出遺跡	土坑483 (有段底 型土坑)	後期後葉	宮滝 1 式	II 類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.0	1.0	10～30	土器, 石皿・磨 石・凹石	無文土器が割られて外面 を上に向けて埋置
配296	大阪	向出遺跡	土坑1511 (長形土 坑滋賀里領域)	後期後葉	宮滝 1 式	II 類 a	集石土坑	土坑	不整楕 円形	1.5	0.7	10～40	土器, 石鏃・削 器, 石皿・蔽石	中央に柱痕あり
配297	大阪	向出遺跡	土坑595 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	II 類 a	集石土坑	土坑	方形	1.3	1.3	10～30	土器, 棒状礫	
配298	大阪	向出遺跡	土坑546 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	II 類 b	混石土坑	土坑	方形	1.3	1.3	10～25	土器, 削器, 石 皿・蔽石・凹石	
配299	大阪	向出遺跡	土坑473 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	II 類 b	混石土坑	土坑	方形	1.3	1.3	10～40	土器, 石鏃・石 錐, 石皿・蔽石	中央に柱痕あり, 報告で は礫は根固めかとする
配300	大阪	向出遺跡	土坑535 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	II 類 b	混石土坑	土坑	不整円 形	1.1	1.0	20～30	土器	

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配301	大阪	向出遺跡	土坑601 (有段底 型土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整楕 円形	0.8	0.5	20～30	土器片, 石鏃・ 削器, 石皿	柱痕とみられる土層あり
配302	大阪	向出遺跡	土坑1606 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	方形	1.3	1.3	10～30	土器, 楔形石器, 台石・石皿・磨 石・敲石	
配303	大阪	向出遺跡	土坑1610 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整方 形	1.0	1.0	10～30	土器, 石皿	礫は埋土下半に集中し, その上面に土器片が面的 に出土
配304	大阪	向出遺跡	土坑337 (配石土 坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅲ類d	側石土坑	土坑	不整長 方形	1.6	1.4	10～40	土器片, 石皿	南・東面に礫が二三配置 される。西半はテラス状 の平坦面に礫を置く, 概 して無造作な配石
配305	大阪	向出遺跡	土坑806 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整方 形	1.5	1.4	10～50	土器, 石鏃・削 器・楔形石器, 石皿・磨石・敲 石	
配306	大阪	向出遺跡	土坑1293 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	2.3	1.7	10～40	土器, 石鏃・削 器・楔形石器, 石皿・磨石・凹 石・敲石	
配307	大阪	向出遺跡	土坑1045 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	1.5	1.3	10～40	土器, 石鏃・削 器・楔形石器・ 石鏃・石核, 石 皿・磨石・凹石 骨片, 小玉, 土 器, 石鏃・削器・	大型礫は土坑下部に敷石 楔形石器・石核, 状に検出
配308	大阪	向出遺跡	土坑1103 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.5	1.4	5～45	石皿	
配309	大阪	向出遺跡	土坑799 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	不整円 形	1.1	1.1	10～30	土器, 石皿・磨 石・凹石・台石	
配310	大阪	向出遺跡	土坑793 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整円 形	1.0	1.0	10～30	土器。楔形石器, 打製石斧, 磨石・ 石皿	
配311	大阪	向出遺跡	土坑1356 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.3	1.1	10～40	骨片, 土器, 石 鏃・削器・楔形 石器・石核, 石 皿・磨石・敲石・ 凹石	
配312	大阪	向出遺跡	土坑1393 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.5	1.0	10～40	土器, 石鏃・削 器・楔形石器, 石 皿に赤色顔料付着, 中 石皿・磨石・敲 石	中央に柱痕あり,
配313	大阪	向出遺跡	土坑1368 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝2式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	1.6	1.6	10～40	土器, 石鏃・削 器, 石皿・磨石・ 敲石	

表 5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配314	大阪	向出遺跡	土坑1044 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝 2 式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.2	1.0	10～40	土器、楔形石器、 石棒、石皿・磨 石・凹石・台石	大型石棒を完形で埋納
配315	大阪	向出遺跡	土坑832 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整方 形	1.7	1.4	5～40	土器、石皿・砥 石	
配316	大阪	向出遺跡	土坑1330 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝式	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整方 形	1.6	1.2	10～50	骨片、土器、石 鏃・削器・楔形 石器、石皿・磨 石・台石	中央に柱痕あり、礫は根 固め石か、土器に骨片付 着あり
配317	大阪	向出遺跡	土坑911 (大型正 形土坑)	後期後葉	宮滝式か	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整形	1.5	1.5	10～50	土器、削器	中央に有機質土(柱痕?) あり
配318	大阪	向出遺跡	土坑1612 (長形土 坑超伸展領域)	後期後葉か		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	2.6	1.0	10～30	土器片、楔形石 器、石皿・磨石・ 凹石	土坑中央底に円形のくぼ みあり、その周囲に礫が 集中、報告では木柱の根 固め石と推定
配319	大阪	向出遺跡	土坑1607 (長形土 坑伸展領域)	後期後葉か		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.8	0.9	10～30	土器片	
配320	大阪	向出遺跡	土坑235 (大型正 形土坑)	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	1.2	1.1	20～30	削器、楔形石器	中央に柱痕、報告では間 詰石のような性質を想定
配321	大阪	向出遺跡	土坑1510 (大型正 形土坑)	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.9	10～30	土器片、石皿・ 磨石・凹石	円礫と扁平礫の組み合わ せ
配322	大阪	向出遺跡	土坑454 (配石土 坑)	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅲ類 d	側石土坑	土坑	長方形	1.4	0.7	10～25	土器片	四周に礫がめぐる、遺物 は細片のため時期の特定 不可
配323	大阪	向出遺跡	土坑332 (配石土 坑)	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅲ類 d	側石土坑	土坑	不整長 方形	1.3	1.0	10～20	土器片	西半三面に礫がめぐる、 埋土上部の礫は蓋石とし ては小さく立石が倒れた ものか、遺物は細片のた め時期の特定不可
配324	大阪	向出遺跡	土坑666 (長形土 坑滋賀里領域)	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	長方形	1.4	1.0	10～30	なし	
配325	大阪	向出遺跡	土坑346	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整形	1.7	0.2	10～30	石皿	土坑内に柱痕あり、礫は 根固め石か
配326	大阪	向出遺跡	配石土坑802	後期後葉～ 晩期初頭か		Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整方 形	0.5	0.5	30～50	土器片	
配327	大阪	向出遺跡	配石1515	後期後葉～ 晩期初頭か		I 類 d 2	散石状	なし	不整形	0.8	0.5	10～30	なし	検出面(地山)より30cm 程度浮いた位置で検出、 角礫を中心に棒状礫を南 北軸に3点並べたもの
配328	大阪	向出遺跡	立石1543	後期後葉～ 晩期初頭か		I 類 e 2	立石状	土坑	楕円形	0.3	0.3	50	なし	
配329	大阪	向出遺跡	立石土坑359	後期後葉～ 晩期前葉か		I 類 e 2	立石状	土坑	円形	0.3	0.3	30以上	石棒	立石は結晶片岩製の石棒

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配330	大阪	向出遺跡	土坑1102 (大型正 形土坑)	後期末葉	滋賀里Ⅰ式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整楕 円形	1.9	1.6	10～40	骨片, 土器, 石 鏃・削器・楔形 石器・石核, 石 皿・凹石	
配331	大阪	向出遺跡	土坑1601 (長形土 坑滋賀里領域)	後期末葉～ 晩期初頭	滋賀里Ⅰ～Ⅱ式	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	1.3	0.8	15～40	土器片, 石皿・ 磨石・台石・砥 石	
配332	大阪	向出遺跡	土坑248 (大型正 形土坑)	晩期初頭	滋賀里Ⅱ式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	方形	1.4	1.4	10～30	土器, 石鏃, 石 皿・磨石・凹石・ 蔽石	土坑中央に注口土器を埋 置
配333	兵庫	宅原遺跡 (内垣地区)	集石遺構 SX201	後期初頭	中津式か	Ⅰ類d 2	散石状	なし	不整形	1.0	1.0	～10	土器細片	報告は本文のみ
配334	兵庫	小部北ノ谷遺跡	配石遺構	中期中葉	船元Ⅱ式か	Ⅰ類b 1	集石状	土坑	不整方 形	0.7	0.7	10～40	なし	調査区全体に拳大～人頭 大の礫が散在
配335	兵庫	五番町遺跡	配石遺構 SX401	後期前葉	北白川上層式1期	Ⅰ類b 2	集石状	なし	円形	0.7	0.7	20～30	土器	報告は本文のみ
配336	兵庫	篠原A遺跡	土壇4	中期末葉	北白川C式成立期～ 古	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	1.3	1.1	10～40	土器	焼礫を含む
配337	兵庫	佃遺跡	焼礫集積土坑 SK512	後期前葉	四ツ池式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.3	1.1	15～50	なし	礫は被熱を受ける, 報告 では調理施設と想定
配338	兵庫	日笠山貝塚	1号人骨	晩期前葉	滋賀里Ⅲa式	Ⅲ類b	集石土坑	土坑	長方形	1.1	0.6	20～40	土器	人骨遺存, 仰臥屈葬
配339	兵庫	東南遺跡	2次配石墓	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	0.6	0.5	30～60		立石・埋甕に近接
配340	兵庫	東南遺跡	2次立石	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅰ類e 2	立石状	なし	円形	0.1	0.1	20	なし	埋甕・配石墓に近接
配341	兵庫	東南遺跡	4次配石遺構	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅲ類a + d	側石+集石 土坑	なし	長方形	1.1	0.8	20～50	土器	堅穴住居に隣接
配342	兵庫	東南遺跡	4次土壇墓6	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅲ類c	混石土坑	土坑	長方形	1.3以上	1.0	10～30	土器	
配343	兵庫	東南遺跡	4次土壇墓9	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅲ類c	混石土坑	土坑	長方形	0.7以上	0.8	10～30	土器	
配344	兵庫	東南遺跡	9次配石土壇	後期前葉	北白川上層式1～2 期	不明	不明	不明	不明	5.5	1.9			
配345	兵庫	片吹遺跡	集石土壇 SX06	後期中葉か		Ⅲ類b	集石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.7	5～20	石皿・剥片	
配346	兵庫	片吹遺跡	SB07集石遺構	後期初頭	中津Ⅱ式か	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	0.8	0.4	10～20	磨製石斧	
配347	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK02	後期前葉	北白川上層式1期	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	円形	1.5	1.5	40～60	土器, 礫石器	
配348	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK03	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.0	0.7	20～30	土器, 礫石器	
配349	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK04	後期前葉	北白川上層式2期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整円 形	1.3	1.3	20～30	土器, 磨石・蔽 石	
配350	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK08	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	0.9	0.8	20～30	土器	
配351	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK09	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整円 形	0.9	0.7	15	剥片	
配352	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK12	後期前葉	北白川上層式1～2 期	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整方 形	0.9	0.8	30～40	土器, 礫石器	

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配353	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK14	後期前葉	北白川上層式1～2期	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	不整楕円形	2.0	0.8	10/40	礫石器	
配354	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK15	後期前葉	北白川上層式2期	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	楕円形	0.9	0.6	30	土器	
配355	兵庫	延吉遺跡森ノ本地区	配石遺構 SK19	後期前葉	北白川上層式1期	Ⅲ類 a + d	側石+集石土坑	土坑	長方形	1.9	1.7	30～50	土器、石皿	
配356	兵庫	中ノ原遺跡	石囲炉 1	中期末葉～後期初頭		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	長方形	0.8	0.6	40～60		未報告
配357	兵庫	中ノ原遺跡	石囲炉 2	中期末葉～後期初頭		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	長方形	0.7	0.6	40～60		未報告
配358	兵庫	中ノ原遺跡	石囲炉 3	中期末葉～後期初頭		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	長方形	0.8	0.6	40～60		未報告
配359	兵庫	中ノ原遺跡	土坑 2	中期末葉～後期初頭		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.8	0.9	20～30	なし	
配360	兵庫	中ノ原遺跡	土坑 3	中期末葉～後期初頭		Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.8	0.9	10～30	土器、石棒、骨片	埋土に石棒、微細骨片のほか土器片多く含む、未報告
配361	兵庫	中ノ原遺跡	土坑 4	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	1.1	1.0	15～40	骨片	
配362	兵庫	中ノ原遺跡	土坑 5	中期末葉～後期初頭		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.3	0.8	10～30	なし	
配363	兵庫	中ノ原遺跡	土坑 7	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	1.2	1.0	10～30	なし	
配364	兵庫	貝野前遺跡	SK-67	後期前葉	四ツ池式か	Ⅰ類 b 3	集石状	土坑	楕円形	1.3	0.9	10～30	土器細片	
配365	兵庫	貝野前遺跡	SK-70	後期前葉	四ツ池式か	Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	30～40	ドングリ、土器	数千粒の炭化種子（ドングリ）が出土
配366	兵庫	広根遺跡	A-1・2区集石土坑 SK01	後期初頭	中津Ⅰ式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整楕円形	1.5	1.1	20～50	土器、石製品	土器は大形の破片を含む、埋土中の炭化物の ¹⁴ C年代は4,012±26BP
配367	兵庫	広根遺跡	H-1区堅穴住居跡石囲炉	中期末葉～後期初頭		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.5	0.3	30	焼土	礫は被熱、炉周辺ピット内炭化物の ¹⁴ C年代は3993±25BP
配368	兵庫	小路頃才ノ木遺跡	土坑	後期初頭か		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.5	0.8	20～50	なし	
配369	兵庫	小森岡遺跡	集石 SX1	後期初頭	福田K2式	Ⅰ類 d 2	散石状	なし	不整形	0.8	0.6	5～15	なし	周辺にも礫が散在(磨石・敲石含む)
配370	兵庫	与井高尾遺跡	集石土坑	中期末葉	北白川C式	Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	楕円形	1.7	1.0	10～40		
配371	兵庫	与井高尾遺跡	石囲炉	中期末葉	北白川C式	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.5	0.5	30～50		
配372	奈良	玉手遺跡4次	石囲遺構	後期初頭	中津Ⅱ式	Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	0.7	0.6	10～40	土器	炉内に土器片を内面上向きで重ねて埋置、住居は検出されず
配373	奈良	布留遺跡堂垣内地区	立石遺構	後期初頭	中津式	Ⅰ類 e 2	立石状	なし	楕円形	0.5	0.2	40	土器片	立石は台石を使用
配374	奈良	布留遺跡堂垣内地区	炉 1	中期末葉		Ⅳ類 a	側石土坑	土坑	方形	1.2	1.2	20～50	なし	同一の住居址床面に石囲炉が2基存在

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配375	奈良	布留遺跡堂垣内地区	炉2	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅳ類b	側石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	20～30	土器	内部に土器片を重ねて埋置、同一の住居址床面に石囲炉が2基存在
配376	奈良	広瀬遺跡	竪穴住居	後期初頭～前葉		Ⅳ類a	側石土坑	土坑	方形	0.6	0.6	20～40		
配377	奈良	稲渕ムカンダ遺跡	G-2集石遺構Ⅱ	晩期初頭か		Ⅰ類b2	集石状	なし		0.8	0.8	10～20	なし	
配378	奈良	宮滝遺跡	人骨獣骨出土地点1	後期後葉～晩期初頭か		Ⅰ類f1	列石状?	なし	不明	不明	不明	20～30	土器片, 石鏃, 剥片, 焼人骨・焼獣骨, 炭化物	
配379	奈良	宮滝遺跡	人骨獣骨出土地点2	後期後葉～晩期初頭か		Ⅰ類f1	列石状?	なし	楕円形	不明	不明	20～30	焼人骨・焼獣骨, 炭化物	
配380	奈良	宮の平遺跡	竪穴住居5004上集石	後期初頭～前葉		Ⅰ類c1	集石状	竪穴建物	不整形	10.0	7.2	20～40	土器, 石皿・蔽石・磨石, 石棒	竪穴住居SH5004の上面, 礫石器は破損, 人為的な礫集積として報告
配381	奈良	宮の平遺跡	竪穴住居5005上配石	後期初頭	福田K2式	Ⅰ類d1	散石状	竪穴建物	不整形	6.0	4.5	20～40	土器, 石皿・蔽石・磨石, 石棒, 炭化物・焼土	竪穴住居SH5005の上面, 礫石器を多く含む
配382	奈良	宮の平遺跡	土坑2009	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	2.3	1.5	20～80	土器, 石器	
配383	奈良	宮の平遺跡	土坑2019	後期初頭		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.5	0.7	10～30	土器片	
配384	奈良	宮の平遺跡	土坑2041	後期初頭	中津式か	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	円形	0.9	0.9	20～40	土器片, 磨石・蔽石	
配385	奈良	宮の平遺跡	土坑2043	後期初頭	中津式	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.2	0.7	20～40	土器片	
配386	奈良	宮の平遺跡	土坑2097	中期末葉	北白川C式新	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	1.2	1.0	10～40	土器, 石棒, 剥片石器, 石鏃, 石皿・蔽石	礫石器類埋納土坑として報告
配387	奈良	宮の平遺跡	土坑2100	後期初頭	福田K2式古	Ⅱ類b	混石土坑	土坑	楕円形	1.8	1.5	10～30	土器, 剥片石器, 石鏃	土器片は大破片を含む
配388	奈良	宮の平遺跡	土坑2105	後期初頭		Ⅰ類a	積石状	土器埋設遺構	楕円形	1.1	0.9	10～50	土器, 磨石・蔽石・石皿	検出面から約50cmの積石
配389	奈良	宮の平遺跡	土坑2107	中期末葉～後期初頭		Ⅱ類b	混石土坑	土坑	不整形	2.8	1.2	20～50	土器, 石皿	石皿は被熱
配390	奈良	宮の平遺跡	1号立石	中期末葉か		Ⅰ類e1	立石状	土坑	円形	0.3	0.3	20～50	骨片, 炭化物, 土器, 石皿	
配391	奈良	宮の平遺跡	2号立石(土坑2006)	中期末葉	北白川C式中段階	Ⅰ類e2	立石状	土坑	楕円形	0.9	0.4	70	焼土, 炭化物, 石鏃	
配392	奈良	宮の平遺跡	3号立石(土坑2017)	中期末葉か		Ⅰ類e1	立石状	土坑	不整形	1.4	0.9	20～60	土器片	
配393	奈良	宮の平遺跡	土坑2016	中期末葉か	北白川C式か	Ⅱ類a	集石土坑	土坑	楕円形	0.9	0.9	20～60	土器片, 剥片石器, 磨石・蔽石・石皿, 石鏃	立石3号に対をなすものとして報告
配394	奈良	宮の平遺跡	上層配石遺構群	後期初頭～前葉		Ⅰ類c1	積石状	なし	不整形	10.0	10.0	20～60	土器, 石棒, 磨石・蔽石・石皿	5m程度のブロックにわかる

表 5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配395	奈良	宮の平遺跡	下層配石遺構群	後期初頭	福田 K 2 式	I 類 c 1	積石状	なし	不整形	10.0	10.0	20～60	土器、石棒、磨石・ 石・蔽石・石皿	竪穴住居5005上面配石と 一連
配396	奈良	宮の平遺跡	土坑22023	後期末葉	滋賀里 I 式	II 類 a	集石土坑	土坑	楕円形	2.6	1.8	10～60	土器、石皿・磨石・ 石・蔽石	下層に礫群、上層に土器・ 石器の集積
配397	奈良	宮の平遺跡	土坑29131	後期初頭	中津式	I 類 a	積石状	土坑	不整形	1.6	1.2	10～60	土器、磨石・蔽石・ 石皿	石皿 3 点と板石 1 点が組 み合わさる
配398	奈良	宮の平遺跡	土坑29245	後期初頭か		II 類 b	混石土坑	土坑	楕円形	1.1	0.9	20～50	石皿・磨石・蔽石	板状礫が倒れた状態で検 出、報告ではもとは立石 と想定
配399	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-1	後期初頭		I 類 b 2	集石状	土坑	不整楕 円形	0.8	0.6	10～20	土器片	礫は被熱
配400	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-2	後期初頭	中津式	I 類 e 1	立石状	なし	楕円形	0.6	0.4	10～20	土器片	立位の礫も20cm程度でや や小ぶり
配401	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-3	後期初頭	中津式	I 類 b 2	集石状	なし	楕円形	0.8	0.5	10～20		
配402	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-4	後期初頭	中津 I 式	I 類 d 1	散石状	なし	不整形	3.1	2.1	10～ 20/50	土器片、石皿	50cm程度の石皿を中心部 に含む
配403	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-5	後期初頭	中津 I 式	I 類 b 2	集石状	なし	楕円形	0.6	0.5	10～20	土器片	
配404	和歌山	市脇遺跡	集石遺構 SX-7	後期初頭		II 類 a	集石土坑	土坑	方形	0.8	0.6	10～20		礫は被熱
配405	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	配石遺構 1 (3143)	後期初頭	中津式か	I 類 d 2	散石状	落ち込 み	不整楕 円形	2.5	2.0	5～20	土器、スクレイ パー	
配406	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	配石遺構 2 (3144)	後期初頭	中津式か	II 類 b	混石土坑	落ち込 み	不整形	2.5	1.7	10～20	土器片、石棒	中央部で大型石棒が立位 で出土
配407	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 2 (3152)	後期初頭	中津式か	I 類 b 2	集石状	落ち込 み	楕円形	1.1	0.5以上	10～20	土器細片	被熱した礫も含む
配408	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 3 (3154)	後期初頭	中津式か	I 類 d 2	散石状	落ち込 み	不整形	1.7以上	0.7以上	10～25	なし	被熱した礫も含む
配409	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 4 (3178)	後期初頭	中津式か	II 類 b	混石土坑	土坑	円形	1.2	1.1	10～25	土器細片、石礫	
配410	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 5 (3252)	後期初頭	中津式か	I 類 d 2	散石状	なし		1.2	0.7	10～25	土器、磨石・蔽 石	
配411	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 6 (3189)	後期初頭	中津式か	II 類 a	集石土坑	なし	不整楕 円形	1.2	1.1	10～25	土器、剥片	2つの集石遺構が重複し たものか
配412	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 7 (3217)	後期初頭	中津 2 式	II 類 b	混石土坑	土坑	円形	0.7	0.6	40	土器、台石、ス クレイパー	台石が土坑上に平置きさ れるもの、報告では調理 遺構と推定
配413	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 8 (3218)	後期初頭	中津式か	III 類 c	混石土坑	土坑	楕円形	1.6	1.2	10～25	土器、石器	
配414	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構 9 (3219)	後期初頭	中津式か	II 類 a	集石土坑	なし	楕円形	0.8	0.5	10～25	土器細片、剥片	
配415	和歌山	丁ノ町・妙寺遺跡	集石遺構11 (3152)	後期初頭	中津式か	I 類 d 2	散石状	なし	不整形	2.2	0.5	10～30	土器細片、剥片	
配416	和歌山	中飯降遺跡	大型竪穴建物 4 (10050)	後期初頭	中津 II 式	II 類 b	混石土坑	竪穴建 物	方形	9.0	6.5	20～60		
配417	和歌山	中飯降遺跡	10033埋設土器	後期前葉	北白川上層式 1 期	I 類 b 1	集石土坑	土器埋 設遺構	円形	0.6	0.6	20～30		
配418	和歌山	中飯降遺跡	大型竪穴建物 1 (9001)	後期前葉	芥川式～北白川上層 式 1 期	II 類 b	混石土坑	竪穴建 物	円形	15.0	15.0	10～40	土器、石器	建物覆土に礫が含まれる もの、上層は小礫・下層 は大礫

表5 つづき

No.	府県	遺跡名	遺構名称	時期	型式	類型	配石 形態	下部 遺構	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	礫径 (cm)	伴出遺物	備考
配419	和歌山	中飯降遺跡	8120配石土坑	後期前葉		Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.2	1.0	10～40		
配420	和歌山	中飯降遺跡	8164配石土坑	後期前葉		Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.2	0.8	30～40		
配421	和歌山	中飯降遺跡	8134配石土坑	後期前葉		Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	10～40		一部の礫は立石状をなす 土坑の上層にのみ礫が集中
配422	和歌山	中飯降遺跡	8095配石土坑	後期前葉		Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	円形	0.6	0.6	10～20		
配423	和歌山	中飯降遺跡	8227配石土坑	後期前葉		I 類 e 2	立石状	土坑	不整形 楕円形	0.8	0.7	10, 40		大型礫が立位で埋没
配424	和歌山	中飯降遺跡	8196配石土坑	後期前葉		Ⅱ類 a	集石土坑	土坑	不整楕 円形	1.4	1.0	20～30		
配425	和歌山	西飯降Ⅱ遺跡	1351配石	後期中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.5	1.0	20～40	石鏝	
配426	和歌山	西飯降Ⅱ遺跡	2666配石	後期中葉		Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.5	1.0	30～40		
配427	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	土壇墓 SK-01	後期前葉	北白川上層式 1 b 期	Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	0.9	0.7	20～30	土器, 骨片	土坑底に土器片敷き
配428	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	土壇墓 SK-02	後期前葉	北白川上層式 1～2 期	Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	不整楕 円形	1.4	0.8	20～30	土器, 骨片	
配429	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	配石遺構 SX-01	後期前葉	北白川上層式 2 期	I 類 c 3	集石状	土坑	楕円形	3.2	2.4	5～10/ 30～50	土器, 骨片	SX-01・02は一連のもの か
配430	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	配石遺構 SX-02	後期前葉	北白川上層式 2 期か	Ⅲ類 c + d	側石+混石 土坑	土坑	楕円形	1.5	0.9	5～10/ 30～80	土器, 骨片	
配431	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	配石遺構 SX-03	後期前葉	北白川上層式 3 a 期	I 類 c 1	集石状	なし	不整形	5.0	4.5	10～40	土器	配石構築後に土器捨て場 となる
配432	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅰ	配石遺構 SX-04	後期前葉か		Ⅲ類 b	集石土坑	土坑	長方形	1.0	0.6	5～10/ 40	硬玉製丸玉	40cmの礫の下に小石を敷く
配433	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	土壇 JSK-06	後期前葉	北白川上層式 1 期	Ⅲ類 c	混石土坑	土坑	長方形	1.3	0.7	20	土器	完形の鉢が土坑底面の板 石の上に埋置
配434	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	土壇 JSK-09	後期前葉		Ⅱ類 b	混石土坑	土坑	方形	1.2	1.2	10～50	土器	大形の土器片を含む, 土 器は内面上向き
配435	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	配石遺構 JSX-07	後期中葉	元住吉山Ⅰ式	I 類 d 1	散石状	なし	不整形	2.0	2.0	10～40	土器, 土偶	
配436	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	集石遺構 JSX-08	後期中葉		I 類 b 2	集石状	土坑	楕円形	0.4	0.3	10		
配437	和歌山	溝ノ口遺跡Ⅱ	集石遺構 JSX-09	後期中葉	一乗寺 K 式	I 類 b 1	集石状	なし	円形	0.6	0.6	10～40	土器, 焼土塊	JSX-07より10cm下位
配438	和歌山	船岡山遺跡	集石遺構	後期初頭か		I 類 c 3	集石状	なし	不整楕 円形	3.5	3.0	10～90		
配439	和歌山	栗生遺跡	集石 1	後期初頭～ 前葉	中津式～北白川上層 式 2 期	I 類 c 3	集石状	土坑	楕円形	2.4	1.3	10以下 ／20～ 30		
配440	和歌山	栗生遺跡	集石 2	後期初頭～ 前葉	中津式～北白川上層 式 2 期	I 類 b 2	集石状	土坑	楕円形	1.8	1.2	5～10/ 20		
配441	和歌山	徳蔵地区遺跡	配石遺構 1	後期前葉		I 類 c 1	集石状	なし	円形	2.2	2.0	20～40		
配442	和歌山	徳蔵地区遺跡	土坑2538	後期前葉		I 類 a	積石状	土器埋 設遺構	円形	1.1	1.1	20～40	埋設土器, 石棒, 磨石・石皿類, 削器	
配443	和歌山	徳蔵地区遺跡	土坑1162	後期前葉		I 類 b 2	集石状	土坑	楕円形	1.6	1.4	10～20		
配444	和歌山	下尾井遺跡	配石遺構	後期前葉～ 中葉か		Ⅲ類 b + d	側石+覆石 土坑	土坑	長方形	0.9	0.5	30～60		南半のみ蓋石あり, 遺物 なし